男女性格分析

# 精神分析

★第5巻・第5號★昭和12年9月・10月★

主要項目



詳細目次は巻頭に

T・I・P・A・ VERLAG




東京精神分析學研究所出版部

岩倉具榮譯

# 理想の家族

## K・マンスフィールド短篇集

定價送料共金一圓九十錢　（四六判二百五十頁 布裝箱入美本）

精神分析學と露文豪チエホフとの影響を受けて、獨自の金屬的鋭さと可憐優美の光彩とを放つ英國現代文藝界の名花マンスフィールドの珠玉短篇は、從來、岩倉氏の名譯に依つて『精神分析』誌上に逐次紹介せられて來たが、こゝにそれ等を纒めて待望の一書は遂ひに讀書界に送り出された。既發表のものは頁數その半に足らず、新發表のものに於いて殊に原作者の傑作を窺ふことが出來る。傳記と鑑賞案内とを添へ、かゝる親切の譯書はわが飜譯史上にも稀ではなからうか。

（口繪二葉）マンスフィールド及びその夫君ミドルトン・マリ

作品――

ルフト鑛泉場。炎。逃避。風は吹く。この花。心理學。芹の漬物。ブリル孃。理想の家族。密月。新月灣のほとり。

附錄――

一、マンスフィールドの生涯（ミドルトン・マリ）

二、作品分析鑑賞案内（譯者）

大槻憲二著（增訂第三版）
**精神分析概論**
（定價送料共・金八十六錢）

本鄉區動坂町三二七・（振替）東京七八八一七番

東京精神分析學研究所出版部



# 男女性格分析號・內容目次

# 『精神分析』第五卷·第五號

# 精神分析

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

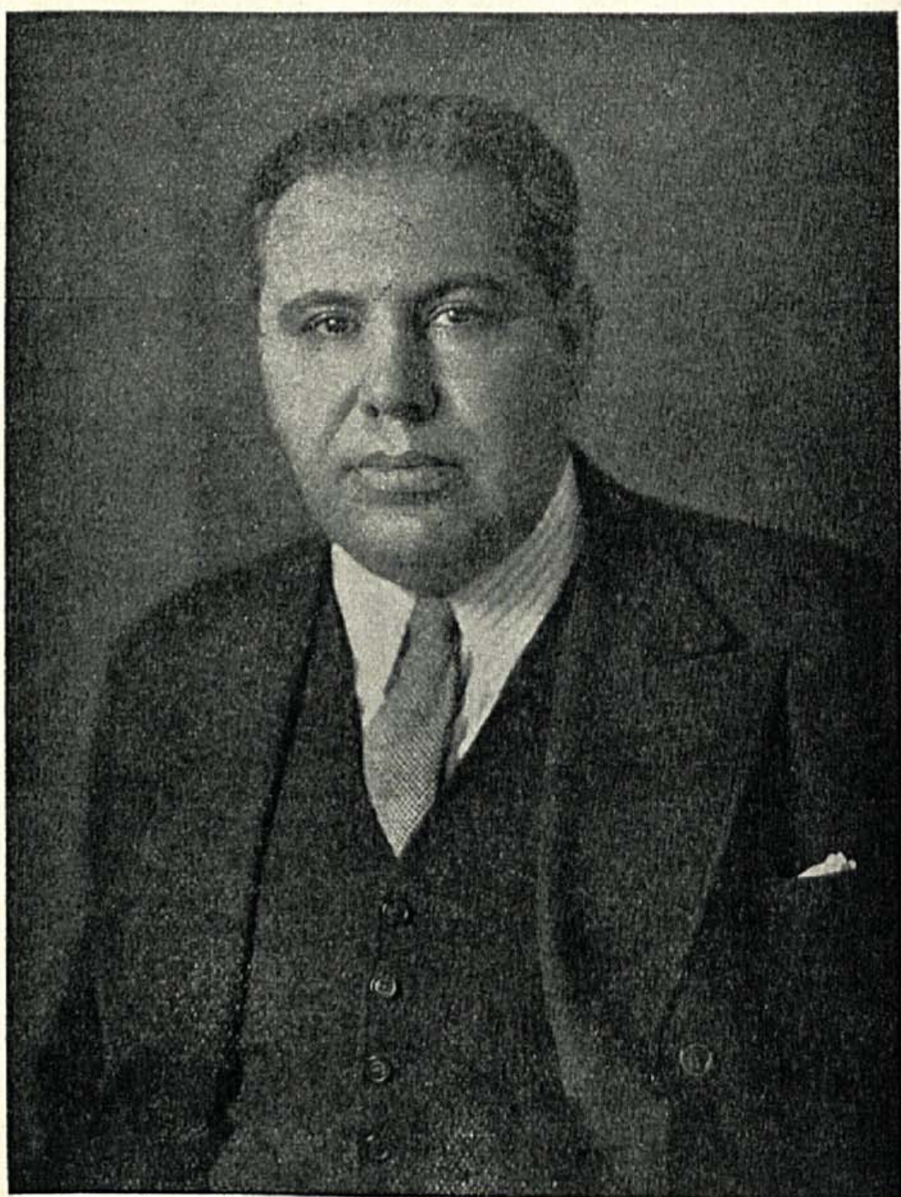
半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料共

昭和十二年七八月 男性と女性 第五卷第四號





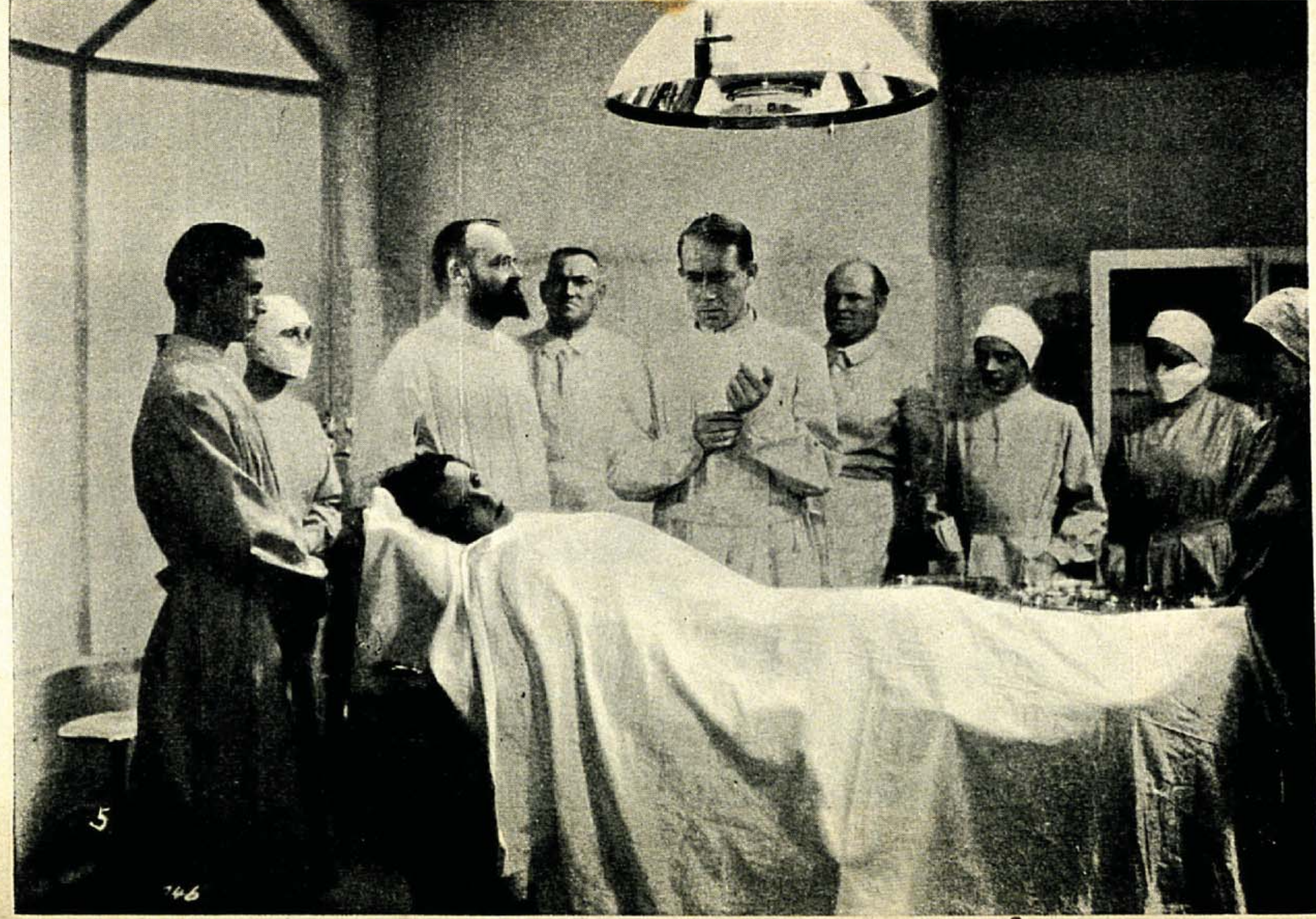
東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番



Dr. Franz Alexander

フランツ・アレキザンダ博士

(木村氏譯稿及び彙報欄參照)



『魂を失へる男』の一場面——狂へるデュマルタン醫師のためにネガール夫人が血清の試驗臺とならんとせるところ。（時評欄參照）
前列左よりヴェント、チェルコ院長及びデュマルタン。右より三人目がアンナ看護婦。寢臺に横はれるがネガール夫人。

『精神分析』第五卷 第五號 卷頭言

# ★性格は意識的方法では改造せられぬ

世の中には、自分又は自分の身邊のものゝ性格をもてあましてゐる人々は隨分多いのだが、性格改造の方法に就いては何の見解をも持つてゐないやうである。さうしてたゞ叱つたり矯めたり、つまり意識的工作を加へることしか知らない。併し性格の根源はもつと深いところにあるのだから、改造し得るにしても、さう云ふ外面的な方法で何ともなるものではない。性格は肉體に決定せられてゐるのでなければ無意識的要素に依つて決定せられてゐる。正しくはこれは兩種の諸要素に依つて決定せられてゐるのであらう。勿論、社會的要素と呼ぶことの出來るやうなものも、その間にそれ等の形をとつて浸透してゐることではあらう。我々の立場ではその無意識的要素を處置するのを任務とするのである。少くとも、分析的方法に依つてのみ改造せられ得る性格、これ以外の方法では何とも手の出しようのない性格と云ふものは相當に多い。その限りにおいて我々の方法は意義と存在理由とを主張し得る。

たる國王に對する彼の敵意を毫も緩めなかつた。當時彼の書いたものを讀むと、至るところでパオリその他のコルシカの愛國者を絕讃し、彼等をギリシヤ、ローマの英雄に比肩せしめてゐる。彼は一時懷鄕病が昂じて自殺に心を惹かれたが、コルシカの運命に思を潜めてそれを思ひ止まり、ブルータスの崇高な行動を以て自らを激勵してゐる。革命の起つた一七八九年から九三年に至る間、ナポレオンの心を占めてゐた唯一のことは、フランスの羈絆からコルシカを脫せしめるといふことに盡きてゐる。士官の身である彼は、そのためには昇進も、自由も、生命も敢て顧慮しなかつた。

一七八九年に招集された三民會議に、青年を以て編成する民兵部隊を制定する議案が提出された。この議案は政府の峻拒するところとなつたが、この峻拒を機會にナポレオンはコルシカの首都アジャッシオで叛亂を企てたのである。同月九月から休暇でアジャッシオにあつたナポレオンは、同市の愛國クラブに赴き、反動的な政府を顚覆し、國民兵團を組織し、その力を以てアジャッシオの衛城を奪取し、フランス人を驅逐する計畫を開陳した。彼はどうやらかうやら國民兵團の組織には成功したが、しかしその時には既に守備兵は增强され、國民兵團と愛國クラブは解散され、運動は嫩葉の中に潰滅の運命に見舞はれてゐたのである。

しかしこの失敗も彼の意氣を沮喪せしめるには足りなかつた。彼はフランスの軍隊に勤務を續けながら、頻々と長期の休暇をとり、アジャッシオ奪取とフランス人驅逐の畫策に餘念なかつた。彼は上官の心證などには頓着しなかつた。一七九二年、他のフランス各地と同じくアジャッシオで義勇兵が募られるや、彼はその指揮官を志し、投票買收、僞證、個人的自由の制限などあらゆる策謀を試みて、ついにその目的を達したのである。一七九二年の踰越節(三月)の折、彼はこの手兵を用ひて豫ての目的を達成しやうとしたが、フランス人指揮官の監視によつて又も失敗した。彼の祖國熱が昂進するに連れ、それに比例してフランス憎惡熱が高まつたことはいふまでもない。ナポレオンは、コルシカにあるフランス人の鏖殺を考へてゐたのである。

パオリに對する彼の愛情は說明するまでもない。ナポレオンにとつては、パオリは美と偉大と慧知と高貴の權化で

あつた。彼は子供の時から、遊び仲間や召仕の口からパオリの名が愛と尊敬を以て語られるのを聞いてゐたのである。彼はパオリの名を聞く毎に、全身に熱を覺え、頭がカツとなるのであつた。パオリはナポレオンの神であり、彼はたゞひらすらパオリに似ることを念願としてゐたのである。彼のパオリ熱は昂じて、パオリに好意を持つ人に對しては、誰にでも無條件の信頼を寄せるまでになつた。

一七八九年七月十二日、ナポレオンは脱稿したばかりの自作の論文「コルシカに關する書翰」を献ずる心算で、ロンドンのパオリ宛に手紙を書いてゐるが、その中で彼は機會を見てロンドンに赴き國事を談じたいといひ、又「私の母、レチシア夫人は、コルテ時代の思出を閣下に思ひ起させる樣私に命じました」と述べてゐる。一七九〇年、パオリが大赦によつて歸國した時、これを熱狂して迎へたものにボナパルト一家があつた。ナポレオンは休暇を得てコルシカへ歸る毎に、しげ〳〵とパオリを訪れ、パオリから君はプルターク英雄傳中の人物であるなどゝいふ褒詞を貰つて感泣してゐたのである。

ナポレオンのコルシカに對する祖國愛、及その國民的指導者パオリに對する献身に就ては以上にその概略を記した。次に今日に至るまでナポレオンの傳記者、史家を惱ましてゐる謎、彼の生涯の一轉機を簡單に述べて見やう。

×

一七九三年の初め、フランスはサルヂニアに征討軍を送つたが、この征討は完全な失敗に終つた。その年の三月三日、この征討に從軍したナポレオンはコルシカに歸つたが、祖國の政治情勢は前年に比して一大變化を來してゐた。一月二十一日、パリに於てルイ十六世の斷首が行はれるや、豫てフランスの植民地をねらつてゐた英國は、これを口實にフランスに對して宣戰を布告した。コルシカに於ては、義勇兵團は解散されて正規兵を以て代へられ、パオリの行政的軍事的權力は、少からぬ制限を蒙ることゝなつた。このパオリの權力削減は、一面彼の反對者の策謀によるものであつたが、他面イギリスに長く亡命生活を送り、親英的傾向のあるパオリに對する政府の不信が原因でもあつた。パオリ自身も又その親英的傾向を決してかくさなかつた。このコルシカ政府とフランス政府の對立は、フランス議會

が四月二日、コルシカ駐在の政府代表にパオリ逮捕を命ずると共に、俄然險惡化せざるを得なかつた。コルシカ國民は一齊にパオリ擁護に蹶起したのである。

ナポレオンもその例に洩れなかつた。彼はフランス議會宛の一種の訴狀を自ら起草し、パオリがフランスを裏切り、英國にコルシカを賣り渡すが如きことの決してあり得べからざることを熱心に說いた。しかしこゝに異とすべきは、昨日まであれ程强い憎惡をフランスに向つて懷いてゐたナポレオンが、この時突如としてフランス政府代表と通謀して、コルシカのフランス復歸の奔走を開始したことである。彼はこの目的のために、今度はパオリ派の國民兵團の手中にあるアジャッシオの衞城の襲擊を幾度か企てゝゐる。更に同年六月一日、ナポレオンは國民議會へ提出した軍狀報告の中で、パオリを親英的な野心家となし、彼を以てフランスの不幸につけ入る危險人物と看做し、サルヂニア軍事行動の失敗を以て彼の責任と彈劾し、コルシカ人がフランス人となることを欲せぬ陰險な人物だと攻擊してゐる。

この報告の內容がコルシカに知れると共に、ボナパルト一家に對する國民の激昂はその極に達し、家は燒かれ、財產は破壞された。もし母のレチシア夫人の力がなかつたら、ボナパルト一家は鏖殺の憂目を見たであらう。六月十一日、ナポレオンは一家眷族を引連れ、フランス、ツーロンに向つて逃亡した。

パオリとナポレオンのこの絕交は、フランスとナポレオンの歷史に決定的な影響を及ぼしたと、あらゆるナポレオン史家は一致していつてゐる。しかしこの評價は過小の嫌いがある。この絕交は、人類全體、全世界の運命に決定的影響を及ぼしたといはなければならない。そして又パオリとのこの絕交は、我々が歷史上知つてゐるナポレオン――二十年間世界に緊張を强ひ、破壞と不安と恐怖を至るところにもたらし、新しい進化の道を人類の前に開いたナポレオン――が生れ、完成された心理的瞬間なのである。

そこで次の問題が生ずる。ナポレオンの感情に生じたこの旋回の動機は一體何んであるか？

歷史的硏究が不完全な說明しか與へられないのは正にこの一點である。

歷史家や傳記者は、この時期のナポレオンとその周圍について、詳細緻密な、間然するところのない硏究を發表し

てゐる。パオリの親英的傾向、パオリとその競爭者サリセッチとの軋轢、サリセッチの親佛主義、ナポレオンとサリセッチとの關係、コルシカ國民の動搖、ナポレオン兄弟に對するパオリの態度、ナポレオンの双股膏藥的策謀、パオリ派のボナパルト家迫害、等々實に至れり盡せりの研究がある。だがかゝる事實を後から後から列擧した上で、歴史家や傳記者の到達した結論といふのは、ナポレオンがこの大旋回を演じたのは、パオリよりもサリセッチの方がナポレオンに親切であつたとか、ナポレオンがコルシカ獨立の不可能を悟つたとか、長ずるに連れ理想よりも物質的利益を重く見るやうになつたからだといふ類のことに過ぎない。ナポレオンがコルシカ主義を捨てゝフランス主義に歸したのがサリセッチの影響だとすれば、彼はいかなる方法でナポレオンの心の琴線を搖ぶつたのであるか？ 何故サリセッチの感化が、もつと早くでも遲くでもなく、何故その瞬間にナポレオンの上に生じたのであらうか？ 又ナポレオンは他人の感化を受け易い人であつたといふ説明があるが、然りとすれば何故ナポレオンはもつと早く、例へばパリの士官學校時代に、又士官時代にフランス主義者に轉向しなかつたのであらうか？ これらの問題に關しては、歴史的方法は何んの解答をも與へないのである。

ナポレオン自筆の文書その他を基礎とする歴史家、傳記者などの研究は、彼がこの大旋回を演ずる一ケ月前には、未だ頑强なコルシカ黨、執拗なパオリ派であつたことを示してゐる。何がナポレオンをして、この國民的信念を一朝にして覆へさせたのであるか？ ある歴史家は、この變節をナポレオンの利己的動機、過度な野心、專制的性格などに歸してゐる。だがナポレオンの性質にこれらの特徴を認めるにしても、この彼の特質は二十年間、彼をして熱烈なコルシカ獨立主義であることを妨げなかつたのである。從つてこれらの性格的特質は、ナポレオンがその二十年來の確信を捨てたばかりでなく、その確信そのものを敵として突如立ち上つた事象を説明するには何んの役にも立たない。これを要するに普通の歴史的方法は、人類の歴史に大關係のあるナポレオンの生涯の一大轉回點を説明するのに全く無力なのである。歴史家でこの點を妥當に解釋し得たものは一人もない。

Ｈ・コンラッドは、その編纂した「セント・ヘレナ回想記」（ナポレオンの自叙傳）の序文で、この疑點にある光

明を與へてゐる。それは次の如く綴られてゐる。

「皇帝はその幼年時代又はその一家に何んらの歴史的重要性をも與へてゐない。彼は自分の生涯の歴史を、その榮譽の基礎となつた最初の武勲から始めることを欲した。ナポレオンがナポレオンたるに至るのを助けたすべてのものは抹消されねばならなかつたが、この點で彼は傲然とその發生の日を共和曆第一年と定めた大共和國の例に倣つたのである。」

しかしナポレオンがその少壯時代の歴史を述べるのを嫌つたのには、コンラッドの擧げた理由の他に別の理由がなければならない。ナポレオンが初めて自らフランス人であると感じたのは、ツーロンの砲兵隊を指揮した時である。そしてフランス人として、彼がツーロンに至るまでの自分の過去全體を歴史的重要性を有せぬとしただけではなく、更にそれを不快にさへ感じたといふことは無理からぬことである。けだし彼はそれまではコルシカ人であつたからだ。この故にこそ彼の青年時代の歴史は、如何にして彼がコルシカ人からフランス人になつたかといふことを我々に説明しなければならないのである。

一、ナポレオンは何故に、又如何にしてコルシカ人からフランス人になつたか？

二、何故にナポレオンはパオリと絶交したか？

我々が精神分析的方法によつて、こゝに明かにしやうと試みるのは、正にこの二つの重要な史的問題なのである。(註一)

註一。この「ナポレオンの精神分析」の原書は、「イマゴオ」第九卷第四號（一九一四年）に載つたイェーケルズ博士 Dr. L. Jekels の論文「ナポレオンの生涯に於ける轉回點」である。この論文はアンナ・ラチボンヌ夫人によつて佛譯され、「フランス精神分析雜誌」第三卷二號（一九二九年）に掲載の上、單行本となつて發行された。イェケルズ博士がこの佛譯本を東京精神分析學研究所に寄贈されたので、大槻氏の勸めに從ひ、淺學の私が敢てその紹介をお引受したわけてある。原文ではこゝまでの部分が全體の三分の一以上か占めてゐる。そこで私はこの部分を約四分の一に切詰めて意譯し、精神分析に亘る部分のみを逐字譯することにした。卽ち以下に譯出したものが、その完譯の部分に當るわけである。——譯者

# 二

この分析的論文に着手するに當つて、我々の手にナポレオンの成年時代の覺書と幻想、並びにその幼年時代の覺書の材料が多くあればなるほど、それだけ我々には都合がいゝわけである。我々はそれを一七八六年から九三年、即ちナポレオンの十七歳から二十四歳に至る間のボナパルト自筆の文書、即ち一度リブリに盜まれ、賣拂はれた記錄の中に見出すのである。

この彼の青年時代の著作には、すべての傳記者が一致して認めてゐる樣に、二人の著作家、ルーソオとレイナルの否定し難い影響の痕跡がある。この時代（一七八五―九二年）には、ナポレオンは謂はゞルーソー信者であつた。彼によれば、ルーソオは最も深刻な、又最も透徹した哲學者であつた。ルーソオの著作で、ナポレオンの敬服しなかつたものは殆んどない。このルーソオに對する彼の愛は、極めて容易に說明が出來る。けだしルーソオは一七六二年、その著「社會契約」の中で次の如く書いてゐるからである。

「ヨーロツパには立法の能力ある國が他に未だ一つあるが、それはコルシカである。この勇敢な國民が以てその自由を恢復し、擁護し得た勇氣と忍耐は、ある賢人がこの國民に自由を保てと敎へたのにまことに想應しいものである。私はこの小島國が、今にヨーロッパを驚嘆させるに違ひないといふ豫感を禁することが出來ない。」

餘生をコルシカで送りたいといふ熱烈な希望を洩らしたのは、このルーソオではなかつたか？　更に又ルーソオは、パオリと常に音信を怠らなかつた人である。

ナポレオンの文學上の第二のモデルは、これ又ルーソオに劣らぬコルシカ人の味方であつた。レイナル法師は「哲學的兩印度史」の著者であるが、彼は同書に於てコルシカ人の壓制者ジェノア人を痛烈に彈劾し、コルシカ人がやがて國民政府を恢興すること、並びにフランスの支配の沒落することを豫言した人である。

我々が今日有してゐるナポレオンの覺書は、旣に彼の執政官時代及帝制時代から、その主人公の幼年時代の追憶を

あらゆる方面から蒐集することに腐心して來たナポレオン傳記者たちの不撓の熱情の賜である。私はこの論文で參照した證據が、すべて確實極るものであることをいつて置く。その確實性が疑惑を許さぬものであることは、シュケエ及マソンの如き、傳説上の他の多くの物語に疑惑を挿み、歴史的眞實の前には架空譚や小説を犠牲にすることを敢て躊躇しなかつた良心的な研究者が、それを絶對的な眞實として引用してゐることでも明かに看取される。

我々は今この材料の助けを藉り、その當時のナポレオンの自筆記録を參酌して、パオリとナポレオンの軋轢を研究して見たいと思ふ。

この記録の第一のもの、前に述べたパオリ辯護の訴狀の中で、私はナポレオンが「彼(パオリ)は、今外國の侵略に對して祖國を防衞せんとしてゐる」といつてゐる一句に、特に注意を促がしたい。けだし當時のナポレオンの記録に頻繁に出て來るこの「外國」といふ言葉には、自國といふことの反對の自然的な意味を遙かに超える敵對的な調子が、何時も常に伴つてゐるからである。

場所によつては、彼はその憎惡するジェノア人とフランス人の二國民を、「外國人」といふ言葉で形容してゐる。又「外國人」と「敵人」といふ二つの言葉を、同義語に使つてゐることさへある。例へば彼は十三世紀のコルシカ・ジェノア戰爭の際凌辱された一ジェノア婦人に、コルシカ人の首領シヌセロ・デラ・ロッカの面前で、「私は外國人であり、お前の敵だ」といはしめてゐる。(「コルシカに關する書翰」。マソン及ビアジ編、四〇八頁)その上この書を讀んだ者は、例へば同書四一六頁で、彼が「外國の援助」を論じて「輕率な奔走」となし、「祖國に大害を與へるもの」といつてゐるのや、或ひは「外國の氣候」を强ひられてゐるコルシカ人の運命を、彼が强い語調で憤慨してゐる表現に接する時、この表現が彼に於て强い否定的感情を伴つてゐるといふ印象を受けざるを得ない。

そして外國人に關するナポレオンのこの精神的態度、卽ち外國人とは常に對立して決して胸襟を開くことなく、何時もそれを遠ざけて、決して友人や同盟者と看做さず、唯だ敵の役割に於てのみ見るこの態度は、又その反對作用として内亂――彼がその「ボーケールの晩餐」の中で斷乎審判を下した内亂、「ナポレオンの同情を決して惹くことの出

来なかつた」（キルハイゼン）内亂に對する彼の深刻な嫌厭の中によく表はれてゐる。この態度は、いろ〳〵な研究者がよくいふ樣に、唯だコルシカ人の特徴である民族的心理の作用といふだけではなく、その他に個人的な根據がゐると私は見るのである。この外國人に對する憎惡が、ナポレオンにとにかく頗る早く表はれてゐたことは、私が次にコストンから引用する極めて確實な報道によつて明かとせねばならぬ。コストンによれば、彼は既に第一執政官の時代マルメーゾンで屢々その訪問を受け、鄭重に待遇したエギィユ氏（一七八四年、パリ士官學校在學時代の史學教授）に對し、數次の會談の中で次の如く語つたといふことである。

「先生から敎へられたことの中で、私に一番深い印象を殘したのは、ブルボン元帥の叛亂です。しかし先生が彼の最大の罪惡は國王を攻擊したことにあると敎へたのは誤りだと思ひます。ブルボン元帥の眞の罪は、外國人と通謀して祖國を攻擊したことにある私は考へます。」

第二の記錄、卽ちパオリ彈劾の文章の中には、頗る我々の注意を惹かざるを得ぬ一節があるが、その眞骨頂は「彼（パオリ）は、祖國をフランスとの結合から引離した」といふ批難の中に發揮されてゐる。

我々は既に序言の中で、パオリとの軋轢が爆發した當時、彼のフランスに對する憎惡が尙ほどれほど强かつたかといふことを見た。これについてシュケエが次の如く述べてゐるのは極めて正しい。

「ボナパルト中尉は、相變らずコルシカ人であつた。心の底から、全身一點の曇りもないコルシカ人であつた。その當時、このフランスの將來の主權者、後にフランスを大國民の名を以て謳歌し、フランスを第一に置くことを以て主義とし標語としたこの男は、未だフランス人ではなかつた。彼は後にあらゆる國民以上に尊重し、地上第一の國民と呼ばねばならなかつたフランス人を、未だ輕蔑してゐた。彼は後に世界最善の稱號と呼んだフランス人といふ稱號を、未だ自分に冠することを拒んでゐたのである。」

シュケエのこの言は確かに正しい。しかしそれは更に判然と述べるを要するのである。ナポレオンのフランス人に對する憎惡は、この時期に初めて生じたものではない。それは實に早く生じたものであつて、殆んどナポレオンその

人と同じ位に古いものである。パリの士官學校でナポレオンがフランスに叛逆の態度を示し、事あるごとにパオリに對する熱情をひけらかし、彼と共にコルシカ獨立のために戰ふ意を明かにしたことを語つてゐるのは、このシュケエその人ではなかつたか？　ナポレオンはパリに於ても以前のブリアンヌ時代の態度を變へず、フランスに對する抵抗によつてヨーロッパの稱讃を買つたコルシカ人を誇稱し、又ブリアンヌ在學の時と同じく大國民が小國民に迫つた戰爭を批難して止まず、それによつて上官のみならず、同僚とも重大な衝突をする種を蒔いたのであつた。彼は九歳になつたばかりでブリアンヌ幼年學校へ入學した時、コルシカをジェノアから引離してフランスへ引渡した政治家ショワスゥル公の肖像がそこにあるのを見た。するとこの子供は、見も知らぬ周圍に毫も脅へることなく、それに何んらの注意も拂はずに、いきなりショワスゥルに猛烈な罵詈を浴せたのである。この種の表現は、彼の幼年時代に決して少しとしない。私は特にコストン及その他の傳記者の語つてゐる一場の場面をこゝに述べて置きたいと思ふ。けだしそれはナポレオンの感情的傾向に得易からぬ光を投じ、彼の個性の心理的研究に基礎を供し、我々の今當面してゐる問題の解決を容易ならしむるものだからである。その問題の文章は、九歳か或はやつとそれを過ぎたばかりのナポレオンが、校長宅の食事に呼ばれた際、例の如く彼をからかつた一人の先生に次の如く答へたといつてゐる。

「パオリは偉人です。彼は祖國を愛してゐました。彼は彼の副官であつた私の父が、コルシカとフランスの結合に協力したことを赦さないと思ひます。父はパオリと同じ運命を辿つて、彼と枕を並べて戰死するのが至當であつたと考へます。」

このナポレオンの言が表明してゐるもの、卽ち彼の心では父の影像とパオリの影像とが、ある觀點に於て對立的役割を演じてゐるといふことを一時考察の外に置くと、我々はたゞ父に對する「結合に協力した」といふ批難と、十五年後のパオリに對する「結合から引離した」といふ批難を對照させて見て、この一見反對の如く見える二つの批難が、實に同一事實、二つの異る相貌を呈した同一現象に過ぎぬと認める他に仕方はないのである。

そしてこの對照の光りに照して見る時、今日まで極めて茫漠、極めて曖昧であつたナポレオンの姿の外貌は、突如

として理解され、明確になるのである。我々はコルシカ人と訣別する前のナポレオンと、訣別後のナポレオンの間に非常な對照を見る。排佛親英家が排英親佛家となり、アレキサンダー大王の彈劾者がその最も熱烈な崇拜者に變じ、ルーソオに對する尊敬が輕蔑に席を譲り、ルーソオをうるさい愚物と見るに至つてゐる。ジャコバン派、平等主義者、國王打倒家が、イタリイ軍總帥となり、諸侯の豪華を以て身邊を飾り、第一執政官となり、遂には皇帝となり、自ら殆んど神と信ずるに至つた。

この同じ對照は、「ルスタン反駁」の中で宗教を以て國家に大害ありとなし、ティヤナのアポロニウスをキリストの遙か上席に据へ、僧侶を唾棄してフリーメースンに改宗したナポレオンと、ヴィーランドと會談の際、「キリスト教は人間に安心の生活を與へ、國家の秩序と平和を、個人の幸福と希望と同程度に同時に保障する比類を絶した哲學體系である」と主張し、法王の祝福なしには帝冠を戴くを欲せず、法王自らをしてフオンテーンブロオに來らしめたナポレオン、その遺書を「朕は朕がその胎内に宿りたる使徒的ローマ教の中に死す」といふ言葉で書き初めたナポレオンとの間にも儼然として見られるのである。（つゞく）

# 芭蕉の性格とその幼少年時代

齋藤多喜男

## はしがき

露に洗はれて身顫ひする竹の葉の如き爽やかな心姿を引提げて天地自然の理に直入し、物我一如の三昧境に浸り了し、自己の詩をして宗教に近いものに迄高め得た芭蕉に對して、當時二千の蕉門は勿論、現在に至る迄多くの俳人が信仰的尊敬を捧げてゐる事は怪しむに足りない。凡そ俳句に志す人で芭蕉を研究せぬ者はなく、最近の俳壇には「芭蕉に還れ」の叫びを聴く。斯樣な次第であるから芭蕉に就いての著作は夥しい數に上り、從つて彼の藝術の解釋上には勿論、その傳記に就いても數多の異說を生んで居る。その內前者は致し方ないとしても、後者には今少し研究の餘地があると思ふ。卽ち、

一、傳記の著者は多く俳人であつて、俳聖として尊崇する芭蕉の生涯をして玉の如きものたらしめんとする自己の願望に囚はれるので、人間芭蕉の分析に重要なる事項は抑壓して了ふ。卽ち著者が自己分析されてゐない。

二、著者は重複決定、相反併存等の無意識心理過程の取扱ひ、卽ち分析法を知らぬ爲、意識的には互に矛盾せる如く思はれる二つ以上の史實に遭遇すると二者選一を行つて他のものを異說として除外し、或は兩者共に抹殺し、不明の儘にして置く。これは恰も夢が凝縮轉位等の仕事に依つてその意味を歪めて全く理解出來ぬものに變へるのと同じ

であるが、分析に際しては異說として抑壓されたものや陰蔽された不明點こそ最も重視せらる可きものである。尚、この不明點に他の同じく抑壓されたものが澤山逃げ込んで居る事は見落すには餘りに重要である。フロイドは分析治療中、患者に唯一つ秘密を許した爲にその治療が全く失敗に終つた實例を報告して居る。市内に一ヶ所丈け警察權の及ばぬ地域を設ければ、全市の犯罪者が盡く其所に集つて了ふ迄にさして長い時間を要せぬであらう。

三、藝術への精進を意識的なものと解し、實際にはそれが根本的な原動力であり昇華されて藝術活動となる所の無意識心理に於ける本能的なものを寧ろ藝術に對する障害の如くに人々は見て居る。而してその障害を克服した事に就いて彼の偉大さを讃へんとする代りに、始めから全くさうしたものゝなかつた聖人の如き芭蕉を描かんとする爲、リビドー的葛藤の眞相は前述の如く著者の檢閲に觸れて抑壓されて了ふのである。

以上三點は同じ樣な事の反覆であつて、要約すれば從來の芭蕉傳の多くは分析學的でないと云ふ事である。作句に際しては奔放な想像力や飛翔的な詩魂を自由に驅使する有能な俳人も傳記著述の仕事に向ふとその神通力を失つて了ふらしく、分析學的には餘り面白くないものが出來上る。その點、記錄的なものより少しは抑壓が、控へ目になつて居るモデル小說的なものゝ方に興味が深い。かうしたものを私は精神分析と云ふ一科學の對象として扱ふ事を成る可く避けたいのであるが、過去の作者に依つて抑壓され乍らも、創作の上に復活して居る異說を重要なものと認め、二者選一を重複決定と置換へて、合理的に綜合せしめて裏から見た人間芭蕉の姿を描いて見たい。非力な私のこの試みは、住宅を建築せんとする素人の引いた圖面の樣なもので、辛うじて各部屋の面積、配置等を示すに止まり、建築家に設計を依賴しなければ着工出來ぬ。專門技術の見地からは不合理、不可能な點もあるであらう事は豫想して居る。然し時には素人の思ひ付きから案外面白いものが出來る事もあらう。或る機械を分解して再び組立てた後に一つでも部分品が殘されたとすれば、それは完全に組立てられては居ないのである。何かの間違ひで他の餘計な部分品が紛れ込んで來る事もあらうが、それは何等かの利益を伴ふ史蹟、記念物、筆蹟等の僞作であつて、分析學的に興味ある方面に於ては假令傳記作者の檢閲に觸れて抹殺せられる事はあつても、新に無限の史實が僞造される事は稀である

と思はれる。

# 一、芭蕉傳中の不明點に就いて

改造社發行の綜合俳誌『俳句研究』は一流一派に偏して居ないし、その『芭蕉特輯號』（三ノ一）は執筆者に現俳壇の芭蕉學者を網羅して居るから、同誌揭載の芭蕉年譜（高木蒼悟氏稿）は現今最も廣く認められて居る代表的定說と見て差支へないであらう。數多い芭蕉論の內極めて僅なものにしか目を通して居ない私は、主に此の年譜を參考にして彼の傳記に就いて少しく分析的考察を加へて見たい。

人性の自然と矯飾的道德との矛盾に激發された芭蕉が矯飾や武士的規範から脫却し、自然と自由の漂泊生活に入り、寂びを歡び侘びを娛しむ淋しい享樂を生涯の計として選ぶ迄には激しい苦惱があつたに違ひない。伊賀藤堂藩の輕輩與左衛門の一子與作から、後世花ノ本大明神の稱號を謚られて神と祀られる芭蕉翁に至る迄の幾變轉の內でも、最も重要であり且つ興味深いのは、寬文六年二十三歲にして主君蟬吟の早世に逢ひ、心なき人々にあらぬ噂を立てられ剩へ肉親の兄にさへも嫂との仲を疑はれ遂に故鄕を捨てるの餘儀なきに至り、傷ける心と前途の不安とを抱き乍らも、藝術の道に志して苦難の生活を續けた京都に於ける七年間の修業時代であらねばならぬ。而も年譜に依れば「寬文七年京都に出で、季吟に國學、坦庵に漢學を修めたるは事實なる如し。」然し「伊賀脫藩後數年間消息不明」とあり、竹人の芭蕉傳に至つては「蟬吟子の早世後、寬文十二子の春仕官を辭して名を甚七と改め東武に赴く」とあり、此の年迄伊賀にあつたものとして、上京說をすら否定して居る。京都時代は、今では專門學者の研究で肯定されて居る所である。

伊賀に於て噂の相手であつた侍女お雪は彼の後を追つて上京、同棲し貧しい生活を切り廻して彼の研究を內助し、其の間一男一女を設けた。元祿七年お雪（壽貞）は子供の願を入れて初めて江戶の芭蕉庵を訪れた。然し芭蕉は共に在る事三月にして旅情動き、最後の旅とも知らず妻子と別れて出立した。彼等を助けて弟子桃隣と留守を預つて居た

猪兵衛宛六月三日付の書簡（『芭蕉翁眞蹟集』、『一葉集』）には

一、理兵衛細工無之時分せめて煩ひ不申様氣を可被付候。右の通り壽貞にも御申きかせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉。様子具に御申越可被成候。

と父性愛の濃かな所を見せて居る。同じく八日、壽貞病死の報に接した時、猪兵衛に宛てた書簡には

「壽貞無仕合もの、またおふう同じく不仕合、とかく難申盡候――中略――理兵衛もうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ、取亂し不申様御しめし可被成候　以上」

とあり、又『一葉集』中の芭蕉遺書其ノ一の冒頭には

一、伊兵衛（口授せるものなれば猪兵衛の誤りなるべし）に申候。當年は壽貞事に付いろ〳〵御骨折――中略――殘り候二人のものども十方を失ひうろたへ可申候。

とある。壽貞、理兵衛、おふうをそれぞれ壽貞（元の腰元お雪）と男子、女子と解さねば、以上の書簡の說明は付かない。または原文にまさとあるが私はまたとした。後に說明する。

一般に此の京都時代のみを不明として置けば、江戸へ下つて後は全く別れ〳〵になつて居たから「一生娶らず自然、子などはない」事になり、又未だ高名にならぬ修業時代の事とて史實も乏しく、此の點殊に多くの人の抑壓が働いたのではないであらうか。壽貞に宛てた書簡等が餘り殘つて居ないのもその爲と思はれる。

芭蕉自身も殊に此の時代の事は人に語る事を欲しなかつた様であるが、芭蕉の『行脚控』と稱するものゝ中に「女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬこと」と言ひ乍ら「總て男女の道は嗣を立つるのみ」と附加へて居るのは意味深いと思ふ。然し「娶らなかつた芭蕉」を信じて居る人々には始め大膽な假說として置いて、順次說明を重ねて行く事にする。

## 二、芭蕉の幼少年期に就いて

人類の運命はそのエディポス・コムプレクスであるとは屢々云はれる言葉であつて、生れた計りの幼兒は自己保存の本能に依つて第一に求めるのが母の乳房であるが、未だ自他判別の能力はない。其後漸次種々なコムプレクスが構成されて行くが、幼兒性感の第一回の開花期たる四五歳迄は殆んど母の擁護の内にあるのであるから、母から受ける感化は最も大きく殆んどその一生を支配するものである。

故にある人物を分析するにはどうしてもその幼年期及び母の性格を知る必要がある。胎敎の重要さを說いて居乍ら、幼兒期に於ける母親の愛撫が實は性的な要素を持つて居てそれが幼兒のコムプレクスとして如何なる影響を與へるかを問題にして居ないのは、不思議でもあるが、致方のない事であらう。偉人の母に就いての逸話は可成りあるが、修身の題材にはいゝとしても分析的なものは少い樣である。

芭蕉は胎內空想が非常に强かつたが、一生涯リビドーを定着させて居た彼の母に對する感傷愛の根源は、母のヨカステ・コムプレクスにあると思ふ。

本稿は別に纏つた芭蕉傳の形態を取るものでないが、今述べた如き幼年期の重要性に鑑み、先づ芭蕉の幼少年期に就いて筆を進める。

年譜に依れば、寛永二十年伊賀國上野に生る（柘植に生るとの說もあり）とあり、出生の年代は確實とされてゐるが出生地に就いては既に異說を生じて居る。母の實家が柘植であれば里に歸つてお産をするのはよくある事で別に問題になるまいし、「臍の緖に泣く故郷」は當然上野でなければならない。

父は藤堂家城代家老良精の家臣で極く輕輩（鐵砲鍛冶三十石）松尾與左衛門（又儀左衛門）母はおよし（又はいよ）で忍術家百地家の出と云ふ說もある。

同胞に就いては何等年譜にないが、或は二人兄があつたと云ひ（上野松峯）或は二男四女（芭蕉翁全傳）とも云はれるが、彼が唯一通自ら認めた遺書の宛名松尾半左衛門は彼の兄である。他に一人の兄（長男）があつたが、病身の爲勤めにも上らず、町外れに寺小屋の樣なものを開いて居て、芭蕉が伊賀を出奔する前の年に死んだと云ふ說を私は

執りたい。

年譜には「正保二年（二歳）病身のため金作と改名し」たとあるが、慶安二年六歳にして若殿の御伽（小姓）に召される迄何等の記錄もない。故に彼の幼年期に就いては之丈けの史實と後に彼の言行藝術に現れたものから分析綜合して想像する他ないと思ふ。

當時は一般に男尊女卑の傾向があつたが、彼の母は普通以上の劣等感を持つて居たらしい。即ち夫の身分の低い事、自分の生れが人の嫌ふ忍術家である事、長男は病身であり次男は餘り才能のない事等である。强い劣等感は反面に强い優越慾を抱かしめる。母は息子に依つてそれを滿足させ樣とする。芭蕉の露出慾、即ち昇華されて藝術となつた所のものは、この母の劣等感の爲に培はれたかも知れない。母親の愛情は末子へ集中され易いが、彼が生來の素質の優秀さから母に大きな期待を與へた事と病身であつた事とが一層これを容易ならしめた。彼は兄の所へ遊びに行くので普通より早く學問に接する事が出來たし頭もよかつたので、近所の評判もよく、母は內心益々希望に滿ちて彼を愛し信頼し、無意識に於ては夫との同一視が起つて居たのであらう。此の母のヨカステ・コムプレクスに依つて彼のエディポス・コムプレクスは根深く形成されて行つた。次の兄はこれに對してカイン・コムプレクスを抱いたであらうが、年齡の距りが大きいのとお人よしの爲母と同じく芭蕉を愛し、自慢の弟として居たが、抑壓された憎惡は遂に妄想性嫉妬となつて後に自分の妻と弟との仲を疑ひ妻を離緣するに至つた。

六歲の時、御殿の若殿の御伽に召出される事になつて、母は愈々喜んだ。御目見得の朝等總角（あげまき）の髮を綺麗に結ひ上げて、襞のきつぱりした袴に薄紫の紋服を着て兄に手を引かれて赤阪町の自宅を出て行く芭蕉を、後姿の見えなくなる迄見送つた事であらう。

幼年時代はこの位にして又年譜に戾る。彼の出仕年代に關する異說も多く、支考は承應中（九歲——十一歲）蟬夢は明曆中（十二歲——十四歲）と云つて居る。竹二坊及び冠山侯の芭蕉傳には十九歲の年とあり、此の間正に十三年の距りがある。彼が何歲で出仕したかは抑壓を受ける樣な筋でないから、之は各作者が如何なる史實に依つたかと云

ふ事の調杳さへ付けば解決出來ると思ふが、六歳說の根據たる『次郎兵衛物語』は一說には後世の作であるとも云はれるが、それにしても次郎兵衛と全く關係のない人の創作ではないと思はれるし、江戸に下つて後の事は知らぬとしても芭蕉の兄の子飼ひの下男であつた次郎兵衛が彼の幼少年期の事に詳しいのは當然であらう。然らば他は異說となるが、六歳の時は唯單なる御目見得であつて、そんな子供に何も役目があるのではない。然し御主人が未だ八歳の若殿であつたから御伽の者として引續き御殿に上つて居たのであらう。正式に御小姓として任命されたのは、支考の云ふ承應中かと思はれる。蝶夢が明曆中と云ふのはこの頃良忠が季吟に俳諧を學び始めたので、さう云ふ方面に彼が始めて知られたのではあるまいか。

彼の元服は萬治元年十五歳の時で、名を半七郎と改め御扶持方三人扶持、衣粧料として銀七枚を賜つて居たと『次郎兵衛物語』に見えて居る。尙萬治三年藤七郎と改名、寬文三年忠右衛門宗房と改めた。

寬文二年四月良忠は藤堂元作の女小鍋を娶つたが、彼の出仕を此の年として居る說はこの時何か彼が新しい職名になつた事の記錄に依るか、小鍋夫人附きの者が始めて宗房に紹介されたかして、それを彼の始めての出仕と思つたのではないかと考へられる。尙又、良精が死んで良忠が跡を繼いだのも此の年と推定されるから、彼が良忠に從つて始めて城內に行つたのも此頃であつたらう。

記錄的なものはこの位にして、かうした彼の幼少年期が如何なる影響を與へたかを少し考へて見たい。初の御目見得に上る迄は以前から出仕して居た兄から色々話を聞いて居たが「殿樣」とか「若樣」などいふと丸で人種でも異ふ樣な畏怖を抱いて居たであらうが、直接會つて見て矢張り變りのない、優しい良忠に安易さと親しさとを感じたのは事實らしい。爾來まるで兄弟の樣に暮す事の出來た彼は家族ロマーンの感情を滿足させ、母の劣等感の埋合せをした。水際立つた風釆の良忠の若い殿樣振と鷹揚閑雅な性格とは何時とはなしに宗房の風骨までを薫化して、母の虛榮コムプレクスは彼自身白馬銀鞍、長安の街上に細い珊瑚の鞭をあける貴公子の樣な心持に躾けられたのであつて、彼の理想の向上に働いたものと思はれる。

又、良忠が只型に嵌つた「城代家老」といふだけの人物ではなくて風流を解して居た爲、彼の露出慾がその手段を早期に發見し得た事は非常な幸運といつてもよいであらう。加之、鈴鹿布引などを主脈とする山巒に四邊を圍まれた仙境の如き伊賀の風色はこの主從の詩情を唆るに十分で、彼等は巖倉の峽、赤目ケ瀧、名張川の畔、服部川の河原等を散策し、是らの物象を取入れて自己を作つた。それを良忠の師事する京都在住北村季吟の許に屆けて添作してもらつて來るのは宗房の役目であつた。さうした關係から彼も句作を始めたのであつたが、彼の句では刊本に載つた最初のものは寛文四年二十一歳の時の作

姥櫻咲くや老後の思ひ出に

日ぞしるべこなたへいらせ旅の宿

の二つで、重頼編『佐夜中山』に入集して居る。

尙、翌寛文五年貞德十三回忌を季吟、蟬吟兩子で營んだ時の追福百韻中に彼の附句があると云はれてゐる。

## 三、芭　蕉　と　馬

芭蕉は少年時代落馬して甚い不具であつたと云ふ說があるが、私はこの說から彼のエディポスの片鱗を探り得たので少しく說明を加へて見たい。

藤堂藩では藩の馬場で馬を貸して小姓達に馬の稽古をさせて居たから、彼が落馬した事はあり得るとしても、その爲不具になつたことは確かでない。醜い不具であり乍ら尙傍近く勤めさせられ、又不自由な跛であれ丈けの大旅行をなし遂げたとすれば、芭蕉の偉大さは一層光彩を加へることゝなるのだが、事實は不具ではなかつた。跛の彼に態々京都への使者を命ずる程良忠はサド的な人間であつたらうか。彼の句に

土屋四友を送りて鎌倉にまがる

霜を踏で跛ひく迄送りけり



此花庵鶯宿の奮頭奥の細道のさし繪に用ゐた蕪村筆である。農夫の馬を賃して那須野を越えるところで、馬に乗れゐは芭蕉、それに附添ふ徒歩は曾良である。このさし繪については筆者蕪村の詳しい書翰が殘つてゐる。

と云ふのがある。元々「跛」ならこんな句を作る筈がない。自ら馬を禦すのと、馬士が手綱持つ馬の背に揺られるのとは自ら別であるが、馬の上に跨がる事が出來れば習練に依つて馬術を修得する事は可能である。彼は諸國行脚の途次、親不知の難を驅け抜け、木曾棧道の嶮路を征服して居るし、度々馬の背を借りて居る。馬上の作として

　道の邊の木槿は馬に喰はれけり
　馬ぼく／＼我を繪に見る夏野かな
　馬に寢て殘夢月遠し茶の煙
　野を横に馬ひきむけよほとゝぎす

等の名句がある。然し彼は屢々ずり落ちさうになつたり、實際に落馬したりして居る。鞍の上で無我の境になつて了ふのであらうか。そんな簡單な理由ではないと思ふ。

　歩行なら杖突坂を落馬かな

この句には珍しく俳句に大切な季がない「季語を用ふるも物憂し」と云つて居る。彼にとつて馬は確に苦手であつた。「芭蕉と馬」が茲に於

て問題となるのだ。

フロイドの論文に「少年ハンスの動物恐怖症」（本誌第三卷第一號）の分析がある。それと全く似て居る。芭蕉のエディポスは無意識に父の死を願望し、その結果起る懲罰願望は去勢恐怖となる。此の恐怖は幼兒期に再生するトーテミスムスに依つて種々な動物に轉嫁せられて動物恐怖症となるのであるが、彼の場合は馬に轉嫁された。故に芭蕉に馬術の心得がなかつたのは少年時代落馬した爲その後の稽古を止めたからでもあらうが、落馬する前から馬に對する恐怖があつたと見る可きであらう。

彼が同門に示した『行脚掟』には

一、馬駕に乘事なかれ。一枝の枯枝を已が痩脚と思ふべし

とあるのに、彼はよく馬に乘つた。然し「野を横に」の句を前書には

是より殺生石に行。館氏馬にて送らる

とあつて人から勸められた樣に說明して居るけれど、物を無心するに不遠慮な彼は又弟子達の厚意も自分に不用な時にはすげなく斷つて居る。然るに自己の掟にも反する事であり乍ら馬の場合のみは斷れなかつた所にエディポス的な何物かゞ潛んで居るのではないかと私は思ふ。馬の象徴的意義に就いては大槻氏著『精神分析雜稿』を參照せられたい。この項の理解の助けとなるであらう。（完）

# 夏目漱石の性格

## ――分析的傳記――

北山隆

文豪夏目漱石が歿してから既に二十年を經過した。その間に人々絶え間なく彼の文學及び人について種々の事を語つて來た。それは確である。しかしそれらによつて吾々はどの程度に漱石に近づき、洞察し、理解したであらうか。筆者は秘かに疑はざるを得ない。極言すれば、何人も彼を正視した者は無かつたのではあるまいか。特に晩年の作品の如きは、悉く未だ批判の遙か彼方に置かれてゐるではないか。

その理由は色々ある。例へば彼の文壇的地位がそれを許さなかつた事も一つであらう。だが幾多の理由の中、最も重且大と目さるべき物は、卽ち彼の不可解な性格に存する事を筆者は强調するものである。

事實、世は彼を狂人と呼び、彼自らも之を肯定し、吳博士は之を追跡狂と診斷した。この狂的分子は直ちに文學に於ける異常な構成となり、不可解な文字となつた。彼の文學を理解する甚だ重要なる道の一つは、分析の力によつて其の異常性格を知悉するにある。こゝに簡單乍ら漱石の傳記を揭げるのは、右の目的に對する第一步としての試みに外ならない。

### 一、生立ちと養家

漱石、夏目金之助は慶應三年一月五日牛込馬場下に生れた。家は代々の名主で財産もあり羽振りもよかつたが、彼

の物心つく頃は既に左前になつてゐた。父は夏目小兵衛直克、母は千枝、七人兄姉の末子で父が五十四歳にもなつて居り、世間態が悪いと言ふので生れた時から歓迎されず、直ぐ四谷のある古道具屋へ里子に出された。そこには餘り長く居なかつたらしい。三歳の時、元、父の書生であつた鹽原昌之助なる者の所へ養子に行かされた。養家は始め新宿、ついで淺草諏訪町へ移つた。種痘から疱瘡を誘發して、後は自分で非常に氣にした鼻の頭等の薄いあばたを殘したのも淺草の家でゝある。當時養父は淺草扱所（區役所の如き物）の戸長をしてゐた。その頃のおぼろげな『記憶』は道草の中に最幼時記憶として描かれてゐる。

養父及養母「やす」は漱石を玩弄的に溺愛し、しつこく付き纏ひ、最大限の我儘と悪戯を許した。それは養父母が恩惠によつて彼を手許に引きつける爲の手段であつたが、下品で強慾で吝嗇家の夫婦は既に、十歳に足らぬ漱石に憎まれ輕蔑され愛想を盡かされてゐた。やがて彼は小學校へ通ひ出した。その頃、養父が近所の後家と關係を生じた事から夫婦の不和を生じ、遂に「やす」は離縁されて後家が乘込んで來る事となつた。漱石は一時「やす」について何處かに住んだらしいが、やがて實家に引取られ、鹽原家と事實上の關係は全然切れてしまつた。（鹽原はそれまでに、漱石名義の家作を横領してゐた）

養父母を憎んでゐた彼は非常な期待を以て實家へ歸つて來た。それが七歳の頃であつたらしい。歸つては來たが籍は元のまゝであつたから「捨てた厄介者が歸つて來た」「何時養家に引戻されるかもわからない」といふ考へが實父始め一家の彼に對する態度を冷たくしたのは當然である。父は「食ふだけの事しかしてやらない」と云つた。今まで時々養家へ來ては太つ腹さうに笑つてゐた實父の、さうした冷い豹變は彼に非常な失望を與へた。心的掣肘といふ物を知らなかつた彼は、こゝに初めて冷酷な世と人のある事を悟つて、強い驚きと憤怒と憂欝とを感じた。

しかし未だ悲觀する事を知らない彼は、腹いせとして益々強情になり激しい悪戯をし疑ひ深くなり、益々父に嫌はれた。「おやぢは何もせぬ男で、人の顏さへ見れば貴樣は駄目だ駄目だと口癖の樣に云つた」と「坊つちやん」にはある。彼は養家にゐた時から實父を祖父、養父を實父だと信じさせられてゐた。引取られて間もなく、夜寝てゐる時

一人の女中が枕下にそつと來て事實を敎へてくれた。その事を彼はいつまでも恩に着てゐた。以上の如き家族關係の複雜、及びエディポス感情にからまるショックは彼の性格決定に關與しないではすまなかつたであらう。

## 二、父母及び兄達

父は如何にも江戸時代の名主にありさうな、應揚で太つ腹に見えて、しかも內實は極めて現金な、能のない人であつたらしい。一時府廳や警視廳に勤めてゐたことがあつたが、下らない事業に手を出して財産の大半を失ひ、息子達の道樂も手傳つて明治十四五年頃には家も人手に渡る有樣であつた。明治三十年、八十四歲で歿した。漱石は當時熊本から歸つて來たが、葬式だといふのに友達の所等步き廻つてゐて友人に變な顏をされたといふ。漱石の父に對する感情は初めに憤怒と憎惡、後には無視と冷淡——表面上は——に終つた樣に思はれる。

之に反して、母は彼に淡い、しかし絕える事のない思慕、聖母としての記憶を殘してゐる。自分を本當に愛してくれたのは母だけだといふ觀念から、その名「千枝といふ言葉を懷しいものゝ一つに數へてゐる。だから私にはそれがたゞ私の母丈の名前で決して外の女の名であつてはならない樣な氣がする」と自ら述懷してゐる。

母は四谷の質屋の娘で、長い間御殿奉公をしてから、父の所へ後妻に來た。柔和で床しい婦人であつたといふが、漱石自身は母を、老眼鏡をかけて縫物をするお婆さんとしてしか記憶しなかつた。明治十四年、五十三歲で歿してゐる。

七人兄姉の中、上の二人は先妻の娘で、二人とも漱石の知らぬ中に他家へ嫁してゐた。上の「おさわ」は新宿の藝者屋「伊豆橋」へ嫁して三十三歲で死に、下の「お房」は無筆の口達者な女で從兄の高田庄吉に嫁し、明治の末年、貧の中に死んだ。この高田は一かどの通人で、神樂坂の藝者屋の向ひに住んでゐた所から始終藝者共が遊びに來て、榮之助、漱石等とふざけ廻つた物ださうである。

長兄大一（幼名大助）は漱石にとつて重要な存在であつた。色の白い、何處か峻しい相のある美しい男で、大學の

前身開成校に化學を研究してゐたが病氣で退學し、陸軍の飜譯部に勤めた事もあつた。明治二十年、肺を患ひ三十一歳で死んだといふから、漱石には十年の年長であり、兄としての親しみよりも、單に「成人對子供」或ひは父代理としての關係にあつた。大一は漱石を監督し、英語を敎へ、後には講談・落語・假聲・藤八拳さへも敎へ、時々は遊山のお供を仰せつけもした。

養父の鹽原が漱石を引戻して給仕に出すと云ひ出した時、それを救ふ爲に漱石を自分の養子にしよう（病身で結婚出來ないからと）云ひ出したのも大一であつた。ともかく漱石の少年時代は、この大一兄に引廻はされ、感化された。怒られもしたが愛されもした。

尙ほ大一の所へ樋口一葉を嫁に貰はうとして、こちらから斷つたといふ話もある。

次兄榮之助は漱石より七・八歲の年長で、大變な道樂者であり、大一と同じく明治二十年に死んでゐる。この兄とも隨分遊び且喧嘩をしたらしい。『坊つちやん』に

「兄は色が白くて芝居の眞似をして女形になるのが好きだつた。元來女の樣な性分でずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割で喧嘩をした。ある時將棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困るとうれしさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやつた。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言附けた。おやぢはおれを勘當すると云ひ出した。」

とあるのは長兄か次兄かわからぬが、恐らく兩者を複合した叙述であらう。

榮之助の次に女の子が一人あつたが、先妻の娘に氣兼ねして早く養女にやつたと云ふ。

三兄は直矩と云つて最近まで在世した。通稱「矢來の叔父さん」と云はれたが、餘り特徵のある人ではなかつたらしい。

以上は漱石の少年時代に於ける家族關係の大體であるが、如何にも亂雜で、目茶々々な、遊蕩氣分に滿ちた、亡び行く落家の姿であり、幼兒性を養ふにもつて來いの雰圍氣であり、現代からは想像も出來ぬ、大家族的な濃い愛と憎

の世界であつた。なほ、『坊つちやん』に出て來る「淸」（實際ではおます）といふ女中に可愛がられたのもこの頃である。

この家族の中にも一人冷遇され、子としての待遇を與へられなかつた事は、却つて漱石に幸ひした。やがて彼の心はこの家族達の上から離れて來た。小學校を卒業する頃から彼の頭には「何でも長い修業をして立派な人間になつて、世に出なければならない」といふ考へが漠然とではあるが萠し始めた。

## 三、學生時代

十二三歳で小學校を出ると直ぐ、神田一ツ橋の第一中學校へ入つた。此處はつまらぬと云ふので二三年で止め、二松學舍なる漢學塾に移つた。しかし「今更文明開化の世の中に漢學者になつた處が仕方なし」と知り、「兎に角大學へ入つて何か勉强しようと決心したのである。所が當時の漱石は英語が嫌ひで大の不得意と來てゐる。で、彼は成立學舍に轉じ大學豫備門を目指して專心英語を勉强した。明治十七年の夏、豫備門に入つた。中學と二葉學舍へは家から通つたが、成立學舍へは橋本左五郎と二人で小石川の極樂水の某寺に自炊し乍ら通つた。家では八釜しくて勉强出來ないからである。

豫備門へ入つたは良いが、この寺の前へ毎晩來る屋臺の汁粉を規則的に食つたのが祟つて、入ると直ぐ盲腸炎にかゝつた。豫備門へは中村是公と二人で神田猿若町の下宿から通つたが、豫科三年の時（豫科三年、本科二年である）傾いた家計から學資を貰ふ事を嫌ひ、是公と二人で本所の江東塾なる汚い塾へ月給五圓で住込みの教師となつた。一年餘り續けてゐる中、塾の不潔と濕氣の爲に急性トラホームにかゝり、後々まで一再ならず醫者へ通はなければならなかつた。（之は彼が强く持つた失明への恐怖に何等かの關係を持つのではないかと思はれる）で、其處の教師は止めて再び家から通ひ出したが、この醫者通ひが後に妙な結果を生むのである。

豫備門でも始めは一向勉强しなかつたらしい。最初は芳賀矢一の次にゐたのが、漸次所謂「席次下算便」となり、遂

に豫科二年の學年末に落第の破目に立至つた。之は英語數學の不成績のみではなく、腹膜炎で學年試驗を受けられなかつたからであり、追試驗を受ける機會もあつたに拘らず漱石は祕かに悟る所があり、自ら進んで落第してしまつた。之が後年「名譽の負傷」と自ら稱した所以であつて、其後は非常に勉强したものであつた。

豫科三年の時、いよ〳〵專門を決める必要が起つた。始め彼は「變人の自分が世間に頭を下げないで充分やつて行ける樣な、そして幾分藝術的な職業を」といふ考へから建築科を志願したのだから面白い。所へ同級の有名な狂才、米山天然居士が「君、日本で聖ポールの建築が出來るつもりなのか、それより文學をやつて大いに天下を壓倒しろ」と云つて樣な忠告を與へたので、素直に英文學へ――國文學や漢文學は今更やる必要もないからとて――志し、將來は英文で小說を書いて世界を驚かせるつもりであつたと云ふ。

漱石一生の親友、正岡子規との交友は豫二年の一月頃から始まつてゐる。子規の勸めで俳句を作り出したのもその頃であり、當時の文章を見ると二人が滑稽なくらゐ同性愛的なメートルを擧げてゐた事が明白に知られる。同性愛的傾向は子規に限らず、既に橋本左五郎や中村是公に對する態度にも感ぜられる所である。

附言するが、漱石は幼時三四歲の頃、非常に夜尿癖のあつた事と、靑年期に相當自慰癖のあつたらしい事とは注目に値する。

明治二十一年一月、長兄の死を機會にいよ〳〵夏目家へ復籍する事とし、いざこざの後、幼時の養育料・筆墨料として二百四十圓を鹽原へ拂ひ、尙ほ自筆の一札を入れて今後も「不實不人情に相成らざる樣致し度存候也云々」といふ物を渡した。この一札が後に惡い結果を生んでゐる。ともかく漱石は二十年の間、鹽原金之助になつてゐたのである。

大學へ行く頃は家の窮乏が甚しかつたのであらう、貸費生となり、其上、東京の專門學校へ英語を敎へに行つた。住ひも小石川傳通院裏の法藏院といふ尼寺に下宿してゐた。當時は『心』のKにも似た生活を送つたのであらうと想像される。

明治二十六年、英文科卒業と共に大學院に籍を置き、一年間東京高師に教鞭を執つた。下宿は以前の尼寺であつたが、彼はこゝで第一回目の神經症的發作を經驗した。それはかうであつた。

## 四、初戀と神經症發作

或日、彼は突然實家に歸つて來て、兄に、「自分の所へ緣談の申込があつたどらう、」と目の色を變へて訊いた。兄は驚いて否定すると「自分に默つて斷るとは甚だ怪しからん」と非常な憤慨で、手がつけられない。段々訊いて見ると、最近又、眼を患つて、ある醫者へ通つてゐる中に、そこへ來る細面の背のすらつとした若い美人に心をひかれて、妻にと思ひ込んだ。所が其の女の母親といふのが藝者上りの悪い奴で（そんな事が彼にわかる筈もないのに）娘を貰ひたいなら頭を下げて來いといふ樣な事を言ひ、寺の尼さんを間者に使つて自分の行動を探偵させてゐるとか、更に尼さん達の中にその初戀の女そつくりのが居て、その尼が風邪で熱を出した時自分が藥をやつたら、他の尼達がいよ〳〵自分の事をとやかく批評するとか——と云ふ有樣であつた。

この失戀事件の爲か、やがて彼は自棄的な氣持で松山中學へ都落ちした。松山でも宿の內儀が探偵に見えたらしいが『坊つちやん』程の騷動は起さず、讀書と、同居してゐた子規に俳句を敎へて貰ふ事に日を送つた。

明治二十八年、熊本高等學校へ轉任、九月に貴族院書記官中根重一長女鏡子と見合結婚をした。その時「俺は學者で勉強をしなければならないから、お前なんかにかまつて居られない」と宣言したのは有名な話である。しかし當分の間、夫婦の仲は可もなく不可もない狀態であつたらしい。

第二回の神經症的發作はロンドン留學中に起つてゐる。明治三十三年九月から三十六年一月までのロンドン留學は、彼の一生に拭ひ難い不愉快な印象を與へた。一つには留學費輕少の爲、極端に貧弱な衣食を守らねばならなかつた事、一つには英國人が彼を相手にせぬ事、一つには彼の容貌體格が甚しく英國人に劣る事、又一つには勉學上の思はしい收穫がなく、英文學への興味が既に減退しつゝあつた事、更に一つにはロンドンの陰欝な天候——さうした事

々の爲に彼は所謂神經衰弱に陷り、一室に閉ぢ籠つたまゝ數日も外出しようとしなかつた。全ての英國人は其の富有と紳士道とを見せびらかして彼を威嚇し、彼を輕侮し探偵し追跡した。その首謀者は下宿の內儀であつた。彼は下宿で泣いてゐたと云はれる。日本では彼が發狂したと噂した。それに對しても、彼はあの文學論のすさまじい序文に於て暗に肯定してゐる。

食を節してまで買集めたおびたゞしい書籍と共に歸朝した彼は、借金等して漸く本鄕駒込千駄木町の借家に入つた。勤務の方も熊本はもう閉口だと云ふので、ラフカディオ・ハーンの後任として文科大學講師、一高講師に囑任、後には明治大學にも講じた。

講義は大嫌ひで、口癖の樣に「いやだ〳〵」と云ひ乍らも殆ど休講もなく、『文學論』『文學評論』等の名講義を殘したのであるから、彼の勤勉と几帳面の强さが伺はれる。

この頃から神經症は甚しくなり、何かにつけて當り散らす、物を投げる、子供を打つ、妻君を追出さうとして酷い事をする（一時別居した）、女中を追ひ出す、近所の俥屋の內儀、向ひの下宿屋の書生、裏の中學生等は全て彼の惡口を云ひ、行動を探偵してゐると考へる――これらの症候は消長こそあれ、最後まで續いたのである。

子供は三十二年生れの長女筆子始め、恒子、榮子、愛子、長男純一、次男伸六、雛子と殆ど隔年に生れてゐる。子供への態度は「恐怖と不可解と無關心」の如き物であつて、親としては落第であつたらしい。

過去の幻影である養父母が別々に彼の前へ惡夢の如く立現れたのも此の前後であつた。養母は熊本へ長い手紙をやつて老後の養育料を求めたが、之はそれ程の惡黨でもなく、修善寺の大患以後、時々來て小遣ひを貰つて行く位であつた。養父は一時に文名の上つた彼に、再び養子として歸る事を求め、彼の所へしば〳〵押上り、不遜な態度で金をせびり、果ては代言を使つて、漱石が嘗て入れた「不實不人情云々」の一札を楯に取つて其の一札を買へとゆすつた。親類が中に入つて百圓でけりをつけたが、この事件は餘程彼を動搖させたに違ひなく、『道草』には其のいきさつが深刻に書綴られてゐる。養父母ともやがて死んだ。

# 五、文學及び其後の傾向

『ロンドン消息』に始まつた創作の熱意は遂に明治三十八年『吾輩は猫である』となつて現れ『坊つちやん』『草枕』『野分』と續いてから、多大の希望を以て朝日新聞に入り、『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『心』『道草』『明暗』と發表してゐる。

明治四十三年八月、修善寺で胃潰瘍による大吐血があり、危篤に陥つたが奇蹟的に恢復した。胃病（胃酸過多症）は青年時代からの持病であつて、三十七、八年頃から酷くなつたのであるが、醫者にもかゝらず養生もせず、却つて自ら故意に肉體を苦しめて此處に至つた物の如くである。死に直面した彼は、以後、人格上に又文學上に大きな變化を來たし、一時に老い込んでしまつた觀があつた。博士號を辭退して世を騷がせたのもこの病臥中の事であつた。

其後も再三胃病に惱まされ、遂に大正五年十一月二十二日に大内出血と共に重態に陥り、十二月九日、嘗て求めて得ざりし眞の靜寂に入つた。時に五十歳、雜司ヶ谷墓に葬られた。死病は勿論胃潰瘍であつたが、明治三十七・八年頃から輕少ながら認められた糖尿病が、意外に大きな役目を持つてゐた物の樣に筆者は思ふ。

晩年の彼は禪的な氣分を愛し、「我師自然」「則天去私」を口にし、一時盛に作つた俳句は少くなり、俳畫南畫の類を多く畫き、又漢詩を作つた。世を捨て人を去り、全ての他物を不偏不黨、愛憎を超越して眺めたい考へであつた。小説にもこの傾向を盛らんとする意志があつたが（『明暗』）遂に成し終らずして逝いた。但し創作の熱度が明治の末年より遙かに低下してゐた事と、心理學の新説をしきりと讀んだ事と、二三の禪僧及び藝者に對して異常な程多くの書簡を送つてゐる事が注目される。

×

漱石の性格分析は一卷の書にても盡し得ない。唐突の筆に成つた右小論が、題名にそはぬ事を甚だ不安に思ふ。漱石の神經症、その糖尿病、文學等との關係に就いてはまた稿を新にして詳論させて頂きたい。（完）

# 女性感の發達過程（ヒッチマン、ベルグラー共著）

高水力太郎譯

譯者小序——本誌前號に譯載した『女性の對男性心理』の續稿であるが、内容上本論は獨立してゐる。原著に關しては前號を參照ありたし。

最近の研究を包含して、以下、精神分析學から見た女性感の發達を略叙して見よう。

フロイドの性感發達說は、人間の性感が思春期に於いて、宛も無から有を生ずるやうに、忽然として出現し來るものではないとするところから出發してゐる。

從來はたゞ漠然と常識的に（非心理學的に）「性感」又は「性慾」（Sexualität）と呼んでゐたものは、精神分析學的に精細に稱呼するならば、性器的性感（Genitale Sexualität）である。この性器的性感はそれ以前の長き一聯の前階程の發展の結果である。これ等の前階程と云ふのは、口唇、肛門、尿道、男根の諸段階から成立つてゐて、これ等は何れも性的なものであるが、これが性的なることを理解し得るためには、まづ性感と性交とが同義語であるかの如き誤てる考へ方から解放せられることが必要である。如何にしてこのやうな誤てる考へ方が生ずるかと云ふに、それは成人の考へ方を、それとは全然性質の違つてゐる幼兒心理の中に投出するからである。

嬰兒の最初の性的顯現は、初めて乳房に吸付く時からである。食物攝取はこのやうに、この段階に於いては、性的な口唇快感と結びついてゐる。乳房はカロリーを供するのみならず、快感をも供するやうになる。するとやがて、嬰

兒は滿腹してゐるに拘らず、指しやぶり拳しやぶりをするやうになる。すると次にはその指しやぶり拳しやぶりから轉じて、身體のあちこちを撫でたり引張つたりするやうに手を動かす。遂には屢々性器を引張るやうになつて來る。そのやうにして自然、乳兒自慰と云ふ現象が起きざるを得なくなつて來る。

口唇快感と性感との間に關係があると云ふやうなことは甚だ突飛な主張のやうに人々は思ふかも知れないが、併しこれ等兩者の間の懸橋は、成人の性感に於いてもなほ接吻、吸莖、クニリングスその他となつて殘存してゐることを考へれば、敢て不思議ではなくなるのである。それのみならず、神經症者に見られる種々な症候を分析研究して見ると、例へばヒステリー性攝食障害などは、屢々喰物攝取と云ふことを性的な意味に無意識的に解してゐることにその原因があることが分る。それと云ふのもつまりは、攝食本能と口唇性感とが本來一つのものであつたことの結果である。

アブラハムが主張してフロイドが承認した意見に依ると、リビドー發展の最初の口唇段階は二つの部分に分れる。第一の部分には吸付きとしやぶりとが主になり、第二の部分には嚙付きが主になつてゐる。始めの程はたゞ吸付いてのみ居る乳兒もやがて極めて早く漸次に嚙付くやうになつて行くものであるが、この第二の段階は乳齒が生えて來ることゝ自然に平行して始まるわけである。この時代に於いては、子供の愛情の現れ方は、愛の對象を口に持つて行き、それを呑込むと云ふ形をとるのがその一種である。喰つて了ひたいほど可愛いと云ふ言葉があるが、これは喰人本能がこの段階に殘留してゐることである。）勿論、人々は性感のこのやうによもやと思ふほどの早期前階のあることに就いても、純粹に精神分析に於いて、證明を與へることが出來る。が、この段階に定着し、且つこの段階に退行してゐる患者は夢の中でその愛する者を屢々喰物として表現すると云ふ事實を擧げても、精神分析を知らない人々はそれを確實な證明とは認めない。また常に忘れないやうにしてゐなければならないことは、既にこの第二の（嚙付き）段階に於いては、一切の人間的關係は「相反並存」的であつて、「同じものに對して積極的（ポジチフ）及び消極的（ネガチフ）な感情を以て對してゐる」（ブロイラー）のである。

乳兒時代の性的顯現としては、吸付きとしやぶりと嚙付きとだけだと考へるならば、それは間違つてゐる。既にこの時代に於いて、糞尿の排泄　律動的な動搖（搖籃、ぶらんこ）、乳兒的自慰は快樂である。殊に大腸から快感が生ずるので、口唇段階から漸次に肛門段階に移動して行くのだと云ふことが出來る。が、そのやうな考へに對してまづ第一に反抗を示すのは、「正常な」成人である。この場合にもやはり、人々は成人の考へ方と子供の考へ方とを取違へてゐるのだ。後年に於ける抑壓の結果を抑壓以前のものゝ如くに考へてゐるのだ。約言すれば、子供時代の實際が如何であつたかを「忘れ」てゐるのだ。たゞ我々は、姆母たちが幼兒の排泄過程に對して如何に大きな關心を拂つてゐるかと云ふことに氣を配ればよい。また子供等が排尿排便に對して興味を持つてゐるのを見ても不思議に思はないがよい。大便の保留は腸粘膜に刺戟を與へ、かくて保留せられたる糞便が排泄口を通過する時に苦痛と快樂との混和した感覺を生ずる。婦人の性感發達に就いて云へば、これが婦人の後年の性感と結びついてゐる。即ち、腸内の保留糞便はペニスの如く、直腸は膣の如く感ぜられるのである。

肛門段階も亦、これを二つの部分に分つことが出來る。第一のは糞便が肛門から出る時の快感がその特徴であつて、その際本人はその排泄せられるものに對して多少の攻撃的、排斥的な心持を抱く。子供はその愛するものを糞便に擬する奇癖を持つてゐる。そこに相反並存的傾向の著しいことが觀取せられる。一方に於いては、糞便を保留しておきたいと云ふ傾向があり、他方に於いてはこれを排擊したいと云ふ傾向が見逃せない。子供や成人の多くの神經症的下痢は如何に說明すべきかと云ふに、それは、何か失望したことがあると直ぐに下痢を起す神經症患者の症候に就いて見て明かである。それは心理的にはつまり對象を排擊すると云ふことゝ同じなのである。

肛門段階の第二期に於いては、糞便保留の保守的傾向が一層顯著になつて來る。この保留の快感のために糞便を愈々詰まらせ、また非常に價値の高いものだと思ひ込むやうにな〔る〕。なほその上に子供を世話する人々が、子供の糞便に非常に大騷ぎをし、大袈裟にこれを扱ふから、愈々これが價値高いものだと子供等は思ふやうになり、かくて段々と糞便は子供等にとつて、自分を世話してくれる人々への贈物であると云ふ感じが起きるやうになつて來る。

第三の性器前期的段階——尿道性感——に就いてはあまり多くの事が分つてはゐない。この段階は女兒に於いては、その男性願望（これに就いては後に詳述する）といろ〳〵に結び付いてゐる。著者の分析した或るヒステリー婦人患者はまづこれに屬する方である。彼女は既に成人でありながら、まだ「男のやうに」（つまり立つて）小便をするのであつた。

性器的段階と云ふのは、所謂「リビドーの男根（ファルス）中心組織化時代」を以て始まるのである。さうして男女兩性ともにこの段階は共通してゐるのである。女には男性器（ペニス）はないから幼兒期の自慰に於いても男根的（ファリシュ）な快感は經驗する筈はないと云ふ反對説が起きるかも知れないが、併し女兒はその陰核をペニスとして知覺し、それによつて「男性的に」自慰するものであるから、その點で右の反對説は打破せられる。膣は心理的に默殺せられてゐる。＊かくて少女は心理的には男兒であつて、つまり彼女等自身としてはペニスを持つてゐるのである。成人になると男女兩性別存在の事實は殆ど問題にならないが、彼等成人に於いてはこの區別は始めから存在してゐたのだらうと云ふ假説の形で、右の不審が再び擡頭して來る。これに就いては今更管々しく云ふまでもないことであるが、多くの婦人たちが女の性的役割に甘んじてゐないと云ふ事實からして冷感症の素質的な要素の一つが結果して來るのである。

註 ＊『國際精神分析學雜誌』一九三三年第三册、カーレン・ホルナイ稿『膣の否定』を參照。

男性器を見た時の態度は、男兒と女兒とでは全然違つてゐる。男兒が女兒の局部を始めて見た時には、その態度は曖昧である。始めの内はあまり興味を持たない。彼にとつて見れども見えないか、或はその見たるところを否定する。その知覺したところを弱め、自分の豫期したところと一致するやうな見解に到達しようと努める。やがて自慰をやつてその罰に去勢をすると脅かされ、その影響が起きるやうになつて、始めて前の觀察が彼にとつて重大な意義を帶びるやうになる。嘗て見たものを想起する事に依り、或は新たに見ることに依り、彼の内に本能感情の嵐が起こり、從前はたゞ威嚇に過ぎないと思はれてゐたことがどうやら本當にやられるかも知れないと云ふ信念となつて來る。かゝる事情からして二つの反應が生じ、かくて女性に對する彼の態度が持續的に決定せられる。大事なところを

失つてゐる人間に對する嫌惡の感情と、それに比較して自分の優越に就いて凱歌を奏する感情と。

女兒の方はこれとは全く違つてゐる。女兒たちは一見して自分の事は直ぐ分る。女兒は男兒に於いてペニスの存在を見、自分にはそれの缺けてゐることを知り、甚だ失望し、自分もそれを欲しいと思ふ。この心理からして所謂（女性の）男性コムプレクス（Männlichkeitskomplex）が生ずる。この男性コムプレクスがあると、さうしてこのコムプレクスが首尾よく克服されないと、前に略叙しておいたやうな、女らしさに發展することが非常に困難になつて來る。少女のペニス願望の背後には、やはり屢々口唇的な羨望感が裏付けてゐる。自分にも一つペニスが得られるかも知れない、さうして男性と同じやうになれるかも知れないとの希望は、女兒に於いてはまさかと思はれる程の後年に至るまで保存せられてゐる。或は現實狀勢が端的に否定せられ、彼女等に於いて男性器の缺如せる事實を認めることを拒み、自分等になほペニスが存在してゐると妄信し、その結果、自分が宛も男兒であるかの如くに振舞ふの外なきに立至るのである。男性器羨望が男性コムプレクスとして反動構成せられない限りは、この男性器羨望の心理的歸結は極めて複雜、且つ廣汎なものとなるのである。女兒等がナルチスムスの損傷（自己感情の病みつき）を自認すると共に、それは云はゞ傷痕の如くなつて、成人後の彼女等の劣等感となるのである。彼女等がその男性器の缺如を始めには個人的懲罰として自分に說明して聞かせるやうに試みるが、その後に至つてその試みを克服し、自分以外の女兒等も等しくその男性器を缺如せるものなることを發見すると共に、決定的な一點に於いて缺けてゐるところある性に對しては男性等とその輕蔑感に於いて同ずるやうになるのである。

なほこれ以上に理解を進めるためには、二つの事實に注意を拂ふことが必要である。卽ち、兩性具有と、所謂エディポス・コムプレクスとの二つの事實である。兩性具有とは、男女を問はず一個人に於いて男性的な要素と女性的な要素とが共在してゐると云ふことである。エディポス・コムプレクスとは女兒（假りに女兒だけに就いて云へば）が母親と同樣に父親に依つて愛せられんと欲し、從つて母親の代りにならうと欲し、かくて母親に對して相反並的な、卽ち愛憎二元の矛盾した態度をとるやうになると云ふことである。併しながらエディポス・コムプレクスが相反並存

的であると云ふことは、各個人が兩性具有的であると云ふことに依つて重大な關係を及ぼされてゐるのであつて、かくて例へば女兒は父親に愛せられんと欲し、母親を憎むのみならず、他面に於いてその母親を愛して父親をその競爭者として排斥せんとするのである。這般の事情はエディポス・コムプレスの「前史（フォルゲシヒテ）」を檢べて見ることに依つて始めて明かになるのであつて、この前史とは所謂「エディポス前期に於ける母親への愛着」(Präödipale Mutterbindung)である。

エディポス前期に於ける女兒の母親への愛着は如何なる點に存してゐるのであるかと云ふに、それは父親への正常的愛着の前驅として、極幼兒はそのその心理的關係はたゞ一つしかないのであつて、その心理的關係とはつまり母親に對するものゝみである。この時代に於いては、父親はたゞ厄介な競爭者に過ぎない。多くの場合に於いては、女兒の母親への定着は四歳頃まで存續し、後年になつて父親に對する關係に於いて發見せらるべき殆ど總てのものは當時母親への關係に於いて既存し、後にそれ等が父親への關係に於いて委讓せられるのである。

母親に對する少女のリビドー關係は實に多様な形態を具へてゐる。彼女等の母親に對するリビドー關係も幼兒性感の三段階の總てを通過するのであるから、その關係にも個々段階の諸性格が示され、從つて口唇的願望、肛門虐待的願望、並びに男根的願望に依つてそれ等の諸關係が表現せられる。これ等諸願望は能働的亢奮のものもあるし、受働的興奮のものもある。それのみならず、それ等の願望は全然相反並存的であつて、一方感傷愛的であつて、而も他方に敵對的、攻撃的性質を帶びてゐる。最も判然と表れるのは母を子供にしたいとの願望、又はこの願望と關係のある(母に子を産ませたいとの)願望である。或は母親に依つて殺される、毒殺される、誘惑される、と云ふ不安が擡頭する。この被誘惑空想に於いて誘惑者となるのは常に必ず母親である。この點に於いてこの空想は現實的根抵に觸れてゐる。何となれば、極幼兒時代から身體の世話をして性器に快感を與へたものは、恐らくは始めてその經驗をなさしめたものは、事實上母親であつたからだ。

女兒が極早期に母親に對してこのやうに力強い愛着を持ち、それが時と共に根抵的なものとなつて行く。母親から

の離反は母親への敵視となつて現れる。母親への愛着はそれへの憎悪となつて消失する。そのやうな憎悪は多少とも得體の知れないやうな一面を示し、全生涯を通じて保持せられ、後年には超過補償的に罪亡ぼしの親孝行になる。大抵の場合、それ等憎悪の一部分に克服せられてしまふが、他の一部分はそのまゝ殘つてゐる。母親からの離反の動機としてはさまざまに不平不快が持出される。母親がおつぱいをあまり十分に呉れなかつたと云ふ不滿、後から來て母親の愛を奪つて行つた弟妹に對する羨望、自分のオナニーを禁斷せられたに對する反抗など。より深き源因は子供の愛慾の無制限さとその性的願望の充足せられざることゝに存するであらう。女兒たちのこの最初の愛情關係は、最初のものであるが故に恐らくはやがて崩壞すべき運命にあるのである。何故に最初のものなるが故に崩壞するのかと云ふに、それはこの早期の對象纒綿が常に必ず高度に相反並存的だからである。強度な愛情の側には常に強度な攻擊的傾向が存在し、子供がその對象をいよ〳〵情熱的に愛すれば愛するほど、その對象から一寸でも素氣ない樣子や艶消しな待遇を受けるとそれを非常な冷遇虐待であると思ひ込むからである。遂に愛情の城砦も憎惡の寄せ手の前に屈伏しなければならなくなる。更にもつと細かく云ふならば、主要敎育者たる母親から大部分の拒否が出て來てゐると云ふわけになるのである。何となれば、最も優しい敎育と雖も強制を用ゐたり制限を加へたりするものに外ならぬからである。併し、以上の總てを以てしても、女兒をして早期の母親への愛着を打棄てしめるには、なほ力及ばないのである。現に男兒と雖も同樣なことを體驗してゐるに拘らず、その母親への愛着を放棄しようとはしないからである。女兒の場合には、そこになほ特別な契機が加はる。それは去勢コムプレクスである。解剖上の區別はやはり心理上にもその歸結を及ぼさないわけはない。少女はそのペニス缺如に就いて母親をその責任者と見做し、かゝる損害を與へたことに就いて母親を容赦しようとしないのである。

分析的に調べて見ると、女兒にもやはりペニス切斷(去勢)コムプレクスなるものゝ存することが認められざるを得ない。よしんばそのコムプレクスの內容は男兒の場合と餘程異つてはゐるにもせよ……。女兒の去勢コムプレクスもやはり異性の性器を一瞥することに依つて始められる。その時、女兒等は非常にいやな氣持になり、自分等も「あ

んなのが欲しい」と思ひ、かくてペニス羨望のコムプレクスが生ずる。さうしてこれは彼女等の發達及び性格構成上に拂拭すべからざる痕跡を殘す。最も輕い場合に於いてさへも相當に重大な心理上の打撃を被るのである。

自分に男性器缺如せることの發見は、彼女等の發達史上に於ける轉廻點をなすのである。この事實の發見からして彼女等の發達上に三つの方向が生ずる。その一つは神經症に導き、第二は男性コムプレクスの意味に於ける性格變化に導き、第三は正常の女らしさに導く。第一の方向の本質的內容をなすものは、これまで「男性的」に生きて來、自分等の陰核に依つて快感を得ることを知つてをり、さうしてこの陰核的活動と屢々能働的な（母親を相手とする）性的願望とを關係づけてゐた女兒等が、ペニス羨望の影響に依つて自分等の男根的性感の享受を毀損せられるやうになると云ふことである。男兒等の方は自分等よりは遙に具合よく出來てゐることを知つて自尊心を傷けられ、陰核による自慰的滿足を——多少とも强い程度に——斷念し母親への愛情を放棄し、その際に彼女等の性的活動一般のよい部分を抑壓してしまふことが稀ではない。母親からの離反と云ふことは、女兒等が一擧にして成し遂げるものではない。何となれば、女兒等は自分等の男性器缺如を始めには自分の個人的な不遇であると考へ、漸次にこれが他の女性たちにも擴充せられてあるものであると考へ、卽ちまづ母親がそれであることを認めるやうになる。彼女がさきに母親を愛したのは母親にペニスの存在を豫想してのことであつたが、母親にそれが缺如してゐることが發見せられると、母親は自分の愛情の對象としての資格を喪失することになる。このやうにして永い間かゝつて築き上げられて來てゐた母親憎惡の奔流に一擧にして堰を切つて落されることになる。

クリトリスに依る自慰を部分的に廢止すると共に、女兒の性態度はその能働性をも部分的に放棄することになる。受働性が今や主調となり、父親への轉向が、愛働的本能亢奮の助勢を得て目立つて來る。以上の如き發展樣相に依つて男根的活動は一掃せられて、女性的活動が今やそれに代つて起きることになる。もしその際に抑壓に依つてあまりに多くが失はれさへしなければ、この女性的活動は常態的なものとなつて發展するのである。

女兒が父親へと轉向する時に抱いてゐる無意識的願望は元來ペニスへの願望である。それを母親は彼女に與へなか

つたので、今や父親からそれを期待するのである。併しながら女としての立場は、ペニスへの願望が子供への願望に依つて置換へられる時になつて、始めて確立するのである。子供はこのやうにして、ペニスの代りになるその象徴的等價物である。

併しながら女兒が、その願望に於いて――象徴的類似に誘はれて――ペニスから子供へと移行する前に、そこに肛門的段階が介在する。子供への願望の中には肛門性感的な亢奮と性器的亢奮（ペニス羨望）とが合一してゐる。併しペニスにはやはり、子供への興味からは獨立した肛門性感的意義がある。ペニスとそれに依つて充塡せられた亢奮せしめられてゐる粘膜孔との間の關係は、既に性器前期の、虐待肛門的の段階に於いて出來てゐる。糞便塊は空想中に於いて、云はゞ最初のペニスである。それに依つて亢奮を與へられる粘膜は大腸粘膜である。世人の內には思春前期に至るまでその肛門性感がそのまゝ强く殘つてゐる人がある。それ等の人々を分析的に調べて見ると、彼等はこの性器前期の段階に於いて空想並びに變態的戲れの中に於いて性器に類似した組織を作り上げてゐるのである。例へば、ペニスとワギナ（膣）とが糞便と大腸とに依つて代表せしめられてゐる如きである。神經症患者（强迫神經症患者）の間には、性器組織を退行的に低下せしめてゐるために或る結果を生じてゐる者のあることが分るのである。卽ち、總て性器として考へられた空想は肛門に轉向せられ、かくてペニスは糞便により、ワギナは直腸に依つて代償せしめられるのである。ペニスと糞便と子供の三つは總て固形體としてその出入に當り粘膜孔に亢奮を與へるものである。

子供卽ペニス願望が父親に向けられると共に、女兒はエディポス・コムプレクスの立場に入ることになるのである。母親への敵對感情は必ずしもその時擡頭するわけではないが、少くとも非常に强化せられる。何となれば、母親は女兒が父親から期待し憧憬してゐる一切を先取してゐるものとして競爭者となるからである。女兒にとつては、エディポス・コムプレクス的立場はその後の長き困難な發展への出發である。一種の準備的遂行の如きものである。

去勢（ペニス缺如關係）コムプレクスに對するエディポス・コムプレクスの關係には、男女兩性にとつてそれぞれその結果及ぼすところ重大なる區別がある。男兒はそのエディポス・コムプレクスに基きその母を占有しその父を競

爭者として除者にせんと欲するのであるが、このコムプレクスは彼等の男根期的性感段階から發展して來る。併しながら父から罰として去勢されるかも知れぬと云ふ脅威のために、彼は兩親に對する右の如き態度を放棄するやうになる。ペニスを喪失することの危險を感ずる時代に、エディポス・コムプレクスは放棄せられ、抑壓せられ、極めて正常の場合には根本的に粉碎せられてその遺産として强力なる超自我（良心の無意識的な部分）が構築せられる。別の云ひ表はし方をすれば、對象纒綿は放棄せられて同一化がその代りに生ずるのである。自我內に攝取せられたる父親（又は兩親）の權威はその內で超自我の中核を構成し、その超自我は父親から峻嚴さを借り來り、その近親姦禁斷を永續的にし、かくて自我はリビドー的對象纒綿の復活を確保するのである。エディポス・コムプレクスに屬してゐるリビドーの動きは一部分は性的性質を失ひ、昇華せられ、一部分はその目的を禁制せられ、感傷愛的なものに利用せられる。以上の如き全過程に依つて、一方に於いて、性器はその喪失の危機から救はれるが、他方に於いては、その機能は多少とも不自由になるのである。かゝる過程と共に、エディポス・コムプレクスの第一期開花（三歲から五歲まで）は終りを告げて、次に潛在期が始まり、それが思春期の始めまで續く。この思春期になると以前のエディポス願望が新たに蘇生して來て、かくて人間の運命たる健康か神經症かの別れ道が定まるのである。

ところで男兒にとつて右の如く發展するところのものは、女兒にとつては如何なるであらうか。女兒に於いて起るところのものは正にその正反對である。去勢コムプレクスはエディポス・コムプレクスを粉碎しないで、却つてこれを準備する。ペニス羨望のために女兒は母親への定着から追放せられてエディポス的立場の港へと逃込む。ペニス喪失の不安がなくなると共に、男兒をしてエディポス・コムプレクスを克服すべくせしめたところの主要動機は去つて行く。女兒の方は、これに反し、エディポス・コムプレクスに定めなく永く執着してをり、これを構築することも遲いが、これを離脫することも不完全である。超自我の構築はかゝる事情のために困難となり、男兒の超自我のやうに强烈なところがない。

さきに吾人は、女兒が自分にペニスの缺如せることを發見してその發達上に轉廻點が與へられ、その轉廻點から三

様の方向（正常的女らしさ、男性コムプレクスの意味に於ける性格變化、又は神經症、それに關する性慾禁制）の可能性が生ずると云ふことを述べておいた。ところで、男性コムプレクスに關しては、女兒はペニス缺如の不快なる事實を承認することを云はゞ心理的に拒否し、自分の從前の男性的傾向を反抗的に追及し、陰核的活動に固執し、男根を所有せるものと想像せられた時代の母親に、又は父親に自分を同一化してそこへ逃込むやうになる。このやうな逃道に出るには彼女等の體質的な要素がやはり多少の寄與をなす。この體質的要素が能働性のより大なる部分をなすことは、男兒の場合に於いてそれが特質的なのと同じである。この過程の本質は、女らしさへの轉向の道を開くべき受働性がこの發達點に於いては避けられると云ふことにある。この男性コムプレクスの最外面的な所行としては、その對象選擇が顯在的な同性愛の意味に於いて現れると云ふことである。よしんば、この變態は幼兒的な男性傾向を直接同に持續するものではなく、たゞ父親への短期間的愛着が迂曲して現れたものに過ぎないにもせよ……。

女兒が女らしさへの發達と、男兒が男らしさへの發達とを比較して見ると、女性の發達は男性の發達よりも本質的に一層錯雜してをり、且つ一層葛藤的であることが分る。殊にそれには二つの重大な原因がある。即ち、女兒は最初の愛情對象たる母親を父親（後には夫）と取りかへなければならない事と、また性的帶域をクリトリスからワギナに轉換しなければならないことゝである。これに反し、男性は第一期性的開花の時代に實施したところのものを性的成熟期にまで持續することが出來るのである。

女兒に於いて性帶域が轉換すると云ふことは決定的な重要性を帶びてゐることである。幼兒性感の早期開花時代に於いてクリトリスが殆ど常に亢奮の中心となつてをり、さうしてワギナは心理的には未だ發見せられてゐないのにクリトリスはその感受性とその重要性とを後に至つてワギナに委讓しなければならない。もしこの委讓がうまく行かないと、女性はその性行爲に於いて不感となり、せいぐ〜豫備快感的行爲に滿足しなければならないことになる。正常の高潮感（オルガスムス）はワギナに於ける感受を第一の且つ決定的な豫想として持つてゐるのである。

性×に際して女××が拘攝的、保持的、吸收的器關としての活動をなすものであるが、その事は（フェレンチー及

びヘレーネ・ドイチ*に從つて）攻撃的性要素が口唇段階から肛門段階に持ち越され、それが更にワギナにまで持續せられると云ふことを認識すれば、自ら理解せられる。ワギナはペニスの刺戟を受けて、且つ「上から下へ」の轉向機制に基き、吸收する口唇の役割を、「ペニス＝乳房」の方程式に從つて引き續くこの口唇的基礎工作が冷感症婦人の場合には、種々な口唇的症候に依つてぐらついてゐるのである。

註＊『女性の性的機能の精神分析』、國際精神分析學會發行（一九二五年版）參照。

以上は、女性感發達に關するフロイドの見解を紹介したものであるが、さうしてなほその詳細な諸點に關しては後章に精叙するところあるであらうが、簡單なものではなく、また精神分析には緣遠き多くの難問題を含んでゐるであらう。簡單ではあるが、以上は精神分析發祥以來四十年間の研究業績の諸部分を、その尨然たる文獻に就いて包含せしめておいたのである。このやうな困難を多少とも克服するために、フロイドのいろ〳〵の見解は彼自身の言葉を引用しておいたのである。こゝに女性の戀愛生活の發展上の個々の事實を分析學的な術語を以て表現しておいたが、これ等は兒童及び患者の觀察に依つて得たところであつて、分析の經驗なき人々には直ちに呑込めると云ふわけには行かないであらう。要するにそれ等は無意識的に、或は意識せられないで、起つてゐる心理過程を問題にするものである。かゝる結果を確證することは勿論たゞ、根本的分析に於いてのみ可能である。で、これ等は分析の門外漢からは極端であるとかこぢつけであるとか云つて拒否せられることのあるべきは怪しむに足らぬ。（完）

# 千姫の精神分析

大槻憲二

近頃『大阪夏の陣』や『吉田御殿』の映畫製作につれて、千姫に對する興味が人々の間に廣く流布してゐるので、この際千姫の性格に就いて分析的考察を下して見たいと思ふが、併し確實な科學的結論に到達し得るにはあまりに歴史家さへもが文献の不足を歎じないわけに行かない。云はゞ、吉田御殿事件に關する限り千姫は今や殆ど傳説中の人物であつて、必ずしも現實の人物とは云ひ難い。で、我々は寧ろ傳説中の妖姫として、それに對する人々の空想や願望や捏造を分析的に研究して見る方が或は却つて正確な斷定を下すことが出來、また分析的興味もより深いのではなからうかと思はれる。

傳説中の人物としての千姫は完全なサディストとしての妖婦である。吸血鬼（ワンピル）である。それに對する所謂新解釋が映畫『吉田御殿』であつて、脚本製作者原健一郎氏の意圖は、曲中主人公千姫が自分自身の事を云つてゐるところにある通り「愛するものを奪はれたものゝ姿」を描かんとするにあつたらしい。「この世にたゞ一人愛する夫の豐臣秀頼をもこの世から奪ひ去つて平然たる祖父家康と父たる二代將軍秀忠の無道を激しく憎惡し、兕咀して白百合の如く優しかりし千姫の性格は毒の花の如く美しく刺しいものと變つてしまつたのだつた。」（映畫館の筋書による。）つまり、千姫を憎むべきものとせず、却つて同情すべきものとし、そのかくの如き境地に至らしめたものはむしろ祖父家康である、つまり憎むべきは家康だとする考へ方である。併し、かう云ふ新解釋は果して正確な根據を持つてゐるだらうか、解釋者自身の願望が這入つてるるのではなからうかと云ふのが、我々の分析の研究の眼目である。

このやうに千姫を同情すべきものとし、家康を憎むべきものとしてゐる點に於いて、『吉田御殿』はたゞ『大阪夏の陣』(脚本作者並びに監督衣笠貞之助氏)の解釋を踏襲して更にこれを敷衍したものに過ぎない。ところで『大阪夏の陣』に於ける千姫觀(家康憎惡)に就いて、は私既に他の所(近刊『現代日本の社會分析』の內)で論じておいた通り、作者衣笠貞之助氏のマルクシズム的エディポス・コムプレクスに歸せらるべきものであると思はれるからして、『吉田御殿』の千姫觀も、マルクシズム的ではないまでも、少くともエディポス・コムプレクス的であることは斷定し得るやうに思はれる。『吉田御殿』の家康憎惡(惡父コムプレクスの轉嫁)は、『大阪夏の陣』の場合ほどには甚だしくはないのである。

けれども、千姫を同情すべきものとし家康を憎むべきものとし、殊に千姫の亂行の原因が家康にあるとしてゐる見解は、必ずしも衣笠氏や、原氏に始まるものではなく、少くとも私の知つてゐる限りでも、福本日南氏が明かにこれと同じ態度を示してゐる。福本氏は大正十年十月一日發行『中央史壇』秋季特別號「歴史に現はれたる問題の女性」中に『千姫』を擔任し、彼女の好色が祖父家康から遺傳するものであると斷じてゐる。卽ち、福本氏は千姫の亂行を遺傳學的に豫想せんとしてゐるものであつて、その點に於いて衣笠、原氏等が社會學的又は心理學に豫想せんとしてゐるのと異つてゐる。

福本氏は家康の好色を論ずるに、まづこれを豐臣秀吉の好色と比較することから始めてゐる。卽ち兩雄共に好色家たる點に於いては兄たり難く弟たり難いのであるが、たゞその「テースト」に兩雄人物の高下だけに、夫々違ふ」點があると云つてゐる。この引用句に就いて見ても旣に明かに分る通り、福本氏は秀吉の方が家康よりも「人物」が上であると思つてゐる。その上であると斷ずる根據なるものがまた頗る分析學的に面白いのである。曰く――

「太閤の好みは婦人の地位から氣品から容貌にかけ、一流の女性を選んだ。御覽なさい。彼の糟糠の妻たる北政所を除くの外、淀君はと問へば、申す迄もなく、父は淺井備前守長政で、母は有名な織田信長の令妹市姫である。松の丸殿といへば、鎌倉室町に亙り、世に聞えたる名族京極左京佐々木家である。三條殿の生家は蒲生氏で、世々江州の一城主。三の丸殿は織田右府の姫君であり、成田氏はと問へば、關東に隱れもない武州忍の城主である。

「之に反して、家康に至りては、ぼろつ買ひの箸まめやである。彼が前後の媛室たる築山殿と朝日の方とを除

く外は、西郡の局と呼ばせたのは、配下鵜殿藤助が娘。次にお萬の方、後に小督の局など、品好く唱へさした女は、三州池鯉鮒の永井某の娘、是れは築山殿の小間使ひにあがつて居たものを手をつけたのである。次に下山殿とお妻の方とは孰れも甲州の秋山某の娘と聞えたが、銅雀臺でない濱松の城中に二喬を納れて二人とも賞玩した。これからお茶の局と呼ばせたのは、遠州金谷の名もない者の娘で、お八と云つて土地の鍛冶屋の女房となり、女の子迄儲けてゐたのを、地方の代官が、其の瀧皮の剝けた處に惚れ込み、無實の罪を亭主に被せてこれを殺させた上、横取りをしようとした。お八口惜しさ腹立しさに堪えず、娘を抱いて濱松の城に驅け込み訴へに及んだのが始まりで、お慈悲な殿樣、不憫な者よと其まゝ止め置き、代官の罪科は正された、お八は乃公がと來たのである。」

その他、お勝の局、お龜の方、お萬の方、お茶の局、お愛の方、など十人ほどの女出入りがあつたらしいが、何れも下賤の出である、と云ふのが福本氏强調の要點。「試みに、今日殘つてゐる彼家康の肖像の眼を御覽なさい。彼の陰險性と助兵衛さとは、名殘りなく窺はれる。本問題の千姫卽ち後の所謂天樹院は、其血統を繼承した孫女であるから、彼の女の品性又想ひ見る可きである。」

とて、千姫の妖婦性を家康の遺傳に歸してある。併し、このやうに、家康は多く下賤の身分出の女に興味を持ち、秀吉は上流出身の女に興味を持つたので、（一）家康の人物が秀吉のよりも下等であるとか、家康が「助兵衛」であるとか、（二）千姫の亂行は家康から遺傳した……と云ふやうな事が輕々しく云へるであらうか。まづ第一の問題から片付けるとしよう。

（一）下賤出身の女を好む傾向は、これを心理學的に解釋すると、或は本人の幼時に於ける女中コムプレクスから解釋せねばならぬ場合もあるし、本人が母定着を持つてゐてその母イマゴーに對しては性的禁制を持つてゐる場合には、母イマゴーに緣遠いものに於いて始めて性禁制を感ぜず、性的願望はかくて下賤の女に向つて注がれると云ふこともあり得るし、また生物學的に考察すると、家康のやうに相當の家柄の子はその血が既に多少疲勞してゐるので、それを新たなワイルドな血を以て補强する必要から下賤の女に偏好を持つと云ふ傾向も確である。また上流の女に興味を持つと云ふことは、本人の出身が（秀吉の場合の如く）下賤であるならば、これは多くの場合、本人の劣等感の補償として解せねばならぬことが多い。これでなくとも下賤出身の者は上流の者に興味を持ち、上流の者は下賤の者に興味を持つのが恐らく

は生物學的原則に基くものであるらしく思はれる。さう云ふ感覺に於いて極めて鋭い北歐の詩人ストリンドベリーの有名な戯曲『令孃ユリエ』の中の令孃と下男ジェアンとの間に性的關係の生ずる直前の二人の會話は、この問題に鋭い示唆を與へるものであらう。令孃は曰う。「……私は時々一つの夢を繰返して見るが、それを今思ひ出したの。私は一本の柳の上に攀登つて居て降りやうがなくなつてゐるの。下を見ると眼が眩むし、降りなくてはならないけれど、飛降る勇氣はない。私はしつかりと摑まつてゐることが出來なこので、落ちてくれゝばいゝと思ふのに落ちもしない。さうしてその癖、降りるまでは落着いた心持ちにもなれず、下の、下の地面の上に來るまでは安心しないんだね。さうして若し地面へ降りて來たら地面の下へ降りて行きたくなるだらうと…あんたはさう云ふことを感じたことはない？」これに對して下男のジェアンは答へる。「いゝえ、私は暗い森の中のある高い樹の下に寢てる夢をよく見ます。私は上へ登り登つて梢の中まで行つて、太陽の輝いてゐる明るい景色を眺め廻したり、黄金の卵の横つてゐるあの上の鳥の巣を掠奪しようと思ふのです。それで攀登り攀登りするのですが、幹は太いし、滑いし、第一の枝までは非常に遠いのです。でも、第一の枝に屆けば頂上までは、梯子を昇るやうに行けることは分つてゐます。私はまだそこへ屆きませんが、よし夢の中だけの事にしても、私はあそこへ屆かなくてはなりません。」

これ等の夢の內容が、卽ち二人の戀愛性慾心理の根源を告白するものであることは、夢の分析法を心得て居る人々の何人も直ちに了解し得るところであつて、分析學理を知らずしてこれだけの深い分析的洞察を彼等二人の心理の上に加へてゐるストリンドベリーは流石に一流の文豪であると云はねばならない。（右の夢の引用は倉橋久雄氏の報告に依る。なほ詳しくは本誌第四卷第三號八〇頁を參照ありたし。）

この令孃ユリエと下男ジェアンとの心理的關係を家康と秀吉との戀愛性慾心理に適用して考へるならば、家康は心理的に貴族であり秀吉は心理的に下男であつたと云ふだけの事であつて、人物の高下だの、テーストの良否だのと云ふやうな問題とは關係がないと云ふことを悟らざるを得ないであらう。身分の賤しいものはみな人物が小くて品性が下劣であり、上流の人々はみな人物が優秀で品性は高尙であるとでも福本氏は公式的に考へてゐるのであらうか。それならば下賤の出である秀向は階級的に人物が劣惡で品性は下等であると云ふ事になり、從つてさう云ふ人間の愛を受容れた上流の女たちはみな人物

劣悪、品性下等と云ふことになり、結局、福本氏の始めの考へ方は矛盾することになる。これはつまり、たゞ福本氏は心理的に秀吉に同一化してゐると云ふことゝ、氏が女に對しては母コムプレクスを持ち、上流の女に對してゞなければそのコムプレクスが滿足しないと云ふことを、無意識的に告白してゐるに過ぎないのであつて、家康、秀吉の價値批判としての客觀的意義は殆んど全然認められないと云ふことを主張せねばならない。

（二）次に第二の淫亂性遺傳說であるが、それに聯關して福本氏は千姫の血統を次のやうに論じてゐる。「千姫の父は德川二代將軍秀忠で、母は淀君の妹達姫、卽ち後の所謂崇源院である。此達姫の崇源院は世人の知れる通り、淺井長政の三女で、姉妹共に太閤の許に養はれ、一番上の姉、茶々姫、卽ち淀君は早く太閤の側室となり、中の初姫卽ち常高院は京極若狹守高次の夫人となられ、共次の達姫は最初參議豐臣秀勝に嫁されたが、征韓の役に秀勝は出征中彼の地に薨ぜられたので、太閤は夫人を引取り、更に德川秀忠に嫁せしめて、千姫は秀忠と達姫との間に擧げられた長女である。」と。

このやうに血統調べをして見ると、千姫の妖婦性が單に家康からばかり來てゐると斷定することの如何に早計であるかゞ分る。少くともそこには、福本氏の尊敬するらしい淺井長政や淀君の血も半分は流れてゐるし、秀忠の母（お愛の方）の血も流れてゐる。殊に淀君はヒステリー性の女で、その性生活もあまり正常貞潔であつたとは一般に歷史家たちから考へられてゐない。

假りに全部が家康の血統的遺傳であつたとしてもよい。多數の女に關係したからとてそれで「助兵衞」であつたと結論することは如何であらうか。我々は福本氏のやうに、「助兵衞」であることそれ自身を惡であるとは考へてゐない。助兵衞大いに結構であるとさへ考へてゐる。たゞ、それが他人の迷惑になるやうな結果を生みさへしなければ、性慾力は強大な方が、弱劣なのよりは褒むべきことでなければならない。家康は他人へ迷惑になるやうな結果を生んだと福本氏（今は故人だが、もし今日生きてゐたら）は云ふかも知れぬが、併し當時の英雄としてこれぐらゐの亂行は寧ろ當然であつて、他の諸々の英雄だとて或はこれに優るとも劣らぬ面々ばかりであらうと思ふ。たゞ今日の我々とても、もし出來るならば、秀吉や家康のやうに「箒まめ」になつて見たいと思ふが、經濟生活の緊迫はさう云ふ我儘を我々に許さないので、仕方なしに謹愼してゐるだけであつて、もし經濟事情が違つたら世の大部分の自稱謹愼家どもゝ何をやり出すか知れたものでないと私は考へてゐる。只併し、さ

う云ふ自稱謹愼家どもは、自分の謹愼が外的事情に强迫せられたものであることを意識するのが不愉快であるから、これを自分の「人格」の高尙の故に歸し、このやうな外的事情に强迫せられざる人々（英雄）の自由奔放を「下劣」「箸まめ」「助兵衞」などゝ引下げることに依つて、自分の優越感を保つて僅かに肚いせにしてゐると云ふやうな場合とて時にないことはない。福本氏がそれであるとは云はぬが、希くはそれでないことを私は望むものである。殊に私にまでをかしいのは、福本氏がかゝる客觀的な歷史論文に於いて、家康や秀吉に對しては絕對に用ゐぬ敬語を淀君姉妹たちのことを敍するに當つて（右引用句中に見えてゐる如く）連りに「夫人となられ」とか「嫁され」とか敬語を用ゐてゐることである。これに例つて見ても、福本氏の母定着の相當なものであることが察知出來る。これをマルクシストたちに云はせると、プチブル的と云ふことになるのであらう。さうしてこの母定着に於いて秀吉と共通的なるが故に、秀吉の漁色的態度に好意的批評を與へてゐるのであると考へることが出來ると思ふ。分析せられざる人々は、このやうに常に自分のコムプレクスに依つて物事を評量するのである。それ故に、また分析せられた人にして始めて事物を客觀的に批評することが出來るのである。

×

次に衣笠、原兩氏の千姬亂行觀——その原因が環境にあり、境環を作つたものは家康であるとする考へ方——は果して妥當であらうか、と云ふ問題に移らなければならない。この見解に於いてまづ豫想せられてあるのは、千姬が秀賴に對して貞潔の心的態度を終始持つてゐたと云ふことである。第二に、彼女の坂崎出羽、及び本多忠刻に對する本心はどうであつたらうかと云ふこと。第三にはその吉田御殿に於ける亂行の眞相である。これ等の三問題が明白にならない以上、右の衣笠・原式千姬觀は成立不可能となるわけである。

第一の問題に就いては、福本氏は次のやうに述べてゐる。「彼の異說區々に『天樹院入輿ありけれども關東をきづかいがりて、秀賴一度も奧へ入らず』といふもの、やゝ此消息を洩してゐる。それ丈あつて、秀賴の寵幸には別に其人ありて、千姬は御臺といふ者の、實は名のみであつたかも知れぬ。左樣想はれる事は、秀賴自刄の際、世餘名殉死した人々の筆頭に、前の伊勢國司北畠氏の姬君に、わごの方と呼ばれる女性のあるのでも知られる。恐らく是が內實の御臺であつたらう。從つて千姬は如何にぢれたく心憂き日を送つたことであらう。」と。彼女少くとも千姬は秀賴に殉死はしなかつたのである。彼女

が夫に殉死せず、一人城内を遁れて家康の陣中に歸つて行つたのは、勿論、表向きは秀頼母子の命乞ひをするためと云ふことになつてをり、自發的ではなく、家康側の示唆に基き大阪方の人々の慫慂によるものではあるが、果して彼女が何處までその使命を誠實に果す意志があつたかどうかは、今日の我々には確實に分らないところである。それは一つには秀頼と千姫との間の感情關係の具合によつて決定せられねばならぬが、その感情關係は、さきに引用しておいた福本氏説に依ると、あまり匂はしいものではなく、二人の間には實際上の夫婦關係はなかつたやうに云はれてゐる。どうせ許婚關係などゝ云ふものは、そこに近親姦禁制が働いて多くの場合終りを完うせぬものであるが、千姫秀頼の場合も或はさう云ふ事情になつてゐたのではないかと想像せられる。もしさうだとすると、千姫の脱城心理は、自分一人助かりたかつたのだが、そんなことを露骨に表明するわけにも行かず、幸にして秀頼母子命乞ひの責任を押しつけられたので、それをいゝ口實にして遁れ出たのだと解釋するのが最も事實の眞相に近いのではなからうか。

『是れより先き、家康は何とか千姫を城から引出したいので、左右近親の諸將に對し、『姫を無事に城中から連れ來る者へは、相當の恩賞を加へるが、其者の望みとあらば姫をも遣はさう』といふ意を漏らした。日頃好色にしてへうきんな坂崎直盛は、自分此恩賞に與からんと、さてこそ亂軍の中を侵して城壁に近寄り、果して姫に邂逅して連れ歸つたのであるから、彼の喜びは家康以上であつたであらう。此間の事情は、幕府の記錄や關東方の史料には、極めて曖昧に事實を糊塗したから分り兼ねれど、直盛は直ちに之を家康に報告して姫を貰ひ受ける許可を得たものと見える。それで其夜の守護も彼は直盛に任せられたのであらう。此夜が夜である。千姫にして節操などを解する女であつたなら、所天と仰ぐ秀頼生死の境であるから、食も喉には通らず、寢ても寢つかれぬ場合であるが、其邊には何の頓着もなく、流石に祖父の血を受けた姫だけに、男珍しく早くも直盛に心を移したのであらう。其夜の內に直盛は嬉しい手付位は賜はつたかも知れぬ。左樣想像される理由は後に詳述するであらう。」と福本氏は語つてゐるが、後の「詳述」は遂に與へられてはゐないのである。福本氏はなほ續いて述べる。

「斯くして千姫は坂崎直盛の妻室と內定し、伏見から二條へと送られ、此女に目のない家康に久し振りに會見し、更に江戸へと送り返される。其途中勢州桑名の渡しへと差し懸つた。此地は本多美濃守忠政が領地であつたから、其舍弟の所謂中務大輔忠刻をして渡船の警衛に當

らせた。時に千姫は十九、忠刻は廿歳、其忠刻は却々の美男で、それが千歳の御座船に乗込み、時代の簡單さは腰に金の釆配は挟むが、着物の裳裾を端折つて操船の指揮をする。兩股の間から紅絹の下帯がちら〱見える。其男振りなり、意氣さなり、千姫の眼にはえも云はれぬ殿御に見える。前の坂崎出羽守が色の眞黒い醜い男振りに較べれば雪と墨との別があるので、早くも亦又此方に心を移した。爾後關東に歸つた後、祖父の家康に泣付いて忠刻へ嫁したいと訴へたのである。すると節操や約束を變改する事は朝飯前で、何とも思はぬお祖父様の事であるから、可愛い姫が願ひとあれば何でも諾し〱で、坂崎直盛には何の斷りもなく、翌元和二年九月に本多家に再縁させることになつた。………彼直盛は此事を傳へ聞き、それでは男の一分が立たぬと憤激し、頭髪を斷つて坊主姿となり、家の子郎黨もこれに倣はせ、邸内に立て籠り、姫を美事入輿の途中に奪ひ取つて見せると犇めいた。此事軈て幕府の知る所となり、直盛が家老坂崎勘兵衛を呼び出して或る内命を傳へたので、勘兵衛は一日自棄酒に沈醉する主人直盛を庫の中に連れ込み其戸を締め切つて幕府に報告したから、幕府は直ちに取手の一隊を差向けて其邸を取り圍ませた。直盛之を見て今は是れ迄なりと觀念し、腹搔き切つて庫中に果てた。是れで千姫は秀頼も振ひ落し、直盛も亦嚙み倒した。

「斯くして好きな〱本多大輔忠刻の令夫人となられたが、是れは又餘りの愛情に、婚後また數年を出でざるに血氣盛りの忠刻も神經衰弱に罹り、卅一歳を一期として敢無く病歿した。是で男三人が三人とも皆倒れた。」

このやうな事情であつて見ると、千姫が秀頼を思慕するのあまり自棄的に亂行をしたと云ふ解釋は如何にしても無理であつて、結局我儘な、サディスティックな、云はば阿部定型の女の衝動的行動であつたと見るのが最も妥當である。

「それから後の千姫は天樹院と稱し、或時は竹橋御殿にも居られたが、これでは幕府の大奥に餘り接近するので氣鬱性な處もあつたらう。傳へる所に依れば、軈て舊吉田大膳亮某の邸趾に新御殿を營ませ、此處に引き移つて淫蕩三昧に其一生を送つたといふ事である。『吉田通れば二階から招く、然も鹿子の振り袖で』と云ふ當時の流行歌は卽ち之を誦つたものであるといふことである。併し吉田御殿を捉へて直ちに吉田通ればと云ひさうにもない、如何なものか。而して傳說子は種々の說を捻り出し、邸前通行の好男子と見れば片端より引きづり込み、其男を弄んで最後には醜聲の漏れん事を恐れて悉く之を慘殺させてお跡を蔽ふたといふ。果してそれも如何かは

知らぬ。」と福本氏は疑つてゐる。併し全然火のないところに煙は立ちさうにもないし、また千姫の前半生のサディズムと自己中心主義とを思ふ時、さう云ふ事實の片鱗くらゐはないでもなかつたのであらうと想像せざるを得ぬ。

して見れば、彼女の亂行が環境の故であつたとしても、その環境を作つたのは家康とするよりは忠刻を吸血し盡くして（福本説に依れば）且死せしめた、そのために後半生を後家で通さねばならなくなつた彼女自身の作り出した環境のためではなかつたか。併しこの論文の始めに斷つておいた通り、我々の興味は千姫の行動それ自身よりも、これに種々な解釋を加へる歴史家や、文藝家、映畫脚本家の心理の方に主として注がれるのである。映畫『吉田御殿』では千姫は秀頼思慕のあまりなほ若い内に佛前で自刄したやうになつてゐるが、實際は七十歳になるまで呑氣に生き延びてゐたのである。このやうに事實は種々な方面に歪曲せられてゐるが、それは映畫家たちのコムプレクスのためと云ふよりは、一般民衆の普遍的コムプレクスに迎合してこれに愬へることが作品の商品價値を高める所以を知つての仕業に過ぎないのであらう。

即ち彼女は美しく淫亂、且つ無貞操であるが、それは彼女自身の責任ではなく、本來「白百合」のやうに淸らかであつた彼女をこのやうな女にしてしまつたのは憎むべき父親型の男家康にあるとせられてゐるのである。かうすれば、觀衆の憎惡は千姫に向はずして家康に向ひ、同情と尊敬とは千姫に專ら注がれ、而も他方その淫靡性と亂行場面とを大つぴらに（良心の苛責なしに）享受することが出來るわけである。このやうな大衆的コムプレクスの要求に應ぜんとするのが映畫家たちの脚色の主旨であるから、事實への右の如き歪曲の源動力は民衆一般の幼兒性と母コムプレクスとにあると云ふことが出來るのである。映畫中の千姫こそは聖母と娼婦母との兩シムボルの一體となつて出現したものに外ならない。幼兒より見たる母が聖女と娼婦との相互に矛盾する二面となつて分裂し、その間の調和と妥協とのために彼等幼兒が無意識的に如何に努力するかはフロイドがその『戀愛論』の中に詳しく說いてゐるところである。（完）

# ナルチスムスと涅槃原則

奥本島田

## 一、小序

人間は生れながらにしてナルチス的であるといはれてゐる。ナルチス的は、人間が外界に對するリビドーを自己に引上げる傾向であつて、俗にいふ自惚又は、獨尊觀念とも言はれてゐるものである。人間の心理がナルチス的であるといふことは、現實を如實に觀察するためには不都合である。だが、生物としての人間を如實に觀察するものは生物學者である。彼等は、人間神造説を進化論と置換へてしまつた。實に進化論は人間がナルチスティッシュな傾向の觀察を自身にしてゐたことを悟らしむるものであつたのだが、人間がナルチス的心理を客觀化してゐない限りさうは悟り難いであらう。ナルチス的な心理は吾人を一般の動物とは全然別の崇高なものにしたとも云へようが、その反對に非常に陰慘にし、又自己自身を殺してしまふものでもあるとも云へる。吾人は崇高な人間として生くる理想のもとに先づ生物人間として生くることから出發せなければならない。本論に於いては、その意味に於いてナルチス的心理を考究してみやう。

## 二、ナルチスムスと性（繁殖）

愛といふ名で呼ばれて社會生活の全體を覆ふてゐるところのものは性生活の昇華した姿である。我々はその性生活の根本について述べて見たい。人間を崇高なものとして認めやうとするためには、生物的のことは意識の表面に露出させてはならない。別言すれば、さう云ふことは無意識下に抑壓せられてあらねばならない。

原生物、例へば、アメーバの如き動物の個體繁殖は、

分裂的になされるもので、一個體が殆んど同大になつてから分裂して親子の區別のない二個の新しい個體を造るものである。これを人間の如き所謂高等動物に比較すれば極めて簡單な形式を取つてゐるのである。人間がその兩親から完全に分離獨立するやうになるのは、その兩親の生活と同形態、卽ち結婚生活に入るに至りてであるもの、やうである。こゝまで發生的經過をたどらしむる兩親の作用と、原生動物が親と同形態にまでその生殖細胞を形成する作用とは、生物的見地からすれば對比することの出來る部分である。唯、原生動物と高等動物との生態が異つてゐるので、全く別な生殖法として分類的に示されて無性生殖及び有性生殖となつてゐるのである。有性生殖（高等動物の繁殖法）と無性生殖（原生動物の繁殖法）とがその機構的意義は同じだとしても、吾々は怪しまないのである。如何となれば、性生活に就いて、生物學の進化論的見地から、並びに精神分析學的見地から觀察すると、高等動物は原生動物時代の繁殖法の反覆を强迫的になしてゐるのだと云ふことが分るからである。

有性繁殖は性器と他の肉體の部分とを對立せしむるものである。性交も亦然りである。性交は性的衝動の緊張を解放弛緩せしむることによつてこの對立を無くしてしまふ。で、性交は兩性の結合と分裂（この分裂とは性器と他の部分との對立のみならず個體の分裂對立をも意味する）とを象徵的になしてゐるものである。高等動物の遠い過去――原生動物時代に――於いては細胞分裂による增殖をなしてゐたのである。性交の意義と等しいことは細胞分裂であり、原生動物の繁殖は細胞分裂によるものである。性交は有性生殖動物が單純に充足されないやうになつた過去の原生動物時代の分裂增殖法を複雜な形式で充足してゐるのである。

生物の繁殖作用の原形は細胞分裂である。それによると、親子同形態に成長して分裂するのを原則としてゐる。このことから二つの有意義なことが發展する。卽ち親がその子を一人前になるまで養育することは大きな努力を必要とするが、その努力を中途で放棄することを欲しない。その反面に於いては、運命付られた自己の道程をたどる以外の途を撰ぶことは出來ないのである。運命付けられた途以外をたどらないといふことは、自己保存と云ふ形態を必然的に取ることゝなる。

性交は性的衝動の緊張を解放、弛緩せしむるものである。かく意識的に制禦しがたい性衝動が自動的に緊張を解放すべき働きを生ぜしむるといふことは、生物（有機體）が無機物としての安泰感（死）を願望してゐることを證するものである。性交は生物の繁殖作用の原形の象

徴である。繁殖は親子同形態に至つて分裂することを原則とする。緊張の弛緩は安泰感（死）である。故に自己保存とは生物が自己流に死んで行きたいといふ願望である。

生物より生物が發生するためには、胎内に於いて生物發生の最初から今日までの生物發展史をある形で反復せしめなければならない。これは有機體を擾亂さんとする外界からの力に抗してなされるものである。

吾人は外界を完全に征服して絶對安泰の世界に生きることは出來ない。ところが無意識では安泰感を願望してゐる。この願望を充足せんとするための人間の有機的作用は次の如くであるらしい。卽ち外界の困難を全く征服せんとするために、自己自身に於いて假想的に外界を生ぜしめて、この假裝自然を征服する部分、これは假裝自然に對して自由自在に活動し得る部分で、絶對の自由自在といふことは安泰をも意味するものであるから、無意識がこの部分になる如き機構が出來上ればよいわけである。さうして、假裝外界を造る機制は自己保存以上には出ないことに制禦されてをらねばならないのである。假裝外界は、夢、生理、象徴、幻想等によつてもなされるし、其他人間の行爲凡ては假裝的に外界をそれ自身に造り得るものである。以上の消息を精神分析的に言ふならば、エスの願望するところは自我によつて充足され、自我は超自我によつて牽制されるのだとも言へやう。要するに外界に對してエスと自我と超自我との調和がとれて居れば良いのである。生理學的に云ふならば、體温と脈搏と呼吸とが、常に平衡を失はなければ、健康である如くに。

## 三、免疫現象と反復强迫作用

吾人は精神分析學によつて次のことを認める。卽ち、吾人の體驗した過去の現實は、吾人がその後類似の現實に會した場合に、過去に於いて體驗した最初のやうな態度を示さないで、現實を內的に處理してしまふことを得しめるものである。換言して、次のやうに說明することも出來やう。——過去に於いて現實的であつたことは其後同様な機會がある每に心的に過去の現實を反復することによつて新たな現實の壓迫から逃避し得らるゝ。その機會とは、現實的の意義が嘗て過去に於いて經驗して環境に相當するものである。で、過去に於いては現實的に大きな衝擊を受けた體驗を持つてはゐるが、其後に於ける該體驗と同種類の體驗の中に生存してゐながら最初に受けた衝擊よりは、餘程その印象がやはらげられてゐるか、或は、表面上何らの印象をも受けないで經過する

か、その反對にその體驗を征服したるが如き態度に出るかであるが、いづれにしても環境になれてゐるものである。このことは夢を分析することによつてよくわかる。吾々が晝間に於いて過去に體驗したことを再現する如き環境にある場合に、その再現性は抑壓されて、睡眠中意識の弛んだ時まで持越されて、過去に體驗したことを心的にある一定の形と經過とによつて再現してエネルギーを消耗せしめてゐるものである。夢とはこのやうなものである。で、現實的にまぬがれてゐると考へられてゐる不快なる行爲、或は、心的行爲は、實は決してまぬがれてはゐるわけではないのである。

人間の現實的體驗はそれが最初のものに類似してゐるものである場合に於いては、內的に處理されるといふ精神作用と、生理上の免疫現象とは同じやうな機制であるらしい。卽ち、一度罹病せるもの或は免疫注射などにより其後該疾病の傳染の環境にあるも罹病を免れる生理作用は、抗毒素が生じてゐるために病原菌をして病的現象を起さしめないのだと考へられてゐる。併し、精神分析的な考へ方によつて說明すれば、反復强迫の生理作用のためだといへる。

免疫現象と反復强迫作用とが同じ機制によるものではないとしても、有機體としての生物をして現實の困難なる環境に存續せしむるには現實を平和に感ぜしめねばならない點に於いてはその軌を一にしてゐると云へる。一面から吾人の有機的活動を見ると、そのために働いてゐるのである。それが心理的であるにせよ、生理的であるにせよ。こゝで吾々の內的には搔亂さんとする衝動があるが、それは外部的には涅槃願望を充足せしむるものなることを認むることが出來さうであるが、尙もう少し論を進めて見やう。

人間の行爲で最も秘密なのは性的のことである。性的のことは凡て內奧に秘む性質をもつてゐるらしい。これは性が一面に於いては生物の現實逃避行であるからだ。で、性本能は生物が發生して經過した外界的のことを反復するものであつて、その結果として生物から生物が發生する。さうして子は親の形質を遺傳されることゝなつて現はれて來る。

反復强迫作用は、生物の進化を來さしむるためには援助するところあるものゝやうである。具體的の例を示せば、或るヒステリー患者が何らかの外的の衝擊を受けて、それがために水を飮むことが出來なくなつたと假定しやう。併しながら、日常の生活には差支がない。普通の人は水を飮む必要がある時でさへも、そのヒステリー患者の內部に於いては水を飮まなくとも差支ないやうに

復强迫による現實生活の安泰の體驗に基づくものであると考へれば何等不思議なことでもない。人間が外界を自由にせんとする願望は甚だ强い。それが科學的であらうと、宗敎的であらうと、如何なる形を取つてあらはれやうと。それは結局、生物以前の安泰狀態――靜寂――を願望することによるものである。

## 四、結　語（自己分析）

以上で本論を終つたのであるが、この本論を終ると同時に私に聯想されることは、次のやうなことである。「佛陀は天上界から下界へ下つて淨飯大王の夫人の母胎に身を宿して現世に生れ出たのである。生れた時に――天上天下唯我獨尊――と稱へたといふ。長ずるに及んで修學習業したが世の無常なることを感じて、名譽、財産を捨てゝ山林に入つて修業し、苦惱した結果、生死の悟を開いたのである」。この聯想と本論とを比較して見ると、結局同じ心理なのであることに氣付くのである。本論に於いて述べたことはなる程生死の客觀化ではあるが、私は人間としての悟を悟つたといふ願望を充足してゐるのである。精神分析に於いてナルチスムスと涅槃原則とを認識するのは難しいことではあるが、その報は十分にある。（昭和一二・七・二六）

生理作用はたらいて、水を飲まうとするとかへつて苦痛を覺えしめる。かういふ變化は、反復强迫作用のために、最初の外傷は其後内的に處理せらるゝ結果によるものであると考へられるのである。生物學者の說によれば、人間に水棲動物時代から陸上動物時代を經て來たのだといふ。このことゝヒステリー患者の變化とはいづれも何等の關係がないことではないのである。それは、生物が反復强迫作用によつてその環境に生存が可能なる範圍に於いて、生物はその環境の變化によつてたへず進化するからであらう。

反復强迫は過去の現實を内的に處置してしまふことによつて、過去に於いて外界に對した態度をとることは免ぜられる。このことは胎兒が外界（胎壁）に對して安泰に經過してゐた如くになさうとする傾向に就いても云へる。で、現實を安泰に（極樂淨土の如くに）すごさうとすることの原形は母胎内時代にあるのである。外界を自由にせんとするナルチスティッシュな願望は反復强迫を無礙になさうとする心の投出である。外界の現象は反復强迫によつて内的にある形で移されるものだから。

吾々は地上に天國生活を願望してゐるものであるとはいへ、吾々の修學、修業、社會生活等に依つては何等安泰の結果は得られない。が、それ等のことは無意識の反

# 「精神分析學の醫學的價值」拾遺（フランツ・アレキサンダー）

木村廉吉譯

Franz Alexander: Addenda to "The Medical Value of Psychoanalysis", The Psychoanalytic Quarterly, Vol. V. 548—559, 1936. は同著者の「精神分析學の醫學的價值」への追加であり、主として同著の第四章「器質的疾患に於ける心理的要素」（本誌五月號參照）を補修せるものである。なほ同著の全譯は雜誌「腦」の五月號から九月號に連載されてゐる。（譯者）

## 一、心身相關關係の知見に對する精神分析學の寄與

精神分析學の抑もの濫觴は、心理的要素が身體的の症候を起す「變改性ヒステリー」"Conversion hysteria"の概念に還る。實際、フロイドの最初の精神分析病歷の一つなるDoraの例は、無意識的の精神的影響から來た身體的症候の說明に供されてゐるのである。ヒステリー性變改に關するフロイドの本來の見解は既にこの書（「精神分析學の醫學的價值」）の第二章に於て述べられた。この理論の骨子は、あらゆる心的慾求がそれに適合せる身體的表現を求めるといふ事である。かやうな表現の正常の途は、意識我と稱せられて恐らくは解剖學的にも生理學的にも大腦皮質に位せる體系を通してなされるのである。意識我は、吾人の生物的要求に由來せる心的緊張を解除するに役立つ、筋肉司配を統制してゐる。すべて吾人の隨意的の神經司配 innervation は適當の行動によつてこれ等の要求を滿たすに役立つ。又涕泣、哄笑、或は顏面の紅潮の如き、感情興奮をあらはすに役立つ、一列の自働的の精神・運動性現象もある。もしこれ等正常の道筋を通る通路がふさがると、すなはち

感情傾向が抑壓されると、近路にも比すべき異常な解除が無意識的司配の形をとつて起る。これがヒステリー症候である。その症候は抑壓された願望或は願望的幻想に象徴的表現を與へ、かくてその異存ある內容の爲に患者が遂行し得ぬ隨意行動の代用として役立つ。

意識的神經司配と無意識的神經司配との主なる相違は、後者が意識我を通してゐない點にある。意識司配と無意識司配との間のこの區別に對して解剖學及び生理學的說明を與へる事が實際に要望されるならば、感覺刺戟の運動纖維への傳導はヒステリー性過程として皮質下の中樞を通して起り、隨意的司配の如く大腦皮質の運動中樞を通しては起らぬと假定される事が出來るだらう。しかしながらこの過程の解剖學及び生理學的基礎に關すら知見も缺けてゐる始末だし、それを研究する方法する存在せぬ。他方精神分析的手法は、少くとも精神・運動過程の精神的方面を再構成しその無意識的內容を意識的にする事を可能ならしめる。この處置の治療的意義は、無意識的の心的刺戟は意識的となつた後には。神經症の症候の動力的基礎を破壞する、感情表現の正常の途の中に解放を見出す可能性を得るといふことである。

かくて或る器官機能の、感情的に條件づけられたあらゆる障碍は本來、涕泣、哄笑及び顏面の紅潮の如き正常の心理・生理學的過程と同樣である。しかしながら正常の反應とは次の三つの重要な點でちがふのである。(一)或る器官の心因性障碍の場合には、表現を求める感情は無意識的でありすなはち抑壓されてゐるのである。通例には笑つたり泣いたりする人は少くとも或る程度までは笑つたり泣いたりさせる心理的の理由を說明する事が出來るのである。胃神經症を病んでゐる患者の場合にはかういふ事は無い。かやうな病人はその胃症候を起させる感情を述べる事は出來ぬ。彼はその症候の心理的起源をすら知つて居らぬ。彼は心理的の起因を否認しその病氣に對する何か身體的の根據を發見しやうとするだらう。そして大抵の場合醫師の支持を受けつゝさうするのである。(二)、心因性の障碍は心的緊張の異常な或は不完全とも云はれる表現である。それは笑つたり泣いたりすることの樣には、原因をなす感情的緊張を存分に解放せぬのである。(三)、症候は正常の精神・運動的反射と同樣には心的緊張を解除し得ぬから、慢性の機能障碍の原因たる不斷の緊張がそのまゝ續けられる。

## 二、變改性ヒステリーの理論を器質的疾患の分野に及ぼす事に關する批判的論議

はじめて器質的疾患を精神分析的に取扱つた。この分

野の先覺者の著述（殊に Georg Groddeck, S. Ferenczi 及び Ernst Simmel のであるがしかし又 Felix Deutsch の初期の著述も）の中には植物性器官中に起る身體的現象をすら、フロイドがはじめて手足の一つに見られる不全痲痺やヒステリー性感覺異常の心理的意味を解釋したと同樣に、感情をこめた考へ幻や想の如き決定的な又高度に特殊な心理內容の直接表現として解釋する强い傾向があつた。器質的疾患の分野に近づくに際して、これ等の著者の多くはヒステリー性變改の理論を何等の修正も無くそのまゝ適用した。彼等はヒステリー性變改に關するフロイドの見解が、隨意的神經統制の下にある器官及び感覺受領器官に於ける現象の觀察に基づいてゐるといふ事實を見落した。植物性器官に於ては心理的內容の詳細を表現する可能性が、隨意的に統制される器官及び感覺受領の器官に於けるよりもはるかに制限されてゐるといふ重要な區別が明かに彼等の注意を逃れた。彼等は言語が、感情或は觀念が運動的發現を果す唯一の機能では無いといふ暗示的の考へ方を幾分無批判に適用した。顏面表情や身振りが心的內容の微妙な細目をすらあらはす點に於て言語にあまり劣らぬ事や、顏面の紅潮や皷動或は下痢の如き、種々の感情衝動によつて促進される不隨意性器官過程も亦あるといふ事の眞實は疑ひない。しかしながら言葉や表情や身振りにくらべて植物性器官は心的刺戟に反應する多樣性を制限されてゐる事は明かである。これ等の器官の機能は或る定まつた生理的實行に制限され拘束されてゐる。言語を通して思考を象徵的にあらはす事に對しては最も複雜な又殊に適合せる器官が吾人の自由になり、談話を構成する極度に複雜な司配を通して吾人が表現する詳細な考へをあらはす爲には他の如何なる器官も充分その代りをする事は出來兼ねるといふ事を考へねばならぬ。心臟は皷動する事が出來るだけだし、胃や腸管は限られた種類の運動行動や分泌機能を有し、肺臟は一定の量的制限以內でその生理的に定められた活動を演ずる事が出來るだけである。恐怖に對しても、性的興奮や又樂しい期待に對すると同樣、心臟は常に皷動を以て應ずるだらう。

＊これ等の一般的考慮のみが、植物性機能に於ける變化に或る特殊の象徵的（觀念的）意義を歸する理論が極度に承服し難い事を示す。一定人に向けられた敵意ある幻想の如き微細な心理的內容が胃の機能によつて象徵的に表現され得やうとはほとんど信じ難い。それに對して胃が反應するものは一定の人に對する報復の如き特殊の考へではなく、恐らくは、勿論非常に特殊な性質は持つてゐるだらうが、單に感情的の緊張や慾求のみだらう。＊＊

*譯者註——植物性器官とは植物性機能すなはち動物に個有なる機能（意識・隨意運動・意識性感覺）ならざる生物機能たる生長、生殖に關する機能例へば循環、呼吸、消化、吸收、排泄、分泌、内分泌、生殖等の機能を司る器官を言ふ。從つて植物性神經系（或は自律神經系）とは植物性器官に分布する神經を總稱する。器官神經症は形態的の病理變化を示さぬ、植物性器官の疾患を指し機能的疾患に屬す。

**原著者註——植物性機能障碍の原因に關するこの型の解釋、例へば心臓が男の性器を象徴するとする如きはフエレンチの書いたものゝ中にすら見られる。Fenichel は心臓神經症の一例を、患者がその心臓を自分の超自我と同一視してゐる事を基礎として解釋してゐる。この型の原因象徴解釋は、その患者の夢の生活が同じ性質の象徴的關係を包含する時ですら充分否認される。彼の心臓病に關する患者の二次的知見は象徴的の意味を持つて夢の中にあらはれる資料（「晝の殘物」）を供するだらう。しかしながらこの事はかやうな幻想が身體的症候の原因作用中に何かの役割をつとめるといふ假定を是認せぬ。

變改性ヒステリーの理論をこの様に擴げる事は、科學の歴史にありふれた誤り、すなはち確かな觀察から得られた概念を本來異なれる他の分野に無批判に用ふる事の定型的の一例である。

變改性ヒステリーの理論を改修する事なしに植物性器官の障碍に適用する上の今一つの根本的の難點は、隨意的に統制された器官或は感覺器官に反して多くの植物性器官は心の中に、恐らくは無意識の中にすら、何等の直接心理的（確かに何等の觀念力的な）表示を持たぬ點にある。植物性器官の心的生活、殊に觀念力に對する關係は、ヒステリー性變改症候の見られる器官すなはち隨意的、並びに感覺的系統の關係に比してはるかに手薄である。もし吾人が解剖學によつて肝臓の存在を學ばなかつたなら個人的の經驗によつてそれを知る事は無からうがしかし吾人は自分の手足や皮膚や眼の存在は直接知る事が出來る。吾人が植物性器官の大多數の存在や機能の無意識的知識をすら持つてゐるといふ證據は何も無い。

近頃の討議でエルンスト・ジムメル Ernst Simmel は變改性ヒステリーに對して器官神經症に於ては、子供の發達は極早期（生殖前期 Pregenital Period）に屬する心理的要素すなはち榮養や排泄と關聯せる心理傾向が包含されてゐる事を力説した。*この事實はジムメルが以前の著書の中では認めなかつた、變改性ヒステリーと器官神經症との重要な區別を説明する。以前に自分が指摘した如く、この早期に於ては子供の心的生活は高度に特殊殊された觀念力的な要素を包含せずに主として、植物性機能と關聯せる一般の感情傾向から成つてゐる。他方

に於て變改性ヒステリーの感情の源は、子供が既に話す事を覺えてその感情を言葉にする事が出來、觀念や幻想を形成する事が出來て、愛、憎しみ、嫉妬などの特殊な人事關係の中に感情的にかゝづらはされる樣になる、發達後期（男根統裁期及び生殖期）に屬してゐる。この事實は、症候が特殊な幻想を根據とし特殊の象徴的意義を有する變改性ヒステリーに對して、何故器官神經症に於ては一般的の感情傾向のみが表白されるかを說明する。

*ロサンゼルス精神分析研究團體に於て。なほ Fenichel, Otto: Hysterien und Zwangsneurosen, Int. Psa. Verlag, Wien, 1931, PP. 72 & 73 (Praegenitale Konversionsneurosen) 及び Wilson, George W.: The Transition from Organ Neurosis to Conversion Hysteria (Int. J. Ps. A にて刊行さるべき一例報告) を參照あれ。

しかしながら、心身相關關係を解釋しやうとする以前の精神分析的の企ての最大の誤りは、器官症候は常に中間的身體過程の連鎖の最終の結果だといふ事を充分考慮に入れる事がほとんど未だなされなかつた點にある。變改性ヒステリに於ては無意識的慾求は身體的障碍の中に直接の表現を見出すのに、植物性神經系統に統制される器官過程に於ては屢々中間的生理過程の更に長い連鎖が心理的刺戟と器官的終結との間に記入されてゐる。

## 三、心因性器質疾患の一般的病因型式

胃潰瘍形成の研究に於ける臨床的、生理學的及び精神分析學的接近の配合は、多くの器官神經症や心因性器質疾患の一般の雛型と見做され得べき病因型式を與へる。原因的要素の長い連鎖の中に次の環が區分し得られる。

一、慢性の心的（大腦皮質的）刺戟（被抑壓慾求）

二、心的刺戟による皮質下中樞の興奮

三、植物性機能の局部的變化を來す植物性神經系統（副交感及び交感神經通路）を通して、皮質下中樞の興奮を種々の植物性器官へ傳導すること

四、慢性機能障碍の影響による形態的の組織變化

最後の第四の環まで進まぬ場合吾人はこれを器官神經症或は機能的疾患と云ふ。病理過程が最後の第四階梯まで進んだ場合、すなはち組織に永續的の構造變化があらはれてしまふ場合には吾人はこれを器質的疾患と云ふ。この病因型式は一歩一歩種々の階梯を通つて引きつゞき病理過程を辿り、心理的に條件づけられた身體過程に就いての曖昧さや神秘性を解消する。組織内の粗大な形態變化は心理的の力の直接效果では無くて、器官の生理機能の慢性の恐らくは量的の障碍によつて條件づけら

れる。かやうな機能障碍が中樞的（心理的）起源を有するだらうといふ事は常識である。精神分析學はこの知見に心理的要素の精確な叙述をつけ加へる。

この見解に從へば器官神經症と變改性ヒステリーとの相違は主として症候の位置と、それを通して根原の心理緊張（刺戟）が身體的表現を見出す通路の相違にある。變改性ヒステリーに於ては心理緊張は隨意に統制される器官や感覺領取の器官すなはち、個人と環境との相互反應を仕遂げ從つて心的生活一般や特殊の觀念と不斷に接觸せる器官の中に直接表現を見出す。器官神經症に於ては感情的緊張は植物性神經系統を經て、觀念に對して何等の直接關係を持たぬ植物性器官の機能に影響を及ぼす。この事は、何故器官神經症に於て症候が、例へば變改性ヒステリーの場合症候があらはす幻想の如き特殊觀念的の內容を表現せずして一般の感情傾向のみ表現するかゝ説明するだらう。しかしながら變改性ヒステリー及び器官神經症の双方の疾患に對して共通のものは、その疾患は環境に對する患者の感情關係の障碍された事の最後の結果だといふ事實である。その疾患は無意識的に條件づけられた神經司配であり、その動機が意識から排斥され從つて抑壓される爲に患者が遂行し得ぬ隨意行動の代用である。しかしながら器官神經症に於ては又腦脊髓神經系統及び植物性神經系統の機能の間の働きの分割が障碍される。既に論ぜられた如く神經系統の構造は、一方には環境に對する關係他方には內的過程の調節が腦脊髓神經系統及び植物性神經系統の間に分けられるといふ、勞力の一定の配分を表示する。腦脊髓神經系統の統制下にある隨意的司配は環境に對する態度を調節する。內部の植物性過程は植物性中樞の自律機能によつて統制される。器官神經症は神經系統の働きの配分の混亂をあらはす。すなはち有機體の內治及び外交の境界線がこんがらかつてしまつたのである。正常條件の下に於ては外的行動に至る精神動力量が抑壓されると、誤つた通路をとつて隨意的或は生殖的司配の代りに植物性系統に於ける司配に至る。かくて例へば愛や憎しみが正常に表現される代りに內的過程が影響を蒙る。かやうに精神動力量が外的行動すなはち隨意的司配から植物性器官の司配へ病的に偏向する事は、國民政策中に屢々起る社會現象に比較し得られる。外交方面の野心が軍隊の敗北によつて挫折すると常に國民の內政に過熱せる雰圍氣を生ずる。この事は革命が常に敗戰の後に起るといふ事實及び、革命運動を制止するのに最も有效とされた方法は外國民に對して軍事行動を起すにありといふ事實によつて一番よく示される。內部の社會的緊張は內部事態にかゝはつて

ゐるエネルギーを外部へ向けて外交の途へ導く事によつて解消する。又反對に積極的外交の可能性の減少は國内の社會的難局の危險を增大するのである。

單に心的過程によつて表現されやうが或は機能的性質の身體障碍によつて表現されやうが、あらゆる神經症は個人の環境に對する身的關係すなはち外交政策に於ける敗北の結果である。あらゆるヒステリー性の器官障碍は省略された行動に對する動力的代用である。しかしながら器官神經症に於ては、個人が社會的或は性的行動として表現したり救ひを與へたりする事の出來ぬ感情や願望が內部の植物性過程の不明無言の言葉のうちに表現を見出すのである。

### 四、心理學的並びに生物學的活力の活徑解析

植物性機能に及ぼす心理的要素の影響を研究するに當つて、心理的資料の特殊な觀念內容よりはむしろ患者の一般の感情態度及びその衝動の動力的方向が第一に考慮されねばならぬ事は以前に指摘された。

これ等の一般的態度はいはゞ患者の主なる傾向の方向を表現する動力學的の術語で述べる事が出來る。吾人は感情慾求の特徵をなす三つの主なる動力的方向或は「活徑」"Vector" を分つて、取り込む願望 the wish to incorporate (to take in) と放出する願望 the wish to eliminate と保持する願望 the wish to retain とに分つ事が出來た。しかしながらこれ等は實によく定義された感情態度に相應する抽象である。取り込む活徑慾求は、贈りものを受けたい願望、子供が慾しいといふ願望、愛や心づかひが慾しいといふ願望、食を與へられたい願望或は他の人から何かを取るといふ願望の如き多種の心理態度に共通である。同樣に多くの態度は放出の共通性質を持つてゐる。例へば贈りもの、愛、心づかひなどをすゝんで與へる事、他の人の爲に盡力すること、何か價値あるものを創造する事などはそれである。更に又破壞的に他人を襲擊し、汚し殊に何かを人に投げつける事もある。保持する願望も亦、何處までも所有することを主なる活徑性質とする多種の心理的態度の共通特徵である。

器官神經症の精神分析の間に吾人は、隨分ちがつた特殊內容を持つた種々の心理衝動が、取り込みや放出或は保持の同じ活徑性質を持つてさへゐれば同じ器官機能の障碍を起す事を觀察した。一見したところ、同じ器官機能に影響し易い種々の心因的要素は決して特殊のものでは無い樣に見える。云ひ換へれば同じ障碍が、お互ひに無關係と思はれる多くの種類の心理的內容によつて起さ

れる様に見えるがしかしながらこれ等の外見上無關係な心的要素を更に分析すると、彼等は一つの重要な相、すなはち吾人がその活徑性質と稱する一般の動力傾向の方向を共有する事がわかつた。そこで例へば消化の働きをしてゐる胃だとか或は吸氣運動をしてゐる肺臟の如き取り込み機能を有する器官は、非常にちがつた種々の被抑壓慾求によつて障碍され易いのである。しかしこれ等の慾求は一つの動力的狀態を共有して居り、すなはちそれ等はすべて何かを受けたり取つたりする事（取り込み）をあらはしてゐる。心理的內容のこの一般的動力方向は、それによつて障碍される器官機能の種類と關聯してゐる事が觀察された。例へばこの機能は次に述べる樣々な被抑壓願望の何れによつても障碍される。すなはち助力、愛、金、贈りもの等を受けたい願望や、子供が慾しいといふ願望、或は去勢したい、盜みたい、何かを取りたいといふ願望等である。同じ種類の願望が取り込みにかゝはりのある他の器官機能、例へば呼吸運動の吸氣の段階や嚥下運動等を障碍する。すべてこれ等の異なつた慾求の共通相はその求心的方向であり、すなはちそれ等は何かを受ける事や採る事をあらはしてゐる。かくて吾人の述べる第一の部類は取り込みである。

第二の動力的部類たる放出の慾求も亦莫大な種類の心理的內容を包含する。すなはち一方には愛を與へ、靈力をし、何かる作る事を助け、贈りものをし、子供を生ませる事などであり、他方には他人を襲擊する（殊に何かを投げつけて）願望である。これ等の衝動の何れかゞ抑壓されたり隨意的表現を妨げられたりすると、放尿、排便、射精、發汗、呼氣等の放出性の器官機能が影響を蒙り易い。

胃腸神經症の分析の間にその意義が明かになつた第三の動力的性質、すなはち保持の性質も亦甚だ多樣の心理的內容を包含してゐる。これ等のすべては保持し或は所有するといふ一の共通の動力的性質を持つてゐる。例へばいろ／＼なものを聚集する事、それを配列したり分類したりすること（それ等を支配してゐるしるしとして）や又何かを失ふおそれ、何かを與へるといふ負擔の拒否、持つてゆかれるのを防いだり或は損ずるのを守る爲に物をかくす衝動、母が胎兒を保護する態度等、すべてこれ等は屢々保持的の生理司配の中に表現される。その中一番よく知られてゐるものは便秘だが、又尿閉、射精の遲延、呼吸運動の一定の狀態等は同じ慾求をあらはす事が出來る。

かくて吾人は、取り込み、放出、保持の三つの活徑性質をあらはす、心理慾求の三大部類を分つ。

心理學的並びに生物學的活徑の概念の中に吾人は心理學的並びに生物學的過程の共通分母を見出した樣に思はれる。有機體は實際、その根本機能（新陳代謝）が取り込み、保持及び放出の三つの活徑の術語によつてよく了解し叙述する事の出來るメカニズムと考へ得られる。心理的態度の分析は同じ活徑の術語で述べられる要素的慾求にまで吾人を導く。かくてこれ等の心理慾求或は活徑はその根本的生物過程を有機體の方から主觀的に認知したものに他ならぬといふ假定は肯定される樣に思はれる。或は云ひ換へれば心理的力學は生命の生物學的力學の主觀的反映に他ならぬのである。

同樣の見地が全有機體の機能のみならず又多くの特殊器官體系へも適用される。例へば取り込み、放出及び吸收（保持）の三重機能を持つた胃腸管や或は又吸氣（取り込み）呼氣（放出）機能及び酸素吸入といふ保持機能から成る肺臟の三重機能の如きに適用されるのである。まだ今のところ活徑解析は主として、體表面に口を開いて居りその機能は環境との物質交換から成り又その生理活動は取り込み、放出及保持から成る器官系統（胃腸管、呼吸器系統、泌尿生殖器系統、或る程度までは皮膚も）の研究中にその有用性を示してゐる。これ等の器官に於ける心理的條件からの障碍（器官神經症）は、取り込み、放出及び保持の慾求の間の感情平衡が亂された結果と解せられる。これ等の慾求或は活徑性は、器官神經症の場合それによつて障碍される植物性器官機能の型を決定する。

感情の平衡狀態のかやうな障碍は、精神葛藤の爲にこれ等の主要態度や慾求が、個人の社會的及び性的關係の中に正常表現をなし得ぬ場合に起るのである。*

* 活徑解析から見たかやうな器官神經症の一般論は自分の左の論文中に更に充分論ぜられてゐる。The Logic of Emotions and Its Dynamic Background. Int. J. Ps-A. XVI, 1935.

# 文藝學と精神分析（ムッシュク）（3）

武田忠哉譯

しかしながら、これでわれわれは、かやうな試み——（精神分析による文學理解）——の畫面に對して、それらの暗黑面の一つを摘發しなければならない。特に、しばしばシニックなものと境を接する合理主義と形式主義が、かかるものとして强調されねばならない。これらの主義によつてフロイド學徒は、かつて構成された概念裝置を文學史の最大かつ最小の現象に對して批判と選擇なしに强制するのである。

かなり以前から精神分析による文學考察は、最も明白に、J・ザードガー＊によつて代表されてゐるが、彼は、全く二流の雜文家にすぎない。クライスト、ヘッベル、コンラート・F・マイヤーに關する彼の論文は、粗悪な細工品として記號づけられねばならない。われわれはこの運動の名譽のために、「かやうな書物はけつしてその文藝學的關心の正しい狀勢を示さなかつた」と云はねばならないのである。

＊イージドール・ザードガー（一八六七——）。ヴィーン。神經醫。精神分析。文學批評。

それにもかかわらず、何故にアカデミーの文學史家はこの方面において消極的であるが、それを部分的に説明しうる多くの特性が、本來なほザードガー以外にも、精神分析派の出版物に充分に殘りつづけてゐる。すなはち、これらの書物において藝術的等級が無視されることは、精神分析が引用する根本概念の性質からだけでなしに、それらの作品と作家——（文學の共犯者の證人として引用されるところの）——の選擇からも生じるのである。

例へば、イェンゼン＊の「グラディーヴァー」に關するあの

フロイドの論文では、ミュンヒェンの亞流作家のサークルから生みいだされた一つの小說が、省みるところのない專心をもつて取扱はれてゐる。そして、この作品の質は、エマーヌエル・ガイベルとパウル・ハイゼの名前と並んで、むしろ、あまり高く云ひ現されてゐるのである。

*ヴィルヘルム・イエンゼン（一八三七——一九一一）。抒情詩。短篇小說。特に初期には、テーオドール・シュトルムから影響され、情調詩人として彼のスタミナを發揮した。

しかしながら、この場合の判斷の不確實性は、なほ種々の理由から把握を期待することができる、が、例へばシュテーケルにおいて、それは明かな沒趣味にまで强化される。彼の、文學者の夢に關する研究の主要部分は、現代作家の戶別訪問の結果から成立してゐる。しかし、これらの作家の壓倒的多數にもかかはらず、少しも文學の專門家の注意を强ひることができない。何故なら、彼等は、殆んど一つの乏しい平均水準にも達してゐないからである。

その他の、大部分の精神分析學者も、近代文學の領域へ步み入るときには、ほとんどその藝術價値に關しては論じるに足りない文學作品に彼等の注意を向けるのである。

最後に、ユングの「心理學的タイプ」もまた眞に最も不遜な聯關において、シュピッテラーの「プロメートイスとエピメートイス」の分析に對して一つの場所と意味——（やはり同じやうな批難を呼びおこすところの）——を與へてゐる。さらに、この書物には、ホェルダーリーンの詩の解釋が含まれてゐるが、內容を重く見るために、この詩人の天才的な形式賦與に對する畏敬の念があまりに甚しく忘れられてゐるやうに思はれる。

さらに附加されることは、フロイド自身は別として、精神分析の文獻は、ほとんど全部あの醫學ドイツ語——（不評判な、しかし、それが當然である）——によつて自ら充足してゐる。しかしながら、この醫學ドイツ語は、近代における文藝學研究の藝術的傾向と比べて最も烈しい對照を形づくるものである。恐らくこれら二つの觀點の內的對立はまた形式的にも、一層いちじるしく刻みつけられることは出來ないであらう。

結局、歷史的に考察すれば、かやうな對立は當然でなければならない。何故なら、フロイドの初期の大著述が成立したのは、荒涼とした藝術イデオロギーと自然からの疎遠とが多くの反動を呼び起さねばならない時期であつたから。

これらの反動の一つとして、いままで偶像化されてゐ

た古典主義的な藝術家のタイプが精神分析によつて拒否された。そして、それを補充するために、可成高い天分をもつ人間も、物質の力、血と運命――（自然科學的に規定された）――の力に不可避的に結びつけられてゐることを示したのであつた。

さらに、これらの、逆の方向をもつ反動の他の一つはいまや通常シュテファン・ゲオルゲ*といふ一つの存在において見いだされる。彼は、すぐれた文學者の理想を一層すぐれた時代に對して保管するために、それを公衆的・國民的な教育事業から一つの嚴かな孤獨へ移した。その後、彼の精神から、文學と歴史に關する一つの考察がスタートを起すにいたつた。恐らくそれは、精神分析的な人格破壞に對して、眞に極度の反對として主張されねばならないであらう。すなはち、それは、超時間的にすぐれた個人――（なほ彼の初期の評論においても、象徵として讃美されたところの）――に對する一つの崇拜、に外ならないのである。

結局、これら二種類の觀察は、本來いはゆる正統派の文藝學と歴史學の外部に發生したが、今日では、これらの學の領域において、最も奇異な治安妨害者の役割を演じてゐるのである。

＊ムッシュクは、文學史研究が卽時代的であることを必要とし、そのためにゲオルゲとは反對な地位を占めてゐる同じくアカデミーの文學史家であるフリッツ・シュトリッヒが、その「文學と文明」（一九二八）において、自ら沒時代的なキャメラ・アングルからやはりゲオルゲを取上げてゐることとは、現代ドイツ文藝學界における一つの興味深い對照といはねばならない。

いまやわれわれがかやうな事實の暗示によつて、とにかくわれわれの觀點を高めるならば、またこれらの精神分析の文獻がもつ多くの奇異な點も、――（いな、それの樣式的な訓練の缺如さへも）――、やや違つた照明の下に現れるのである。

それらの、あまり精練されてゐない態度は、ただ藝術品に內在する葛藤だけを認め、それ（葛藤）が形式によつて克服されることを全く無視しようとする。かやうにして、公式的に鋭化された闘爭テーゼの主張者がつねに好んで身を委ねたところの、一つのより深い意圖・不遜・省みるところのない自負、それらは現代精神分析學の態度と一致するのである。

かやうな自負はその限りにおいて、從來かつて存在しなかつたものを提示するのではない。何故なら、一方の文藝學も、たえず征服者がこの種の野蠻な侵入をくり返す舞臺であつたからである。

われわれはここで浪漫派あるひは青年ドイツ派の定理の時代へバックすることを要しない。かやうな抑壓がいかに烈しく、しばしば誇張をさへ求めようとするか、その歴史的な一例を明かに思ひうかべるために、われわれは、實證主義的觀念がドイツにおける文學史の叙述に導き入れられた場合を回想すれば充分である。

この抑壓によつて生々したイニシァティヴの過剩そのものが示される。しかしながら、それは、その對手（實證主義）が客觀的に論究しようとする意志を妨げてはならないであらう。特に、すべてこれらの運動のスターターであるフロイドが、その運動に關してつぎのやうに叙述してゐる以上、かかる妨碍はますます許され得ないのである。

「結局、ここでは、すべてが最初のスタートに屬し、推敲が乏しく、大部分はただ萠芽であり、しばしばまたプランにすぎないのである。しかしながら、公平に考へる人は、そこに何ら、批難の理由を見いださないであらう。ここには、きわめて多くの課題があるにかかはらず、少數の研究者がそれに從事してゐるにすぎない。しかも、彼等の大部分はは他に何らか彼等の專攻科目を持ち、いはばディレタント的用意の下に、彼等の專門外の科學の專門的なテーマーに、觸れなければならないのである。」――フロイド「精神分析運動史」（一九二四）――

われわれは、この異教的方法において盛に行はれてゐるすべての見地を簡單に展開することはできない。尤もそれによつて、フロイドと彼の説を變形した人々の理論の組織が再構成されるであらうが、ここではその側面を省略したいと思ふ。したがつて、私は、目下論爭されつつある豊富な文學心理學からいくつかの特徴的な見解を取上げ、それによつて、全體――（もし假にさういふものがあり得るならば、そして、それがあることを欲するならば）――に關して少くも一つの觀念を與へるだけに止めるのである。

先づ一つの主要項目として、フロイド自身によつて再開始された、文學的なファンタジーの活動の解釋を引用しなければならない。すでに私はそれのディテールについて述べた。それは、いはゆる白日夢の觀察と分析の上に組みたてられてゐる。ショーペンハウワーによつてすでに注目された白日のファンタジー。それは性慾衝動あるひは名譽慾によつて培養され、しばしばまたノーマルな人間もそれに捕へられる。この白日夢は――（したがつて、やはり文學作品も同じやうに）――、過去の幼年時代の遊戯の繼續かつ補充であり、それは一層精密に説明されるのである。

フロイドの見解によれば、この現象とそれの精神的メカニズムの研究から、文學における材料選擇の本質、作品における、實際の、あるひは幼年時代から回想された體驗の交流、それらに關する新しい説明を期待することができる。恐らく白日夢は、眞の文學の前段階を形づくるものであらう。それは、睡夢に對してと同じやうに、文學に對しても原理的なものを共有する。しかしながら、勿論、差別的要素も全く缺けてゐるのではない。結局、ファンタジーにおいても、衝動の遊戯、願望の實現と、抑壓された性慾と、嬰兒的な欲求とに關する原理、それらがきはめて强力にリードするのである。

ユングは、この見解の一面性を批難した。

「一つの心理學的事實は、單にその因果律だけからけつして充分に説明されることができない。むしろ、それはすべての生命のやうに、また常に一つの創造的・前進的要素をも含んでゐるのである。」

かやうな純粋の決定論に對する批難は、すべての、フロイド心理學の批評家においてくり返される。しかしながら、靑年ヘルベルト・ジルベラー＊の書物「神祕敎のテーマー」は、一つの「相似的」原理を精神生活のメカニズム的な記述へ導き入れることを試みて失敗した。

また他の一人の批評家が、かやうな記述に「自我の先天的理想性」が缺けてゐることを不滿に感じるのも、やはり同じ推移を意味するのである。

＊詳しいメモは不明であるが、一九一一——一三年頃、多くの、精神分析に關する研究を發表し、特に、象徴とファンタジーについて種々の考察を試みてゐる。

フロイド學派の一人であるハンス・ザックス＊は、「共通の白日夢」の心理學的な特例からさらに結論を導くことによつて、上述の見解を專門化することを企てた。それによれば、二人の若い同性の人間が集まり、一つのファンタジー化された願望生活を共通に生活しつくす場合が生じるのである。しかしながら、彼は、文學史が作家の傳記においてこの現象のために提供する豐富な例を引用することを止めた。むしろ、彼はその代りに、彼自身が實際から得た結果を、充分に生長した文學者の精神的態度へ適用した。それによつて、文學者は、一人の假想された同件者（讀者）と一致した局面に臨んでゐるのである。

一般に、個人の白日夢は沒社會的である。それは孤立的な個人を滿足させるにすぎない。つぎに、共通の白日夢は、彼等に實現された一定の假説に基づいて、二人の關與者に奉仕する。しかしながら、最後に、藝術作品は、特殊の過程を基礎として、出來るだけ多數の人間のために創造され、科學あるひは宗敎のやうに、一つの大

きい社會的行爲を形づくるのである。
以上は、この書物の最も粗い輪廓を暗示したものにすぎない。私がそれについて記した他の理由は、それの優秀な專門知識と叙述樣式が、他の精神分析の論文がもつ好ましくない慣習から決定的な絶縁を示してゐるからである。

　ここでも、多少あまりに慌ただしい結論が導かれる。しかしながら、シラーの「幻視者」とシェークスピアの「テンペスト」に關するこれらの評論は、局外の研究者からも興味をもつて受けいれられるであらう。
勿論、文學ファンタジーの本質の問題は、これらの解決の試みにおいて新しく現れたものではない。それを示すには、ヴィルヘルム・ディルタイといふあの一つの名前を擧げるだけで充分である。

　私はこれらの解答の最大價値を、それが藝術家の對社會關係についてわれわれの見解を心理學的に深め得た點において認める。ここでは眞に、文學者によつて形づくられた材料と彼の形成力は何處に由來するかといふテーマーが、一つの意志によつて、具象的な明確さをもつて提出された。そして、この意志は、もし將來できるかぎり自制と愼重の原則を保つてゆくならば、長い年月の間にはかやうな本來の相において完成されるかも知れないのである。

＊（一八七七―　）ハイデルベルク。免疫學。黴菌學。血清學。

編考曰く――ムシュクは精神分析の文學批評があまり優秀でない作品を對象とも過ぎるとか、文藝作品としての美的價値を問題にせぬとか云つてゐるが、今頃こんなことを云つてゐるのはムシュクの方がをかしい。精神分析から見れば患者も正常者も文藝作品（傑作であらうが愚作であらうが）も一視同仁であることは、醫學から見れば一國の君主もルムペンも同じ病氣である限り同じに投藥するのと同じだ。それに文藝の美的價値は科學としての分析には齒が立たぬと云ふことはフロイドの夙に告白してゐることだ。たゞ文藝鑑賞能力ある者が分析批判力を具へた場合にその價値判斷が一層鋭くなると云ふに過ぎない。（K）

# 少年の足

岩倉凞子

ごみ〳〵した町の萬屋の店に置かれた大きな箱に腰かけてゐるセドリック（『家なき兒』の主人公）のぶらりと垂れ下つた足——を想像した人はなからうか。店先を往き來する雜多な人々の足、足——足の中に、唯一對丈の羚羊のやうに、すんなりと、それでゐてしつかりしてゐる足をセドリックの俤に結びつけた人はゐないだらうか。セドリックの足はその心の樣に美しかつたに違ひない。

×

ついこの間のことである。私は何時ものやうに學校へ行く爲に家から澁谷驛への道を歩いてゐた。冬と違つてこの初夏の朝は躰をしやんと立てゝ、眼を見開かずにはゐられない程快い。未だすつかり成長しきらない木の葉は、陽の光をたやすく透して風に鳴つてゐる。

と、向ふの四つ角に、私は少女と少年との姿を認めた。「あゝっ」と思つた瞬間、私の足は早められて、どうにかしてその二人に追ひつかうとしてゐた。「見たい！私はあの二人を見たい、見なければならぬものがあつた。」と思つたが、それは何を見度い心の動きなのか判らなかつた。大きく曲つた上り坂の道が眞直な下り坂の道となつた時、私は二人をはつきりと認めた。少女はお河童、白いセーラーの上着、黒い襞のあるスカート、黒い靴下、運動靴、といふ姿である。

少年は白い體操帽、白いランニング・シャツと、パンツ、そして——白い運動靴を穿いた素肌の足。私の目はその足に喰ひ入つて行つた。その少年の足は何と美しかつた事か。

眞直ぐで、白く、生毛まで見えるやうな足！　私が見

度くて、譯判らずに追ひ求めて來たのは是だつたのだ。その足は全く、少年のみしか持ち得ないかうな足である。筋肉の不平均な發達で蛇の顎のやうにふくらんだ、暴力そのものを思はせるやうな、骨張つた、毛むくぢやらの、大人の足ではない。少年の足だ。しかも美しい足だ。その足が今私の前にある。歩いてゐるのではない。私の爲に其處に在るのだ。……飽かず眺めてゐる私の心を知らぬ氣に少年は、少女と手をとつたまゝ右側の小學校の門をくゞつて行つた。

×

私は何故、見も知らぬ少年の足に、こんなに心を惹かれたのだらうか。今考へ直してみても、その時の高まつた感情が殆どそのまゝ甦つて來て私の心を動かす。一生のうちに、二度とあのやうに美しい足を私は見る事があるだらうか。

毎日々々學校で見る足は、みな黑い太い女の足である。あの少年の純粹に美しい足に比べて、この人々、ひいては私自身の足は、胸が惡くなるやうである。女といふものに特有の脂つぽいしつこさが足に迄ひろがつて、むら〳〵するやうなのが我々の足である。私があの少年の足を、世に類のない程愛すべきものと感じたのも、或は所謂、大根足許り見てゐた眼が全く違つたものを見出して、心を躍らせたからかも知れない。

×

山本有三の『眞實の一路』の義夫の足は――殊に最後の場面で、運動會の競走に地面がうしろへ、うしろへずれて行くのが感じられた足は、やはりこのやうに美しい足ではなかつたらうか。

ギリシャ文化の盛んだつた時、少年が大人に愛された事は、その時代の一つの特徵であつたとさへ言はれてゐる。ギリシャの少年の足もやはりあのやうに美しかつた事であらう。(完)

（**讀後に**）筆者は少年の足にだけ美を認めて男の足にも女の足にも醜惡なものを感ずると云ふ。男の足は「筋肉の不平均の發達で蛇の顎のやうにふくらんだ、暴力そのものを思はせる」さうであるし、女の足は「女と云ふものゝ特有の脂つぽいしつこさが足に迄ひろがつて、むら〳〵するやう」ださうである。少年の足は「羚羊のやうにすんなりと、それでゐてしつかりして」をり「純粹で美しい」さうである。我々心理學徒はこれ等の叙述の中に如何にも處女らしい性感覺を認めることが極めて容易である。性禁制と同性愛とペニス ナイドさ劣等感とが入混つて妥協し合つてこのやうな心理を構成してゐることは多少の分析心得あるものゝ、何人も容易に看破し得るところであらう。さていつまでもこのまゝで居られても困るが、今のところはこれでなければならないのであらう。（R）

# 故大佐の令嬢たち（マンスフィールド作）

岩倉具榮譯

の肘掛椅子に腰を下ろし始めた。併し椅子に觸れさうになるや否や彼はとび上らんばかりにして、それでなく隣りの椅子に腰をすべらせた。

彼は咳をした。ジョセフィンは兩手を握り合せ、コンスタンチアはぼんやりしてゐた。

「私はお嬢さんに申上げたいのですが」とファロールズ氏は云つた、「いや、コンスタンチアさんにも申上げたいのですが、私はあなた樣方にとつては何かのお力にならせて頂けたらと存じまして。甚だ差出がましいことですが、何かお力になりたいと考へてをりますので……。」ファロールズ氏は、甚だ端的に、熱心に云つた。「我々が御互に力になり合ふのは神樣のお思召しで御座います。」

「本當にありがたうございます、ファロールズさん、」

## 四

セント・ジョンのファロールズ氏が、その同じ午後に訪問した時、彼等は大層氣まりが惡かつた。

「御最期はどんなにか平靜なものだつたで御座いませうね。」暗い應接間を通つてファロールズ氏が、彼女等の方にすべる樣にして來た時云つた最初の言葉は之であつた。

「はァ全く」とジョセフィンはかすかに云つた。

彼女等二人は頭を垂れた。眼だつてあまり平靜な眼ではなかつたと二人とも確かに感じてゐた。

「お掛けになりませんか」とジョセフィンは云つた。

「ありがたう御座います、お嬢さん」とファロールズ氏は感謝して云つた。彼は上衣の端を持上げつゝ亡き父

とジョセフィンとコンスタンチアとは云つた。

「どう致しまして、」ファロールズ氏はおだやかに云つた。彼は皮の手袋を指から抜きとつて膝をのり出した。「それからあなた方のどちらでも、もしお二人ともがさうならばお二人とも、小さな信者の集會を作りたいと思召しならば、今こゝですぐ、私におつしやつて下さりませ。同じ信徒の集會があると云ふことは、屢々本當に心強いもので御座います。――大きな慰めで御座います。」と彼はやさしくつけ加へた。

併し小さな集會を作れといふ案には彼女等は恐ろしくなつた。何と云ふことだらう！　祭壇も何もない、彼等だけしか居ない、應接間で集會とは――。ピアノは餘り高過ぎるだらうとコンスタンチアは思つた。ファロールズ氏などは聖餐杯を持つてその上に屈みかゝることなどは勿論出來るわけはない。そしてケイトはきつと割込んで來て彼等の邪魔をするだらうと、ジョセフィンは思つた。そして眞中でベルが鳴つてゐるのだと想像するのであらうか？　それは彼女等の喪について誰か重要な人であることだらう。彼等は忝々しく起上つたり出て行つたり、又は待つてゐるだらうか……苦艱の內に待つてゐるだらうか。

「若し後でその氣になられましたら、お宅のケイトさんにでもハガキを書かせてみなにお知らせなさいませ。」とファロールズ氏は云つた。

「はア、いろ〳〵本當にありがたうございます……」と二人は云つた。

ファロールズ氏は立上つて圓いテーブルから黒い麥藁帽子を取つた。

「それからお葬式については、」と彼はやさしく云つた。「私がお世話しませう――あんた方のお父様の古い友達として、又あなた方、ピナーさんのお孃さん――それからコンスタンチアさんのお友達として――。」

ジョセフィンとコンスタンチアも立上つた。

「私はなるべく諸事、簡單に致したいと存じまして――」とジョセフィンはキッパリ云つた。「それに餘り費用がかゝらない様に致したいので御座います。それから私の望みと致しましては――。」

「長保ちのするいゝものにしたい。」と夢想家のコンスタンチアは、ジョセフィンがまるで夜着をでも買つたかの様に、一人で考へてゐた。併し勿論ジョセフィンはそんなことは云はなかつた。「亡父の地位に相當したものに致したいので御座います。」彼女は大變神經質になつてゐた。

「私は友人のナイトさんの所に急いで廻りませう、」と

ファロールズ氏はなだめるやうに云つた。「私はあの人にこゝへお訪ねする樣に賴んでみませう。きつとあの人は大變あなた方のお力になるだらうと存じます。」

## 五

さて、とにかく、さう云つた方面の事は凡て終つた。併し彼等は二人ともお父さんがもう決して歸つて來ないのだとはどうしても信ずることが出來なかつた。墓地で棺が下された時、ジョセフィンは自分とコンスタンチアとが父の許しを得ないでこの事をしたと考へて、一瞬間全く恐ろしかつた。お父さんが知つたら何と云ふだらう。何故なら父は早かれおそかれこの事を知るに違ひないから。彼はいつも云つてゐた。「埋められる――。お前達二人の娘が私を埋めたのだ！」彼女は父のステッキがゴツンとぶつかる音を聞いた。おゝ、彼等は何と云つたらいゝだらう？ 彼等は一體何と云つて辯解することが出來よう。そんなことをするのは全く恐しいほど心ない事の樣な氣がした。その瞬間に彼がたまたま賴る人がなかつたからとてその人をかくも惡く利用するとは。他の人々はそれ等凡てを當然のことゝして見てゐる樣に思はれた。彼等はその土地に不慣れな人間だつた。彼等にはお父さんがこんなことに遭ふ全くの最後の人であることが分らうとは期待出來なかつた。いや、それ等凡てに對する批難は彼女とコンスタンチアにふりかゝつたらう。そしてその費用はと、彼女は、堅くボタンをかけた辻馬車の中に入り込みながら思つた。彼女が父に勘定書を見せねばならぬ時になつたら、その時彼は何と云ふだらう？

彼女は父が全くどなつてゐるのを聞いた。「そしてお前のこの見かけ倒しのお祭騷ぎのために俺が金を拂ふと思つてゐるのか」

「おゝ」哀れなジョセフィンは聲高くうめいた。「私達はこんなことするんぢやなかつたわね。コンちやん！」

するとコンスタンチアは、色の黑いくせにレモンの樣に蒼白くなつて、びく／＼した聲でつぶやいた「何をしたんだつて、ジャグちやん？（ジョセフィンの愛稱）」

「何とでも勝手にお父樣のお葬式をさせとくんだわ、」と云つてジョセフィンはくづおれ、新しい妙な香ひのする、服喪用のハンカチーフの中に顏を埋めて泣いた。

「でも、外に何とか私達に出來ることがあつたかしら？」とコンスタンチアは疑ふやうに訊いた。「私達は、お父さんを放つておきも出來なかつたぢやないの？ ジャグちやん――私達はお父さんを埋めないでおくわけにも行かないぢやないの、とにかく？」

ジョセフィンは鼻をすゝつた。辻馬車は恐ろしくむつと

してゐた。

「私、知らないわ、」と彼女は淋しく云つた。「凡てが大變なのよ。私達は少くとも一寸の間だけ、やつて見なければならなかつたと思ふわ。完全に確實にするために。一つのことは確かよ」――そして彼女の涙は又も迸り出た。――「お父様はこのことについて私たちを決して許して下さらないでせう――決して！」

## 六

お父さんは決して彼女等を許さうとはしないだらう。二朝經つてから、彼女等がお父さんの持物を調べに部屋に入り込んだ時、今迄よりも以上にそのことを二人は感じたのであつた。二人はそのことを本當に靜かに話し合つた。それはジョセフィンのしなければならないことの細目書にさへのつてゐた。お父さんの持物を調べて片をつけること。併しそれは朝食後に次の様に云ふことゝは大變違つてゐた。――

「さあ、用意はいゝの、コンちやん。」

「えゝ、ジャグちやん――あなたさへよけりや。」

「それなら私はそれを片付けてしまつた方がいゝと思ふわ。」

ホールの中は暗かつた。どんな事が起きても、決して朝の中お父さんの邪魔をしないのが數年來のきまりであつた。それなのに今彼等はノックもしないで戸を開けようとしてゐた。……コンスタンチアの眼はそれを考へると思はず大きく擴がつた。ジョセフィンは膝がガク／＼する様に感じた。

「あなた――あなた先へいらつしやい。」と彼女はコンスタンチアを押して喘いだ。

けれどもコンスタンチアは、かういふ場合いつもいふ様に云つた。「いゝえ、ジャグちやん、それはちがふでせう。あなたの方がお姉さんだもの。」

ジョセフィンは――他の場合ならどんなことがあつても口に出せないことであつたが――切札としてしまひこんであつたところの「でも、あなたがずつと背が高いんだもの」を危く口にしさうになつた。その時二人は臺所の戸が開いてゐるのに氣が付いた。そしてそこにはケイトが立つてゐた……。

「隨分堅いわ」ジョセフィンは戸の引手を握つて一生懸命廻さうとして云つた。如何にも何とかしてケイトにやらせようとするかの様に！

それも駄目であつた。そのお嬢さんは……。すると戸が彼女等二人の後ろで閉められた。併し――併し二人はお父さんの部屋に這入つてゐるのではなかつた。彼等は

間違つて壁をつき拔け全く違ふ部屋に入り込んだのかも知れなかつた。戸は丁度彼女等の後ろにあつたらうか。二人は餘りに恐ろしくて見ることが出來なかつた。ジョセフィンは戸がそこにあつたとすれば、それはかたく閉ざゝれてゐるのを知つてゐた。コンスタンチアは、夢の中の戸の樣に、全く引手がないやうに感じた。その引手の冷たさは何とも云へない恐ろしさだつた。それとも白さのためか——どつちであらうか。凡ゆるものがおほはれてゐた。窓布(ブラインド)は下され、鏡の上にも布片がかゝり、敷布は寢床を被つてゐた。白い紙の大きな扇で爐はふさいであつた。コンスタンチアは臆病に手を差出した。彼女は殆ど雪片が落ちてくるかと思つた。ジョセフィンはまるで鼻が凍りつくかの樣に、鼻の中が妙にくすぐつたく感じた。その時、馬車が下の丸石道の上をきしつて通つた。やがて靜けさは片々になつて震へる樣に思はれた。

「窓布(ブラインド)を上げた方がよかつたわね」とジョセフィンは勇敢に云つた。

「えゝ、それはいゝ考へでせうよ。」コンスタンチアは小聲で云つた。

彼等は只窓布(ブラインド)に一寸觸れたゞけであつた。併し布はとび上り紐はまき上り、ブラインドの棒にまきついた。そして小さいふさはまるで離れようとするかの樣にコツコツ音を立てた。それはコンスタンチアにとつては大變なことであつた。

「別の日のために、これをはづしておいたらどうかしら？」と彼女は小聲で云つた。

「どうして？」ジョセフィンは直ぐに應へた。コンスタンチアが可怕がつてゐることがよく分つてゐるので、いつものやうにさう云ふ風に應へるのがいゝと感じて……「さうするのがいゝわ。でも、コンちやん、そんなにひそ〳〵聲を出さない樣にしてよ。」

「あらさう？ そんなにひそ〳〵聲？」とひそ〳〵聲でコンスタンチアは云つた。

「それに、あなたは何故そんなに寢床を見つめてゐるの？」とジョセフィンは、殆ど挑みかゝるやうに聲を上げて、云つた。「寢床の上には何にもありはしないわ。」

「おゝ、ジャグちやん、そんなに云はないでよ！」と哀れなコンちやんは云つた。「とにかく、そんな大きな聲を出さないで頂戴。」

ジョセフィンは自分が餘り云ひ過ぎたと感じた。彼女は箪笥の方に身體を大きくひねり、手を差出したが、す早く又ひつこめた。

「コンちやん！」彼女は喘ぐやうに云つた。そして彼女はくるつと廻つて箪笥に背中でもたれかゝつた。

「おゝ、ジャグちゃん——何なの?」

ジョセフィンは只眄むことが出來るばかりだつた。彼女は何か端的に恐ろしいことを逃れたといふ極めて異常な感じがした。併しお父樣は簞笥の抽出の中にゐたことをどうしたらコンスタンチアに説明することが出來るだらう? お父樣はハンカチやネクタイと共に一番上の抽出しに入つてゐたか、シャツや寢卷と共に次の抽出しに入つてゐたか、それとも着物と一緒に一番下の抽出に入つてゐた。彼はそこに——丁度戸の引手の後ろに——隱れてぢつとこちらを瞠め、今にも飛出しさうにしてゐた。

彼女は子供の時分に泣き出さうとする時いつもやつた樣な、おかしな古風な顏をコンスタンチアの方に向けた。

「私、開けられないわ。」彼女は殆ど泣きさうに云つた。

「いゝえ、開けないで、ジャグちゃん」コンスタンチアは熱心に小聲で云つた。開けない方がいゝわ。何も開けないで頂戴。とにかく、長い間開けておかないがいゝわ。」

「でも——でも、それが大變弱つてる樣に見えるのよ、」とジョセフィンはくづおれて云つた。

「でも弱つてゐるにしても今度だけはどうして、弱らないわけがあつて、ジャグちゃん」と、コンスタンチアは小聲で大變烈しく云つた。そして彼女の蒼白い眼付は鍵のかゝつた——甚だ安全な——書きもの卓子から、大きな光る衣裳簞笥の方へと飛んだ。すると彼女は妙に喘いで呼吸し始めた。「私達の生涯で一度は弱ることがどうしてないわけがあらう、ジャグちゃん。それは本當に勘辨出來ることだわ。弱くならうよ——弱く、ジャグちやん。強いよりも弱い方がよつぽどいゝわ。」

そしてそれから、これまでに二回ほどした、驚くべき大膽なことの一つをした。彼女は衣裳簞笥につき進み、かぎを廻し、鍵穴からはづした。はづしてからジョセフィンの方にそれを差出して、自分が何をしたかを、お父さんが外套の間にゐるかどうかを故意にためして見たことを承知の上だと云はんばかりに異常な微笑でジョセフィンに示した。

大きな衣裳簞笥が前によろめいて、コンスタンチアの上にくづれかゝつても、ジョセフィンは驚かなかつたらう。それどころか、それは如何にも起りさうな唯一の適當なことだと彼女は思つたであらう。併し何事も起らなかつた。只部屋は前よりも靜かに思はれ、冷たい空氣のより大きな片々がジョセフィンの肩と膝に落ちかゝつた。彼女はふるへ出した。

「いらつしやい、ジャグちゃん」コンスタンチアは尙

もあの恐ろしい無氣味な微笑を湛えつゝ云つた。と、ジョセフィンはコンスタンチアがこの前圓い池にベニイを押込んだ時にもさうした樣について行つた。

# 七

併し、彼等が食堂に歸つて來た時、緊張の結果が現れた。彼等はふら〳〵しながら腰を下し、お互ひに顔を見合せた。

ジョセフィンは云つた、「何か頂かないと何にもする氣にならないわ。お湯を二杯、ケイトに賴むでもいゝかしら。どう思つて？」

「あら、どうして賴んでいけないい？分らないわ。」とコンスタンチアは落着いて云つた。私はベルをならし度くないのよ。彼女は又もう全く普通になつてゐた。私は臺所の戸の所へ行つてケイトに賴むわ。」

「えゝ、さうして頂戴。」とジョセフィンは椅子にぐつたりと腰を下しつゝ云つた。「ケイトにさう云つて、お盆に二杯だけつて、コンちやん、他に何も要らないわ、——。」

「水差も要らないんでせう、要る？」とコンスタンチアは云つた。水差がそこにあつたらケイトは多分不平を云ふかの樣に。

「おゝ、いゝえ、そんなもの要らないのよ！　水差なんか必要ないわ。ケイトは壺から直接注げてよ。」それで實は無駄な骨折が省けるだらうと感じつゝジョセフィンは叫んだ。

彼等の冷たくなつた唇は、綠色の緣の所でふるへた。ジョセフィンはその小さい赤い兩手でコップの周りを包んだ。コンスタンチアは腰かけ直し、コップのお湯を一方から他方へと波の樣に動かしつゝ、湯氣の上をフーフーと吹いた。

「ベニーの話」とジョセフィンは云つた。

そして、ベニーのことはまだ話に出てゐなかつたのだが、コンスタンチアの顔付はもうその話が出てゐたかの樣に見えた。

「あの人は勿論、何かお父樣のものを送つて呉れると思つてゐるでせう。でも、セイロンに何を送つたらいゝのか知ら？　六づかしいわ。」

「船で送ると品物が崩れてしまふつて云ふの？」とコンスタンチアはつぶやいた。

「いゝえ、なくなるのよ。」とジョセフィンは鋭く云つた。「あなたも知つての通り、郵便がないの。飛脚があるだけよ。」

黑人が白いリンネルのズボンをはき、大きな褐色の紙

包みを手に持つて、高價な生命のために、蒼白い野原を通つて驅けて行くのを、彼女等二人は、見るやうに思つた。ジョセフィンの黒人は小さかつた、彼は蟻の様に光つてチョコチョコ走つて行つた。併しコンスタンチアの黒人は丈の高い、やせた奴で、そのために彼は何だか盲目的な疲れを知らぬものがあつて、全く不愉快な人物だと彼女は一人で考へてゐた。……ヴェランダには、白づくめの服を着、コルクのヘルメットを冠つて、ベニーが立つてゐた。彼は、お父さんが我慢出來なかつた時にした様に、右手を上下に振つてゐた。そして彼の後ろには、一向何の興味もなく、まだ會つたことのない嫂のヒルダが坐つてゐた。

彼女は籐の搖り椅子を動かしてタトラー誌のページをくつてゐた。

「お父様の時計が一番適當な贈物だと思ふわ」とジョセフィンは云つた。

コンスタンチアは見上げた。彼女は驚いてゐる様に見えた。

「まア、金時計を土人に持たせてやるの？」

「そりや勿論、中味は何だか分らない様にしておくわ。」とジョセフィンは云つた。「まさか中味が時計だとは誰にだつて分らないやうに……。」誰も何だか想像出來ない様な妙な形の小包を作るといふ考へを彼女は好んだ。彼女はその内に何かを容れようと思つて長い間大切にしてゐた細長い厚紙のコルセット箱に時計を隱してやらうと云ふ考へをさへ一瞬間思ひ持つた。それは大變美しい堅い厚紙だつた。併し、いや、この場合それは適當ぢやなからう。それは上に文字が書いてあつた、「中形婦人用、廿八。特製堅固な胸衣。」ベニーがそれを開けてお父さんの時計をその中に見付けたらどんなにか驚くことだらう。

「それでも勿論それは行きさうもないわ――カチ〳〵云ふんだもの。」とコンスタンチアは云つた。彼女はその上、土人が寶石を好むことを考へてゐた。「少くとも」と彼女は附加へた。「結局さういふ際だとしても隨分變だと思ふわ。」（未完）

（**譯者曰く**、ピナー大佐死してあとに殘された二人の孃さん方のその後一週間ほどの困亂した生活と心理を描いてゐます。今回のところは第二回ですが、次回で完結します。分析鑑賞はその上でゆつくり試みませう。どれを讀んで見ても、マンスフィルドは鋭い心理家であることを痛感します。）

# 心理研究ノート（續）

長谷川誠也

## （二十七）夢の産婆マブ媛

「ロミオとヂュリエット」の第一幕第四場に、次ぎの問答がある。

（ロミオ）昨夜予は夢を見た。
（マーキユーシオー）俺も見た。
（ロミオ）そして足下の夢は？
（マーキユ）空想家は囈語や空語を言ふのが癖ぢやといふことを。
（ロミオ）囈語や空語の中にも動かぬ眞理が籠つてゐる。
（マーキユ）おゝ、それならば、あの、足下は、昨夜はマブ媛（夢妖精）とお臥やつたな！　彼奴は妄想を産ます産婆ぢや、町年寄の指輪に光る瑪瑙玉よりも小さい姿で、芥子粒の一群に車を牽せて、眠つてゐる人間の鼻柱を横切りをる。（中略）彼奴が毎夜々々、戀人共の頭腦の中を馳廻ると、それが忽ち種々の夢となる。廷臣の膝を走れば平身低頭の夢となり、代言人の指を走れば忽ち謝金の夢となり、美人の唇を走れば忽ち接吻の夢となる。（中略）また廷臣の鼻の下を走る、と叙任を嗅出す夢を見る、或ひは献納豚の尻尾の毛で牧師の鼻を擽ると、僧め、寺領が殖えたと見る。或ひは兵卒の頸筋元を馳廻る、すると敵の首を取る夢やら、攻略やら、伏兵やら、西班牙の名劍やら、底拔の祝盃やら、途端に耳元で陣太鼓、飛上る、目を覺す、おびえ駭いて、一言二言祈をする、又就眠る。（中略）或ひは娘共が仰向に臥てゐる時分に、上から無上に壓迫けて、つい忍耐する癖を附け、難なく强者にしてのくるも彼奴の業」

（坪內博士譯）

マブ孃は、人間の祕密の願望を夢の形として出生させる產婆であると言ふ主旨のこの臺詞は、まさに精神分析說の譬喩的解說である。妖精マブの傳說は、ケルト民族の間に傳へられてゐるもので、マブといふ語は、子供または幼兒の意味であると。この妖精に「クヰーン」といふ尊稱を冠らせたのは、多分シェイクスピアが初めであらうといふことだ。

ついでに言ふ。シェリーが十八歲頃に書いた長詩「マブ女王」(Queen Mab) は、この妖精女王が、睡眠中の乙女アイアンシイの靈魂を呼び起こして、種々の幻影を見せるといふ。趣向である。この妖精女王は、歷史を見せ、人類の惱みの由來を說き、さらに將來の改造された理想世界を紹介する。その間に宗敎、政治、その他種々の社會制度に對する批評や、諷刺がある。言はゞ、妖精女王が哲學者になつて業をするのだが、產婆役たることは昔話の通りである。

ベン・ジョンスンも、ロバート・ハーリクもマブを作品の材料としてゐるが、單に妖精の女王として取扱つてゐるだけだといふ。次ぎに、ウォルター・スコットは、これを妖精產婆として描いてゐる。

なほ、シェイクスピアの原文には Queen Mab とある。坪內博士が「クヰーン」を「孃」と譯されたのは、細心な用意からだと思ふ。產婆としてのマブに附いてゐるクヰーンといふ語は、主權者の意をもたず、單に女または Quean（あばずれ女）の意味であると言ふことだ。

## （二十八） ジュリエットの最後の語

ジュリエットの最後の語はかうだ。

Yea, noise ? then I'll be brief. O happy dagger ! (*Snatching Romeo's dagger.*) This is thy sheath (*Stabs herself*) ; there rust, and let me die. (*Falls on Romeo's body, and dies.*)

や、人聲？ なりや、片時も早う。……おゝ、嬉しや、短劍！（ロミオが佩びたる短劍を取りて）さ、鞘はこゝに。（と胸を貫き）そこに居附いて、予を死なせてくれ。（と息絕ゆる）（坪內博士譯）

（附記）臺詞中の rust といふ語は、第一クヲートーに據れば rest であると。

所謂新心理學の門口をのぞいた人でも、この語に無意識の深刻な影響のあることを認めるだらう。ジュリエットは滿足して死んだのである。

## （二十九） 戀愛問題と河流の夢

わが國の文學には、山上憶良の七夕の歌、長歌短歌十數首をはじめとして、今日に至るまで、これも題とする詩歌が非常に多い。牽牛、織女の話は支那で作られたものであるが、その主旨は戀愛に惱む男女兩性のことであつて、それは珍らしいものでもない。

彥星と棚機津女と、天地の、別れし時ゆ、稻莚、河に向き立ち、思ふ空、安からなくに、嘆く空、安からなくに、青浪に、望は絕えぬ、白雲に、淚は盡きぬ、

であつて、どこの國にも、太古から彥星も棚機津女もざらにあるのだ。たゞ問題となるのは「天の河」である。なぜこゝに河流が介在して、

風雲は、二つの岸に、通へども、わが遠妻の、言ぞ通はぬ。

と言ふやうな情況となるのか。

傳說や、古今の文學中には、戀愛の難關の象徵として河流を持ち出した例が少くないやうだ。わが國の傳說や、文學から、憶ひ出すまゝに擧げて見れば、安珍淸姬物語には日高川、「妹背山」には吉野川、「朝顏日記」には大井川が利用されてゐる。また、謠曲「船橋」には渡瀨川、佐野川が出てゐる。これは萬葉集にある東歌「上つ毛野、佐野の船橋、取り放し、親はさくれど、わはさかるがへ」を基としたもので、謠曲も、歌も共に心理學的に考察すれば、おもしろい。また、河流ではないが、本土と島との間の海も、同樣の意味に使はれてゐる。越後と佐渡との間の海水、熱海と初島との間の浪路などはこの例である。なほ、廣く文獻をあさるならば、似たやうな例が、いくらも出て來るだらう。

これらの河流や、海水は、天の河物語から直接の暗示を受けて描き出されたものとは言へなからうが、無意識の方面から考察すると、互に關係があると思はれる。なぜなれば、天の河の話は、もと〳〵夢想から作られたものであり、夢に現れる河流は、多くの場合において、戀愛の難關を象徵するからだ。戀愛は成就するかどうかの問題は、夢に河流を渡り得るか、どうかと言ふ境遇となつて現れる。昔の夢判斷の書には、左のやうに書いてある。

天の河を渡る者は百事吉なり。

水の上を歩み行く夢見れば、萬事とゝのひて大いによし。

これで見ても、河流や、水が重要問題の象徵として取扱はれて來たことがわかる。そこで、太古の人々にとりては、戀愛が、あるひは今日の人々の場合よりも、一そう重大な問題であつたらう。それはタブーの威力が强烈で

あつたことを想へば、首肯されるだらう。一方、太古の人類にとりて、河流を渡るといふことは、非常な難事であつたに相違ない。だから、戀愛の難解な問題に關する夢の過程は、河流をその象徴とし、それを渡るか、渡らぬかに何等かの意味を求めたのであらう。さうして天の河の物語は、かやうな無意識の心理を基として構成されたものであらう。なほ、太古の人間ばかりでなく、現代に至るまでの東西の人類は、夢にこの意味の河流を見る。それが傳説や、文學上の河流となつて、戀愛問題と密接な關係を結ぶのである。

ユングの紹介によると、「ヘルマスの牧者」といふ宗教書中にも、戀愛問題と河流とが結びついてゐる。ヘルマスとは、どういふ人であつたか、はつきり分かつてゐないさうだが、その著は紀元後百四十年前後に書かれたものであり、古くは宗規に合する書として廣く讀まれたが、後には教理に違背する所があるといふので排斥されたと。なほ或書には、ヘルマスといふ人は、ロマ書書第十六章第十四節に出てゐるヘルメスと同一人であらうとあり、また一書には最初の法王ピウスの弟であるといつてゐる。しかし、今はそれを仔細に研究する必要はない。

とにかく、ヘルマスといふ人は、最初、ローダといふ婦人に、奴隷として仕へ、後に自由の身となり、家庭も作つたのだ。自由の人となつた後の彼は、ローダを妹のごとくに想つてゐたが、或日、ローダが河流で沐浴して岸に上る時に手傳つてやつた。その時、彼はローダの美に打たれて、かやうな婦人を妻とするならば、定めて幸福であらう、と思つたと言ふのだ。彼は敬虔なキリスト教徒であつたから、この念をおこした瞬間、苦悶懊惱の生活が始まつた。さうして或夜の夢に、谿谷のやうな處をさまよひ、漸く谷川を渡りて向う岸へ上り、地に伏して懺悔の祈禱をしてゐると、天開けてローダの姿が現れたと。しかし、このローダは愛慾の對象でなく、神性を帶びた女性であつたのだ。これから、この女性とヘルマスとの間に問答があるが、その主旨は、要するに「すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり」といふ教訓である。

ヘルマスが溪流を渡つたことは解決を意味し、その解決は宗教的である。つまり、愛慾が昇華されてしまつたのだ。これならば泰平無事「萬事吉なり」である。たゞし、ローダといふ婦人が、神性を帶びた女性として現れた點は、特別の研究を要する。これは、ダンテのビアトリースの性質の變化と對比して考へるならば、興味ある研究とならう。

## （三十）象牙の塔

「象牙の塔」といふ形容語は、ソロモンの歌といふ「雅歌」第七章に出てゐる。

なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二つの小鹿のごとし、なんぢの頸は象牙の戍樓の如く云々。（和譯バイブル）

言ふまでもなく女性の頸の美を形容した文句である。元來。「雅歌」は戀愛の歌であつて、甚しく色情的であるが、キリスト敎徒は、これを象徵的に解釋する。こゝにある女性は信徒の集團、卽ち敎會のことで、敎會は「聖母マリア」の象徵と見るのだ。實に彼等信徒の無意識心理は、女性、塔、敎會などを結びつけてしまつたのである。また、イタリアのロレットに在る有名な寺院（マリアを記念するもの）の祈願文中には、マリアを形容して「象牙の塔」と書いた所がある。

今日のこの語の用法は、書齋とか、硏究室とか、とにかく世間と離れた思索の世界の意味をもつてする。だから、象牙の塔を出でよと言へば、讀書や、推理にばかり耽つてゐることを中止し、現實の世界へ出よといふ意味になるのだ。

ところで、この譬喩的形容語の元の意味をもつてすれば、象牙の塔に閉ぢこもることは、敎會内に引込んでゐること、女性の頸にすがり附いてゐることの意味となる。從つて、象牙の塔を出でよ、と言ふことは、結局、母コムプレクスを破壞せよといふ意味になる。

塔といひ、象牙といひ、無意識心理においては、種々の意義をもつてゐるもので、この二語が結びついて、この有名な形容語となつたのは、決して偶然でない。これは特別の硏究を要する項目である。

## （三十一）男女兩性心理具有

コールリヂの「座談」中に、次ぎのやうな意見が出てゐる。

強い心の人といふものは、偉人ではない。威風堂堂、狐疑するところがないけれども、偉い心の人といふものは、アンドロジノス（Androgynos 雌雄兩花具有、雌花雄花同座、又は男女兩性具有の意）であらねばならぬ（大意）なほ他の所に言つてゐる。天才と言はれる凡ての人の容貌には、なんとなく女性的——女々しい意味でない——な所のあるものだと。

ヴァジニア・ウルフは、この說を引用して言つてゐる。男女兩性がなければ、子供は生まれないと同樣に、一人

の上に、男女兩性の心理が同座でなければ、創作品は生じないと。「オーランドオ」の著者としては、極めて當然な意見である。

コールリヂや、ウルフの言ふ通り、偉大な心の持主、または天才と言はれる人々は、兩性の心理をもつてゐるに相違ない。いや、どんな男性にもある女性的心理（その反對に、女性にもある男性的心理）に不當な抑壓を加へないところから立派な、おもしろい仕事ができるのであらう。

男性で、女性的になり切つた例は、イギリスの文學者ウィリアム・シャープ（William Sharp. 1856—1905）であらう。彼はスコットランドの人で、詩人として、また評論家として世に出たが、中年からは Fiona Macleod といふ女性の名で、種々の作品を發表した。それらは、どう見ても婦人の作で、讀者の多數は、この名の女流文學者が本當にゐるものと思ひ、それがシャープの匿名であると言ふことは、彼の死後、漸く判明したくらゐであつたと。わが國には「土佐日記」といふ例があるから、シャープの話は珍らしいとも思はれないが、そのやり方は、かなり徹底的であつて異彩を放つてゐる。男性の名を用ゐた女流作家にはヂョーヂ・サンドとヂョーヂ・エリオットとがある。これら異性の名を用ゐた作家の文體と内容とを比較するならば、非常におもしろい研究とならう。

異性を表はすといふのは、異性を模倣することでなく、銘々の自己の内にある異性を表現する意味である。これを最も好く例證するものは、わが國の女形であらう。

# 殺人犯分析三例

塚崎茂明

犯罪心理の研究に當つて精神分析を應用するならば、犯罪の性質や原因やその他今迄不明のまゝに放棄せねば

ならなかつた事々がもつと明確な形をとつて、我々の理解を深める所少くないと信ずる。以下に述べんとする實例は筆者の直接經驗したものでない爲に精細を缺くが、主旨だけはわかつて戴けると思ふ。

×

第一例は某鑛山で起つた殺人事件である。殺されたのは低能の女で、頸部に二條の索溝があつた。死因は明らかに絞殺で、二條の索溝を生じたのは紐繩を二重に卷いた爲めではなくて、幅廣の帶を用ひた結果生じたものであつた。犯人は直ちに擧げられた。それは隣りに住んでゐる低能の男であつた。「何故殺したか」と云ふ警察官の問ひに對して、犯人は「殺して吳れと云つたから」だと答へた。くわしく調べて見ると次の樣な事がわかつた。元來此の二人は隣り同志の好誼から親しく附合つてゐたものであるが、丁度殺害された當日被害者が犯人の家へ鰯を持つて行つたものである。當然海から遠い鑛山のことゝて鰯は生きのいゝ筈はなく、なれてしまつてぐつたりしてゐた。犯人は「お前も此んな風にして欲しいのか」とて、その夜隣家へ忍び込んで絞殺してしまつたと云ふのである。

どうも低能の云ふことはわからんと云ふので、此れは原因不明で放棄された。

先頃喧傳された中野の若妻殺しにも此れに似た犯人の口述がある。矢張豆腐か蒟蒻か何かのやうにぐにやくしたもので一觸微塵にし得るものゝ如く感じられたからやつたのだと云ふ。此の少年は丁度金澤醫大の精神科外來へ通つてゐる所だつたと、同教室に居る知人から聞いてゐる。殘念ながら診斷名を聞くのを忘れたので、此の問題は今は放棄して前に返る。

さて犯人が低能であると云ふのであるから、その口述の何處までが眞であるか保證の限りではないが、犯人が無意識直觀を行動したのだと云ふことは理解し得る。

被害者が生魚は珍らしいからと好意で持つて來た鰯が生氣のなくなつてゐるのを見て、犯人は被害者が「此んな風にして欲しい」と云ふのだと解したから、盛んに無罪を叫ぶのであつた。犯人は魚を女性象徵として鰯と被害者を同一視してゐるのであらう。

犯人が投出した願望は「魚を喰ふ如く被害者を性的に蹂躙してやりたい」と云ふにあつたらうと思ふ。しかし彼の頭は退行的であるので、夢で性交の意義を有する絞首が現實の結果として現はれてゐる。斯うした低能者の場合にはその現實の行爲をも無意識の顯現として夢の分析法で解釋しなければならないのではないかと考へる。

×

第二例は、某市に起つた二重人格的殺人事件である。

「大變だ。人殺しだ。」青い顔して駈け込んで來た向ひ隣りの主人の聲に、炭屋の主人は飛んで行つて見て吃驚した。茶の間には老母が朱に染つて悶死して居り、土間には妻女が兩手首の落ちんばかりに斬り付けられてこと切れてゐた。更に子供までが惨殺してあつた。炯眼なる當局の手によつて直ちに犯人は擧げられた。それは思ひがけない當家の主人であつた。兇器は日本刀で簞笥の中から發見された。その上殺害當時着てゐた衣類が水浸しになつてゐた事から追求して、到頭事實が明白となつた。

世にありふれた事ながら本事件の原因は嫁姑の不和に根ざしてゐた。當日此の家の主人は老母に妻女との不和に關して文句を並べてゐたのであるが、言の聞き入れられぬと知るや、日本刀を持ち出して斬り付けたのであつた。姑の悲鳴に驚いて二階で子供に添乳をしてゐた妻女が降りて來て止めんとするのを、反抗するかとばかり斬りかゝつて行つた。妻女は相當爭つたと見えて兩手首斬り離され、土間迄行つて昏倒してしまつた。血を見て逆上した主人は更に二階の子供を殺害するや、流しで兇器と衣服とを洗ひ、着物を着かへて漂然と散歩に行き、歸宅して見て驚いたと云ふのである。

此の例は古澤平作氏の云はれる阿闍世コムプレクスに基く殺人事件ではないかと思ふ。近親姦的慾望が母殺しの形をとり、妻女の制止が超自我の象徴となつて、エディポスが去勢象徴たる眼球剔出を實行したやうに、此の主人は一家を鏖殺することによつて文字通り自己の種を絶やしてしまつた。斷種が完了してしまふと、彼は全く別人となつて行動し、散歩から歸つて驚いた始末なのである。

母親が邪魔になるなら、母親だけ殺したと云ふのなら話がわかるが、胎に子のある妻までも殺し、おまけにいたいけない子供まで殺し、何が何だか意味がわからんと云ふので、當市では、かなり問題になつた事件であつた。血を見て逆上したと云ふ新聞の意見以上の說を出す人なくして此の主人は北海道行となつた。「儂が悪かつた」と裁判所で泣き出した當人は今では模範囚になつてゐるとか。

×

第三例はエディポス的な父殺し事件である。殺したのは藥專の學生で、殺された父親と云ふのは糖尿病に罹つてゐたと云ふ。神經系疾患の時に、糖尿を見ることがあり、又糖尿病の時に神經系統が侵されることもあつて、どちらが先行したか知らないが、此の父親は少し氣が變

になつてゐたさうである。夜毎日毎に母を虐待するのを見かねて、彼は父親を毒殺してしまつた、しかもその藥材が猫いらずであらうとは。願望充足を目的とする無意識動機からの計畫は、何と簡單な頭から割り出されるのであらうか。もつと冷靜な思慮を働かせれば、毒物學には緣の薄くない藥學生のこと故、他の方法もあつたであらうに。いづれコムプレクスに迷はされて爲す業は低下された智能でしか計畫されないものである。これも模範四になつてゐるとか。

×

問題は犯罪が行はれてからの事に就いてゞはなく、犯罪の豫防にある。街頭では健康に見える人々も家庭では何と危險な崖の線に立つてゐることであらうか。それでも各人は已が健康だつと思てゐる、もつと明朗な生活を得可くして得られることを知らずに。

——一九三七・七・二九——

## 本誌前號正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 七 | 一一 | 粘子雌を | 精子を雌 |
| 四〇下 | 一五 | 分析程過 | 分析過程 |
| 六七下 | 五 | 意味 | 意圖 |
| 六九中 | 一〇 | ブルッセル | ブルッセル |
| 同 | 一八 | 田端驛裏 | 目黒驛邊 |
| 八九上 | 一一 | 機なら | 動機なら |
| 九三上 | 四 | Abuelie | Abulie |
| 同 | 二三 | 防禦精神神經症 | 防禦神經精神症 |
| 九三下 | 五 | Gefuhle | Gefuehle |
| 同 | 七 | 不快感 | 快感 |
| 同 | 同 | 美は快感 | 美的快感 |
| 九八上 | 一九 | 存住 | 在住 |
| 一〇〇下 | 一五 | 聲枝 | 聲技 |
| 一〇二下 | 一〇 | お尋ぬ | お尋れ |

時評

# 精神分析映畫『魂を失へる男』を見て

## ――人格分裂に就いて――

塚崎茂明

本號資料欄に報告して置いた殺人犯分析の第二例に於いて、人格分裂の契機と云ふ問題にぶつかつて大分考へさせられる所があつたから、あの實例は研究の餘地を殘して置くために殊更暫く發表を控えてゐたのである。所が今度、精神分析映畫と銘打つた『魂を失へる男』を見て非常に面白く感じたので、改めて此の問題を取りあげて見ようと思ふ。以下映畫の梗概を述べながら小論をまとめて行かう。

レオ・ラペール原作、ウェルナー・ホッホバウム監督、その他出演者の唯一人、映畫には全く門外漢の私は名も聞いたことのない人達であるが、嘗て見たルネ・クレール作品の『自由を我等に』と同じく、二度繰りかへして見る氣になつたほど強く私の興味を牽いた。

瑞西のバーゼル市、中央病院に於ける出來事である。この病院には、最近突發した新流行性腦膜炎で入院したネガール氏が命旦夕に迫つた身を百十二號室に横へてゐる。今や治療の手段を失つた院長のチェルコ博士が若い醫師達に相談して見るが得る所がない。ヴント醫師が同僚デュマルタン醫師の發見に係る治療血清の實驗を提議するが、博士は患者を試驗代に使用すること



## 千人針分析

不老泉院主

七月廿二日の都新聞讀者欄に禁酒禁煙主義者岡田道一氏は、出征軍人に酒や煙草を贈るのは惡結果を來すから遠慮せよと說き、序に千人針が迷信だから廢せと云ふ意見を述べたが、それに對して、その翌日の同紙家庭欄には「迷信だとて排斥出來ない」と云ふ「種々教育家の意見を纏めて紹介し」てあつた。

岡田氏の禁酒論に就いては、私は分析的見地からの批評を某誌に書いたからこ

を許さない。「もし萬一血清が注射によつて癒れば此れに越したことはない。しかし不幸にして死亡した場合はどうなるか、血清のために死を來したとも考へられないものでもない。」と云つて許可しない博士の言葉に逆つて、デュマルタン醫師は注射を決行する。ネガール氏はその爲に最初好調に向つたが呼吸困難に陷り、八方手を盡したが死亡してしまう。待合室でネガール夫人から面と向つて「血清の實驗のためには、良人を殺してもかまはないのか。」と非難されるや、デュマルタンは憎惡と攻撃の的になつてゐるかの如く感じて、血清の殘りを棄て血清研究の書類を入れた折鞄を持つたまゝ飄然病院を去つてしまう。彼は八方から聞える非難の幻聽に耐えかねてとある橋の上へ現はれる。橋上から水面を見ると自分の影がうつゝてゐる。遂に彼は水面を指差して叫ぶ、「デュマルタンは彼處にゐる。私は鞄を預つたゞけだ。彼に鞄を返さねばならぬ。」と。そのまゝ河中へ投身する。直ちに救助されて自分の病院に送られ、意識を取り戻して病院の中を歩き廻るが、もう彼は別我となつてデュマルタンを捜してゐるのである。

彼が院長と血清の使用に就いて語つた時「私が責任を負ふ」と確言し、注射に際しても「自信がある」と言つてゐる。尤もネガール氏の死因は解剖の結果栓塞であることが分り、血清が有害でないこともわかつたのだから、彼の自信には根據があつたのかも知れない。しかし失敗して自信は崩壞し、前言を破つて責任を逃れようとした點から見て、彼の自信は寧ろナルチスムスに根差してゐたものと考へられる。資料欄に揭げた殺人犯の場合と多少は違ふが、矢張り超自我の呵責が人格分裂の契機となつてゐる。デュマルタンが自己の責任を自覺したならば、人格の分裂は起るまでもなかつたのだ。しか

ゝには繰返さないが、千人針問題に就いて少し論じて見たい。千人針の布は「之を肌に着けてゐると、戰時悉く家に歸つて來る」と云はれてゐる。これは勿論迷信である。併しこれが迷信であることは現時の教育を受けたものとしては誰知らぬものは無いのであつて、敢て岡田博士のお説教をまつまでもないことである。それを岡田氏は如何にも自分一人だけが氣付いたかのやうに今更らしく論じ立てるところにその不自然さがあるのである。

それほど迷信だと分りきつてゐながら何故それをやるのかと岡田氏は反問するかも知れない。併しこれは心理的效果が問題なのである。慰問袋だとて同じことである。高が五十錢か一圓位の内容のもの、貰つたとて邪魔になる位なものだと云へばそれまでだけれども、戰地にあつて内地から慰問袋が屆いたとなれば、誰だとてこれをたゞの五十錢、一圓のものとは考へないであらう。銃後の人々の眞心を深く身に浸み、感激することであらう。千人針とて同じである。まさかあん

し自我は超自我の鋒先を避けようとした。自我の危機である、何としても責任を轉嫁しなければならない、

二人でやつたことならそれも可能で或はあつたかも知れない、しかし出所は己一人にある。其處で彼は超自我に身を借つた、非難さる可きはデュマルタンである。彼を捜し出して「何故ネガール氏を殺したか。」尋ねゝばならない。斯くの如く心理分裂の生ずるのは動的に相克する二三の心力の抗爭であり、二つの心的コムプレクスの能動的軋轢の結果である。（フロイド全集第十巻三〇頁）又超自我と自我との妥協が破れ、此の二つが隔障を置いて對立した爲個々の同一化が遮斷される結果として、自我の分裂が生じたのである。（全集第七巻二七頁）デュマルタンが病院内を迷つてゐることを院長の許へ報告した看護婦から「デュマルタンを捜してゐるのだ。」と口走つてゐると聞かされて、院長が「精神分離症だ。」と云ふのに逆つてヴェンイ醫師が「精神的な危機が近づいてゐる。」と言つたのは自我崩壞の危機を指してゐるのであらう。此處で新舊學說の衝突が起る。ヴェントは「精神的苦悶が原因となつてゐるのであるから精神分離症ぢやない。」と云ふ。院長は「儂は科學者ぢや」と答へ、ヴェントは「私は科學者である以上に醫者だ。」と應酬する。兎に角院長は科學的であると信ずる暗示療法に取りかゝるが、どれとして效を奏しない。ヴェントは「デュマルタンをして自身を發見させることだ。」と云つて、院長からは哲學的だと云はれ、同僚からも「君も頭に來たらしい。」と冷笑されながらも、デュマルタンの口走る妄想の記錄を取り、治療の方針を求めて行く。

遂にデュマルタンは躁狂狀態を現出し出すやうになる。彼は彼自身を捜し

---

な薄い布片一枚で敵彈を防禦し得ると考へるほど日本の兵士も非常識ではあるまいが、日本婦人たちが千人寄つてともかくも自分たちの身の安全を希望してゐて呉れるのだと思へば滿更ら惡い氣もすまいと思ふ。つまりこれは銃後の人々の熱誠の象徵的表現であると思へば、岡田氏とてもまさか否定は出來まい。

併し何故に千人針がそれ程の威力を持つと迷信せられたかを科學的に研究して見ることは自ら問題が別だ。私はそれを試みて見やうと思ふ。岡田博士が科學者であるならばかうしたことこそ氏等のやらればならないことだらう。

今日では「千人針」と云ふが、昔は、「千人結」と呼んだ。この方が適切である。「千」は多數 無數を意味し、「結」は「產」を意味し、千度死すとも千度生れ代ると云ふ意味であるらしい。紐を結ぶことは結婚の象徵であると共に、それと直ちに結び付いてゐる出產の象徵でもあつた。それ故に國音にて「結び」と「產び」は同じであるのだ、御飯を握り固めたものを「むすび」と云ふのもバラ〳〵

に迷路に入り込んでしまふ。現實では病院なのだが、彼にはそれがわからない。彼は地下で地獄だと考へてゐる、しかも發電所みたいな所であり、ネガール夫人は其處へデュマルタンを監禁してゐるらしい。彼は八方から攻めたてられて到頭鐵柵をちぎつて振りあげ、發電機の陰にゐる攻撃者に突きかゝつて行く、現實に於ては此れが躁狂の發作なのであるが、妄想の世界では不安のために防禦につとめてゐるのである。超自我は、全虐待性を專に占有し、その破壞的要素は堆積し、無慈悲なる狂暴さを以て自我に對して激怒してゐる。此處に於て自我が相當の時期に於て躁狂に轉じてこの暴君を防禦しなければ自我を死に至らしめるやうになる。（全集第七卷五八頁）

ヴェントはデュマルタンの妄想の中に、ネガールが頻々と現はれることを知つて、夫人から彼の罪ではないと話して貰ふことにする。更に院長は最後の手段として夫人も又發病したから例の血清を注射して吳れと賴んで無害の注射をさせ、彼を暗示的に自信づけさせて見ようと云ふことになる。（口繪の場面）しかし此れもヴェントが豫言したやうに無效に終つた。注射器を持つた途端に彼は超自我に豹變した。そして院長が言つた言葉を口走り、「儂が許さん。患者を實驗に使つてはならん。」とか、又「殺人血淸だ。」とネガール夫人の彼を責めた時の言句を口走り、再び發作に入らんとする時ヴェントが「デュマルタンの居所を知つてゐる。」と言ひ出して、彼を百十二號病室へ連れて行き、一人で中へ這入れと言ふ。それはネガール氏の病室だつたのである、そして氏が死んだ時非常な良心の呵責を受けた思ひ出の個所であり、後に夫人から責められた時自分は自分で此んなにも自分を責めてゐる、しかもそれ以上攻撃するなら勝手にしろと、人格分裂の原因を生んだ部屋である。し

の御飯粒を結び合せたと云ふ意味のみではなく、兩掌を合せて母胎の如き形したる内より產まれ出たるものと云ふ意味も含まれてゐるらしい。

千人結びについてはまた、五黃の寅の女の一針は特に運が强いと云はれてゐる。それは、虎（寅）は千里走つて千里戾ると云ふ十二支の迷信に由るらしい。つまり千里の先まで出征してゐる兵士たちがまた直ちに千里を故鄕に戾つて來ると云ふ願望に協へたものである。これ等は人間の無意識空想と願望の研究對象として極めて面白いが、その迷信たることは申すまでもない。併し迷信は人間の深い心理に根差してゐる故に、これに訴へることは非常の際には效果的である。岡田博士など下手なことを云ふと袋たゝきに會ひますぞ。

## 支那人の排日心理

支那の排日、抗日、侮日の心理は一つにはそれに依つて國內の統一を圖らうとするためであると云はれてゐる。心理學的に云ふと、憎惡を外に向けることは、

かし彼には矢張り迷路の一ヶ所にある部屋だと思つてゐる。其處にはベットがあり假面をかむつた男が寢てゐる。假面を取つて見るとそれはネガール氏だ、いや良く見ると自分自身ではないか。と、相手が起き上つた。そして自分自身の失敗を承認して責任を負へと勸告する。彼が自己の別我から聞かされた言葉を承認せんとするや、周圍は二變三變して迷路の監禁所から百十二號室となり、彼は正常にかへつて病室を出、再び血清の研究にとりかゝることになる。

×

以上述べた通り發病から治療までを描いた二重人格或は重複人格の映畫である。トーキー始まつて以來初めての精神分析映畫だと云ふのだが、『心の不思議』でもさうであつたやうに療法に就いては明確には出てゐない。しかし療法の理論としては示唆するところがあるやうである。『心の不思議』もいゝ映畫であつたが、此れとても勝るとも劣らない作品である。アメリカで絶讃を浴びたとか云ふのも宜なる哉である。技巧的に面白いと思はれた點も少くないが、デュマルタンが河に飛び込み救はれたと云ふ經過の前に出産の手術が行はれてゐると云つた所など、うまく運んだものだと思つた。

此れは原名を"Die ewige Maske"（永遠の假面）と云ふ。從つて譯名より原名の方が遙かに面白い。全集第七卷三二三頁から引用して見よう。「二重性は元來自我の破滅に對する保障であつたのだ。ランクの云ふところに依れば『死の力の恐るゝに足らざることを執念深く信ぜんとすること』であつたのだ。」以下同書を參照されたい。即ち此れが ewig の解説ともなることながら、映畫の中に現はれる方面からも述べて見よう。

---

愛情を内に結束せしめるの力學的效果があるのである。それは宗教運動などが常に用ゐて來た手段であつた。外に異教徒を排撃することは、内に同教徒たちの兄弟コムプレクスを强める結果になつた。ナチス・ドイツのユダヤ人排撃にも同じ意味がある。その點に於いてユダヤ人のナチス・ドイツに對する關係は日本人の支那に對する關係と全く同じである。このやうに自分に類似して而も些細な點で違つてゐるものを排斥する事に依つて自分の優越性と純粹性とを維持しようとの心理を、フロイドは「小異の獨尊觀念」と名付けてゐる。さうしてこのやうな貧弱な、不自然な、人工的な獨尊觀念（ナルチスムス）に依つてやうやく自國の結束を固めなければならないと云ふことは、その國の結束が如何に弛んでゐるかを證明するものである。然るに内に結束が弛んでゐない國までが、そのやうな眞似をして排他的態度をとることが、近頃は流行しかゝつてゐるやうな氣がする。

## 献金と暴利

デュマルタンは血清を發見した時、患者の生命は自分の手中にありと確信した、自分は人間を不死たらしめることが出來るとまで己惚れてゐたのかも知れない。彼の妄想の內にチェルコ院長に似た人物が迷路の一室で、人間が死の刹那に放電する電氣を蓄電器に集めて、後此れを死者に通じて甦らすことを計畫してゐるのに逢ひその人物が蓄電器のスイッチを通ずると壁面へ怪しげな人影が現はれ畫面一杯の假面となる。不死なる者はデュマルタン自身でなければならない、如何なる超自我の暴虐振りに對しても自我は不死でなければならない。その爲には躁狂にまでなつた。自我の分裂も行つた。そして自己の不死を自畫自讃せねば安心し得ないのだ。假面をかむつて寢てゐたのはデュマルタン自身ではなかつたか。二重人格とは外形的には、似而非であり、內容的に唯一個の同一人なのである。假面の氣味惡さは親熟性の抑壓から正反對となつて來るものであらう。

×

以上で自我分裂に就いて本日見た映畫に關聯して述べて見た。分裂の樣相は右の如くであるが、分裂の原因たる超自我の內容に就いてはこの映畫に於いてもあまり判然してゐないやうに思はれる。手前味噌の樣ではあるが精神分析研究者に託して、不識者のためにプログラムの端へでも分析的解說を附して置くことが、興行者側の觀客に對する親切と云ふものではないだらうか。さうすることは商賣上の忠實でもなり、分析學の弘通のためにも益する所少くあるまい。

――一九三七、八、五――

---

北支事變勃發と共に國民一般の銃後の熱誠は日に〳〵に募つて、每日陸海軍兩省につめかける献金者の波は大變なものらしい。そのやうに至誠を披瀝してゐる他方に於いて、この戰機を利用して暴利を收めようとするのがあると見えて暴利取締令なるものゝ公布せられてゐることは、兩々對比して我々心理學徒にはいさゝか興味あることでなければならない。何となれば、私の知つてゐる或る献金家は實は過般の上海事變その他に際して相當巨額の暴利を食つた人であるからである。献金をする人々の內には純粹に至誠の人もあるではあらうが、中には暴利を食つておいて、その罪亡ぼしに献金してゐる人もあると云ふことを見逃すわけに行かない。併し、食つた暴利が百萬圓だとすると、献金はその幾百分の一に過ぎないのだ。つまり、献金は食られたる暴利につきまとうてゐる良心の咎めを拂ひ淸めるための淚金位の意味になるらしい。それで本人は氣持がよくなるのだし、國家のためにもなることなのだから結構なことには相違ないのだ。私は決し

てそれにケチをつけようとしてゐるのではない。寧ろ、人間の根深い良心の鋭さと自我の圖々しいまでの健康さに感心してゐるだけの事なのだ。

かう云ふことは併し現代の献金者たちに就いてのみ見られることではないので、昔からの歴史上の美談とされてゐることの内などの中にも隨分これに類似したことがあるのではなからうかと思はれる。例へば、織田信長や豐臣秀吉が皇居を修理したり尊王の費用を投じたりしたと云ふが、それ等の費用は自分等自身の居城を築いたり贅澤をしたりした金の何分の一に當るか。それを計算して見たら相當面白い結果が見えるだらう。つまり彼等は殘りの小使錢で人氣を購つたに過ぎなかつたのだらう。それでも購はないよりはましに相違ない。何となれば、購はるべきものを民衆が持つてゐるのだから……。

## 支那人の献金心理

献金は日本人ばかりでなく、支那人たちもやる。これは日本軍の徳、敵國民をも感動せしめたゝめだなどゝ自惚れてゐたら大變な間違ひにならう。通州その他に於いて支那人は在留邦人に對して甚だしい暴虐を加へてゐる。これは確に支那人が野蠻であるためもあらう。日本在の支那人に對して日本人が何等の危害を加へず、彼等を安全に保護してやつてゐるのは、日本人の國民性の優良なるにも因るであらう。併しそればかりだと思つたら、あまりに他國人を割引きし、自國を自惚眼鏡で見すぎるものであらう。それは一つには日本が支那に對して攻勢をとり優位にあるからである。もしこれが逆になり、日本が支那軍からこのやうに攻勢に出られ、優位に立たれたら日本人だつて何をやり出すか知れたものではないと思ふ。人間は江戸に於いてサディズムを滿喫してをれば、長崎へ行つてまでもまたサディズムを貪食しようとはしないものだが、江戸で毆られて江戸で敵討ちが出來なかつたら、せめて長崎へ行つた時にでも腹いせをやつてやらうと云ふ氣になるのは自然である。現に日本人も明治維新前後に於いては、西洋人から攻勢と優位に出られてゐたので、あの時分には相當「暴戻」なことを彼等に向つてやつたではないか。私は何も日本人にケチをつけようと云ふのではないが、自己反省のなくて自惚の鼻につくのは日本近來の一般風潮のやうだから、一寸警告を與へておくまでゞある。

支那人の献金心理の中には、小部分を前拂ひすることに依つて大部分を保全しようと云ふ心理が働いてゐるやうだ。在支那人の中には生命と財産とを併せて全部奪はれたものが少くない。在日支那人もそれと同樣な目に會つても仕方はないのだ。それと同じ目に會はせてやりたいと日本人達はさぞ考へてゐるだらうと支那人たちは思ふのである。そこに被害妄想が起きる。この被害妄想からのがれたるためには、全部の代りに一部分を、云はれるより先に出すことに依つて機先を制することにあるのである。

## 短刀を懷にする女

本誌前號本欄に不動坂住人氏は中村小時と云ふ「短刀を懷にする女」の事を書

いてゐたが、七月七日の各新聞にも「日本刀懐に男裝女」の事を報道してゐた。山口縣大島郡油田村貸座敷業壽樓こと綿壁はな方抱娼妓桑原喜代子(二八)と云ふ女で、それが六日午前一時頃、新宿二丁目附近を紺背廣、縞ズボンを着用、上着の内側かくしに日本刀を忍ばせつゝ徘徊してゐたので、四谷署員が怪しんで捕へたと云ふ。彼女は一年前からの馴染で夫婦約束までした島根縣鹿足郡柿ノ木村營林署人夫青木常吉(二五)戀しさに去月三十日、客の金三十圓と主人の金百圓とを盜んで壽樓をぬけ出し、途中斷髮男裝して柿ノ木村に男を訪ねた處、男には博(五ツ)と云ふ子供があり、而も女の男裝を見て愛想をつかし、俄に冷たい素振を示して歸れと勸めるので、トロッコに乘つて常吉父子に見送られながら歸る途中、口惜しさに一丈の崖下の河中に二人を突落したと申立てた。が、翌日の新聞を見ると、殺したと云ふのは嘘であつた。男裝したのは脱出女郎として搜査せられるのを避ける手段であつたらうが、それにしても、日本刀を懐にする必要はなからう。これも或は男が一緒になつてくれなければ殺すとか死ぬとか云つて脅かすためであつたかも知れぬが、何れにもせよ、男裝だの日本刀だのと云ふことに思ひ當ると云ふことが中村小時の場合と照合して、彼女の無意識に於いて偶然でないやうに思はれる。偶然でないと云ふのはつまり、彼女に男性コムプレクスがあるのだらうと云ふ推定である。

## 或る男性心理

五月十六日の「ジャパン・アドヴァタイザ」紙の報道するところに依ると、セルギアの一ジプシイは女と婚約しておいては結婚前日にそれを解消すること十六人に及んだが、最近十七人目の或る女と婚約したところ、その女は結婚の四日前に急に何處へともなく姿をかくして了つた。そこで本人大いに狼狽し、もし警察でその女をつれ戻してくれなければ自殺すると云つてゐるさうである。新聞記事の見出しがなか〳〵氣が利いてゐる。"Gypsy who jilted 16, finally nee's match,"(十六人を袖にしたるジプシイ、遂に好敵手に繞り合ふ)と云ふのだ。實に「好敵」だ。恐らく本人のやり口を知つてゐて、同性のために復讐する氣でやつた事であらうが、それにしてもこのジプシイの性心理は如何であらうか。女が自分の自由になると思ふと興味がなくなるばかりでなく、禁制をさへ感ずるのではなからうか。さうだとすれば、この第十七番目の女も警察官につれられて戻つて來なければよい。戻つて來れば、彼女はまた袖にされるだらう。戻つて來なければ、彼女は永遠のマドンナとして、その幻想を抱きつゝこのジプシイは歡喜の内に自殺することであらう。

## 語られぬ湯殿

出羽三山の內でも湯殿山は修驗道の祕境として有名だが、その神社の御神體なるものは昔から「聞けど語るな、語れど聞くな」と云はれてゐるほどのタブーであるらしい。さう云はれるとなほさら語つても見たくなるし、聞いても見たくなるし、眺めても見たくなるし、這入つても見たくなる。露出した岩の御身體(神

體）がなだらかな曲線を描いて起伏し、最後に急角度の窪みに落ち込んでゐる恰好が處女の腹部さながらであると云はれる。その上をぬるま湯の溫泉が流れて社殿も何もない神社である。月山から湯殿山に下つてこの御神體を拜した心境を俳聖芭蕉は『奥の細道』の中で「語られぬ湯殿にぬらすたもと哉」と抒してゐる。芭蕉がぬらした袂はペニス・シムボルであると解してはあまり公式的に過ぎるであらうか。實は私もまだ行つて見たことはないのだが、右のやうな記述を嘗て讀んで是非一度私も袂をぬらしに行つて見たくなつた。誰か寫眞でも持つてゐる人は見せて下さると有難い。神罰が中るつて？ 分析者には大丈夫！

## 一九三六年の愚蒙（漫畫分析）

こゝに掲載した漫畫はニユーヨークの繪入新聞『ニウズ』に掲げられたものらしい。我等は『英語研究』八月號から再轉載させて貰つたのである。畫家はバチラーと云ふ人で、一九三六年度のピューリッツァ賞の首席（千圓）を與へられたものであると云ふ。世界大戰後こゝに廿年、戰禍に對する人類の警戒心はやうやく薄らいで、歐洲の青年たちは再び戰爭の誘惑に負けようとしてゐることを諷刺したものである。「まアこつちへいらつしやい。具合よく扱つてあげますから…………。あなた方の父さんたちにも昔はお馴染でしたよ。」とかう娼婦（戰爭）は歐洲青年を顧みて云つてゐる。壁面には『一九三六年の愚蒙』云々『寢臺付貸間あり』ありなどの廣告が掲げてある。この畫家が戰爭の誘惑を象徵するに死神の娼婦を以てし、而もその女が亡父の關係した女であつたとしてゐるところに、即ちエディポス・コムプレクスに訴へてゐる特殊の才能あるところに、我等は感心する。さうしてこの畫がそれほどの賞を擬せられたと云ふ理由の中にはそれ等の無意識的感動が大いに與つて力となつてゐるのであらうと思ふ。でなければ、この畫はそれ以外の點では漫畫としてそれほど取りたてゝ變つた思ひつきでもないと思はれるから……。（完）




The News, New York's Picture Newspaper

"COME ON IN. I'LL TREAT YOU RIGHT
I USED TO KNOW YOUR DADDY"

Prize-winning cartoon by C. D. Batchelor was awarded first place and $500 by the Annual Pulitzer Prize Committee

講座

# 精神分析と性格分析

大槻憲二

精神分析學からの性格研究に就いては、既に本誌第四卷第一號に於いて高木力太郎氏が『性格學としての精神分析學』の題下に述べてゐられるが、こゝにも一度、多少重複する點もあるが、リヒャード・ステルバの解說に依憑しつゝやゝ組織的に述べて見よう。

最近の精神分析學は云はゞ一種の性格學の如きものである。クレチメルの性格學、その他性格學の名に於いて呼ばれるものは種々あるが、精神分析性格學はその內に重要な位置を占むべきものでなければならない。性格學は性格をその研究對象とする科學であることは申すまでもない。性格學としての精神分析學の特徵は、性格の由來をその本能の根源に溯つて研究するにある。換言すれば、その個々の特徵が如何なる本能、如何なる衝動(卽ち無意識)への防禦とし生じてゐるかを知らんとするにある。

「性格」と云ふ語の含む概念內容は端的に定義することは出來ない。それはいろ〳〵の見地(その見地の內には精神分析的見地以外のものも包括せられなければならない)から考究して定義せられなければならない。我々の立場では、性格は自我に歸せらるべきであると考へてゐる。性格の概念內容の最大部分を包含するものは、自我が內外の刺戟に對して不斷に、典型的に反應する、その反應の仕方の一切であつて、このやうに內外界からの刺戟を受けて一定の反應の仕方を持つてゐると云ふ點が、この自我の特質であつて、その點に於いてはこの自我は廣義の自我の他の部分(エス又は超自我)と異つてゐるのである。自我がエス、超自我及び現實から種々樣々の要求を受けてそれを如何に扱ふかと云ふことが、性格なるもの、大部分を構成してゐるのである。併しながら自分自身に對する關係(ナルチスムス)、持つて生れた攻擊慾の程度、並びにその攻擊慾の統制の仕方なども、性格を本能の方面から本質的に決定する。性格の個々の特徵は本能から直接的に連絡してゐるものとして、精神分析は認識するのである。で、食慾は肛門性感的部分本能から派生したものと認める。その他の諸特徵は或は本能の昇華せられたもの、或は本能の要求に對して自我の反

性格は肉體的根元に基いてゐる。幼兒期の體驗並びに還境は性格の發展の仕方並びに方向の決定せられるに對して重大な意義を帶びてゐる。それ故に或る本能が性格的特徴の中へ派生持續せられる程度、或は何らかの性格的特徴が本能に對する反應として構成せられる程度は、一に外的影響並びに還境の如何によつて定まる。その限りに於いて、性格は或る限度までは、當人の幼兒的抑壓を精神分析的に解除することに依つて改造を加へることが出來るのである。

類似的な本能的根源から發してゐるところの二三の性格的特徴を、分析學では一般に「性格」として纒めて考へる。元來、それ等の性格的特徴はそれぞれの本能的根元に應じて、或は肛門性格とか或は口唇性格とか名付けらるべきであるのだが……。その他、精神病學では、一定の症候群を具へて現れる性格を、それぞれの症候群の如何に應じて、或はヒステリー性格、强迫神經症性格などゝ呼んでゐる。フロイドはその『リビドー型に就いて』と題する論文に於いて、精神裝置の種々な分野に於けるリビドー配分に基いて性格學上の典型的法則を論じてゐる。フロイドのその說に依れば、第一にナルチス型の性格があり、この性格者はそのリビドーが主として自我に集中せられ、そこに於いてその働きを示す如き性格であり、第二はエロス型の性格で、この性格者のリビドーは主として對象に向つて纒綿せられ、第三は强迫型であつて、この性格者のリビドーは就中超自我に集中せられてある。が、大抵の場合、これ等の各々がそのまゝ純粹に現れることは稀であつて、多くは混合型として現れる。分析學の文献中に多く見られる性格型の主なるものは肛門性格、ヒステリー性格、ナルチスス型性格、神經症的性格、口唇性格、衝動的性格、强迫神經症的性格等である。その各々について、多少の解說を加へて見る。

一、肛門性格——

肛門性格の特徴は、その秩序癖、節約癖、主我癖にある。これ等の諸特徴は屢々同一人物に於いて合一して現れ、その内的關係を明示することがある。この等は時に衒學癖、剛情、貪慾などの形をとることもある。これ等の諸特徴を具へた人物の幼兒期の生活に於いては、肛門帶域を特に色慾的に强調してゐることが、明にせられるのである。かゝる兒童は適當の便所に行つて排便すると云ふことが大分後になつて習慣づけられる。彼等は快感を得るために、糞便を故意的に保留することが屢々である。彼等はまた、自分の排便時間を世話してくれる人に依つて一定せられることを拒むのである。彼等は何か氣

に入つたことがあると直ぐ排便することを肯んずるのである。このやうな幼兒的不行儀はやがて程經て失はれ、幼兒期が終ると共に、右に述べた、三大癖が擡頭して來る。かゝる觀察からしてフロイドは、これ等の諸性質が肛門帶域に於ける衝動量の變形に依つて生じたものであるとの假定を下すに至つた。その際に起る變形は昇華の形をとる。かくして糞便保留の快感から節約癖が生じ、或は反動形成となつて秩序癖や潔癖となる。これ等は激しい汚染慾に對する防禦として擡頭するのである。これ等三大癖の他に、肛門性格の特徴を數へ上げるならば、出來るだけ完全なものにしようと努力すること。異物の混入に對して敏感なること。組織、忍耐、徹底等に依つて感動を受け易く、またそれ等への傾向を有することなど。これ等は肛門性格の個々の特徴から如何にして生じたかを證明するにさして困難でない。

二、ヒステリー性格――

ヒステリー性格の特質としては暗示に對して敏感なること、本能感情の無拘束なこと、嘘をつくこと、虛榮心の强いこと、芝居がゝつてゐること、などを擧げることが出來る。併しそのやうな性格的特質を持たない人々にヒステリー症候を發見することが屢々であると共に、他方に於いて、さう云ふ性格の人でありながらヒステリー症候を示さない場合もあるから、「ヒステリー性格」と云ふ概念はヒステリーと性格との關係に就いては別に明白にしてゐるものではないのである。それのみならず、十分に役に立つやうにこれを鋭く定義することも出來ない。分析的に觀察すると、ヒステリー的な人々は性器的性慾と强烈な抑壓的傾向との間を交互に動搖してゐるのがその特質であると云ふことになる。かゝる交互的動搖と云ふ點からして、上述の特質の幾分は說明がつくのである。

三、ナルチスス型性格――

ナルチスス型性格の特質は、本人の自我へのリビドー纒綿が非常に强くて、そのため自我自身があらゆる場合に本人自身をその興味及行動の中心に置く如きにある。この型の性格者は罪障感に惱むことも少く、獨立的であり超自我の纒綿が少く、他人に介意することも少いから、る。ナルチスス型性格は屢々如何にも「人物」らしい感銘を與へ、そのために指導者、統率者として適當する。彼等は他人の事など頓着せず、とかくその本能的慾求を常に追及する傾きがあるから、そのナルチムスの特に强いものは浮浪人になつたり犯罪者になつたりする傾きがある。このやうなナルチスス型の性格者は、それのみならず、精神症への傾向を甚だ高度に示す。その事は、こ

の型の性格者が對象關係並びに外界關係に於いて緊密でないことを示す。

四、神經症的性格——

神經症的性格とは大抵の、生活上重要なる行爲を現實の要求に順應して實施せず、自分の無意識的な願望や、觀念に卽して實施する如き者を云ふ。神經症患者は病氣を惱んでゐるだけで行動に出るわけではないが、神經症的性格者は行動に出て、且つ自分の病理的な行動の仕方を、その行動の瞬間に於いては大抵の場合、自我に屬してゐるものと感じてゐる。そのやうな性格者は環境的反應を自分の無意識願望に從つて造り上げて行き、さうしてその際屢々、自分の罪障感のために甚だしい苛責を被る。卽ちその苛責のために一見運命的な陰慘な經驗を自分でして行くやうになる。或は種々な犯罪的な行爲を己むに已まれずやつて行くやうな結果になる。この種の性格の硏究としては、フロイドの『精神分析操作に依りて見たる二三の性格型』、フランツ・アレキザンダの『神經症的性格』などがある。

五、口唇性格——

口唇性感が性格構成に對して如何なる影響を及ぼすかを特に硏究したるものにカール・アブラハムがある。口唇的本能と典型的な聯關ある性格的諸特徵を一括して口唇性格と呼ぶ。口唇性格の個々の構成は、本人の乳兒期が幸福であつたか、或は十分に母乳滿足を與へられなかつたかと云ふことに掛つてゐる。乳兒期が幸福であると、大抵の事には動搖せしめられない、樂天家が出來上り、そのために屢々活動や個人的擴充が不十分になる。またそのやうな性格者は屢々、何らかの確乎不動なる（もしそれが可能な場合には、國家的な）地位や官位に依つて、能分の生活支持の糧を生涯に亘つて保つやうにすることもある。時々はこれ等の性格者は惜しみなく施與した母親に同一化して、特に氣前のよくなることもある。またこの氣前のよさが口唇帶域に結びつくと、無暗矢鱈な饒舌家が出來上ることもある。

乳兒期に十分に滿足を與へられないと、さうしてそれが定着した者には何となく物欲しさうな一面が殘る。謎とく吸付いてゐると云ふやうなところが本質的に殘るやうになる。彼等は何と斷られても執念深く要求を持續してゐる。

乳齒が生える前後の嚙付きの段階に強く定着すると、虐待的な特徵が判然と現れて來る。吸付きは元來吸血鬼的なものだからである。嚙付きの癖、貪慾、嫉妬、羨望などの諸特徵は同樣に、嚙付き段階から生じてゐるものである。性急で、待て暫しがなく、落着きのないことは

口唇性格者の特徴となつてゐる。これは肛門性格者の保守的、我慢強きに對立するものである。この方面の文献としてはカール・アブラハムの『性格構成の精神分析的研究』がある。

六、衝動的性格――

ヰルヘルム・ライヒは衝動的性格なるものを他の神經症的性格から區別して假定してゐる。彼に依ると、この性格はその衝動衝が病的なものとは感ぜられず、たゞその衝動に多少とも禁制がないのである。その特徴と並んで、神經症的症候と變態的性向とが交互に現れる。ライヒの意見に依ると、このやうな衝動的性格の構成せられる原因は超自我の形成が不十分であり、そこに缺陥があつて、そのために抑壓がいびつになつてゐるからだとの事である。超自我の形成は幼兒期に於ける對兩親關係の遺産であり、その心理的に入込まれたものであるとはフロイドの發見であるが、その對兩親關係に存する愛憎相反並存性に強い相互矛盾が存するために超自我の發達が部分的に、不十分になるのだ。アレキザンダの所謂神經症的性格や不良兒浮浪者との區別は判然しない。

七、強迫神經症的性格――

強迫神經症的性格は肛門虐待的なリビドーの構造から說明がつく。愛憎の二者が強迫神經症的性格の精神の中に流れてゐる。この性格の不確實なこと、疑ひ深い傾向生活上の優柔不斷なことなどの如きは、愛憎二者並流の事實からして說明がつく。愛憎の相反並存的葛藤は本人の愛してゐる相手に對する多くの行動の上に轉位せられて行き、從つて意志の發動が障害せられ、またその葛藤が本人の思考の上に轉位せられては容易に種々の強迫觀念となつて現れる。そこに全能念慮があると、彼の迷信傾向は著しくなつて來る。内的不確實があると、思考や行動上に反復的傾向が必至となる。リビドー組織が肛門虐待的であると、それに應じて肛門性格の三大特徴たる節約癖、秩序癖、並びに潔癖が生じて來る。これ等三大癖は、これ等諸々の特徴の強さのために抑へられてゐる肛門虐待的衝動に依つて屢々グロテスクなものに分裂せしめられ強迫的性格となることがあるのである。

八、尿道性格――

その他になほ尿道性感に基く尿道格性なるものがあつて、その性格的特徴は名譽慾の強い點であるとせられてゐるが、性格型分類の内には、多くの場合、これは加へられてゐないやうである。フロイドも尿道性格に就いてはその『文明論』の中で簡單に言及してゐるの みである。卽ち「精神分析の經驗に徵するに、野心と火と尿道性感とは常に必ず密接の關係のある事が分るのである」

と。（拙譯『社會、宗教、文明』一七二頁參照。）なほ尿道性感と尿道性格との關係に就いては、本誌前號『アブフウブ』欄に相當詳しい論及がある、參照せられたい。

×

精神分析はその發祥の頃には、患者の症候の由來を知つてそれを分析解消することがその治療の本質的使命であつたのだが、その後、漸次發達するに連れて、患者の人格、人物が如何なる過去の經驗に依つて決定せられるに至つたかを、分析知悉するにあるやうになつた。從つて、本人の典型的な行動、態度、特質的な防禦方法、如何なる目的に向つて如何なる努力をするかと云ふこと、如何なる事を偏好し、如何なる事を反撥するかと云ふ事など、一言以て掩へば、性格を全的に吟味することが、その目的となつた。何となれば、症候なるものは屡々たゞ、本能の力やそれに對する防禦の力などの撞着したり妥協したりして現れるものに外ならぬからであり、またそれ等の妥協形成や撞着形成は性格的特徴となつても現れるからである。さうして性格的特徴となつて現れる場合は症候として現れる場合よりも一層把握し易く、從つて直し易く、昇華させ易い。從つて本能の亢奮をそのやうな風に支配することに依つて、症候から「性格的反應根據」（ライヒの用語）を取去することになる。それ故に、精神分析はその本質的な部分に於いては、畢竟するに性格分析に外ならないのである。最近の十年間に於いて症候神經症が病的性格又は神經症的性格の方面から見られるやうになつたゝめに、性格的な態度や考へ方と云ふものが分析主題にせられるやうになつた。さうしてかゝる主題を性格分析と呼ぶことは當然でなければならない。

ヰルヘルム・ライヒはそれ故に、自家の精神分析療法を「性格分析法」と名付けてゐる。何となれば、彼は全體としての性格が無意識本能力に對して抵抗し、從つてまた分析に對しても抵抗すると云ふ風な一面から考へてゐるからである。分析に於いて患者の抵抗を克服することはその人物の中核、卽ち性格を把握することであり、つて彼が抵抗を解消する事は性格を分析する事である。

精神分析に依る性格研究に就いては、なほ云ふべきことは多いが、只今はたゞ一般的の講話として右の程度に止めておく。（完）

# 精神分析學語彙（廿九）

一、本能感情 Affekt ——神經症は種々な本能感情力の葛藤のために生ずるとの認識に依つてフロイドの研究は早く本能感情の上に注がれた。我等はアッフェクトを假りに本能感情と譯して見たが、ドイツ語では Gemütsbewegung（心情の動き）と云ふ譯語を當てゝゐるやうである。實際、この本能感情の心理生活中に於ける役割は甚だ重要である。本能感情は何よりもまづ發散と云ふ過程を表はしてゐる。つまり、內外の刺戟に依つて心理裝置の中に齎らされたる心理エネルギーの解放を意味する。本能感情が普通の感情（Gefühl）と異る所以は、第一にその激しさが違ふし、第二にその人の性格全體を搖り動かすと云ふ點にある。故に本能感情以外には意識中にはあまり他の內容は存在しない。本能感情發散の重要さに應じて、そこに筋肉組織並びに多數の腺に對する神經支配があり、從つてそこに快不快の感情が生ずる。フロイドに依れば、あらゆる本能感情の中核をなすものは一定の重要なる外傷的體驗の反復であり、その反復せられるこれ等の體驗は極めて早期のものであつて、一般的なものは個人の前史にあるのではなく、種族の前史にあるのである。このやうに、本能感情の狀態は古代的の、外傷的な諸體驗が心理生活の中で、滓として殘つてゐるものである。不安の本能感情狀態に對しては、出產の體驗が、本能感情の原型であると考へられてゐる。本能感情の起源に關する精神分析學のこのやうな考へ方は、ダーギンの進化論的考へ方と甚だ近似するものがある。ダーギンは本能的行動の根源に、本能感情があると考へてゐる。何れにしても、本能感情は、本能と密接な相互關係にある。就中、本能感情はそのエネルギーを本能から抽出して來て、本能的緊張に對して發散の可能を與へるものである。

本能感情の抑壓せられてゐる場合には、本能感情の代表してそれを解消したことのある知覺、觀念、願望などは無意識のまゝになつてゐる。本能感情のエネルギーはエスの內に殘存してゐる。さうして自我に對する攻擊と云ふ逆經綿に依つて保留せられてゐる。本來の代表（觀念、願望の如き）から解放せられた本能感情エネルギーは、エスの中へと轉送せられ、そこで凝縮せしめられ、變形せしめられる。症候に於いてもまた本能感情のエネルギーは變態的に利用せられることがある。

一、本能感情量 Affektbetrag ——心理的機能の內でも量に關するあらゆる性質を具へてゐる機能は、これを區別すべきである。例へば、增大したり、減少したり、轉位したりすることの出來て、恰も電流が肉體の表皮を傳はるやうに、觀念の記憶痕跡上に擴がる如きものである。かゝる意味の量（それは實際に於いて計り得るものではないが）をフロイドは、亢奮量（Erregungsgroesse）とか本能感情量とか名付けてゐる。この概念の內容は「心理エネルギー」と云ふのと實際に於いて一致してゐる。

——（未完）——

# 内外彙報

## アレキザンダ博士の近翰

現在米國シカゴに精神分析學研究所を經營するドイツ出身分析者フランツ・アレキザンダー氏とは、本研究所は大分以前から二三の通信を交して來たが、去る四月二十三日付にてわが大槻氏はシカゴ研究所より贈られたる出版物を感謝し、アレキザンダー氏が近影の寄贈を乞ひ、またわが木村廉吉氏がアレキザンダー氏の著述に特別の興味を持たれ、これを邦譯せんとの意ある故その許可を木村氏に與へられむことを乞ふたところ、アレキザンダー氏から三月二十五日付にて左の返書があつた。

「大槻樣。四月二十三日付貴翰並びに御惠贈の出版物澤山、誠に有難う存じました。私はたゞこれ等を讀みたいと思ふのみであります。當方からお贈りしました出版物はどうか御自由に御利用下さい。

拙著「精神分析學の醫學的價値」を木村廉吉氏が日本譯して下さる事は甚だ光榮であります。勿論、私はそれに就いて全幅を貴下にお贈りします。また御希望の寫眞も別送しました。もし版權その他種々の條件に就いて何か形式的の書類が必要でしたらそれを作つて當方にお送り下さい。署名して御返送申上げます。

敬具

フランツ・アレキザーダー」

手紙よりやゝ遲れて寫眞も到着した。それは本誌本號卷頭に掲げてあるから御一覧を願ひたい。アレキザンダー氏は現下分析學界の大立物であるが、その略傳については他日詳報する機會があらう。

## フロイド先生重態？

去る八月十日の都新聞は「フロイド氏病床に臥す」との題下にキイン發同盟の報道を掲げてゐた。曰く「フロイド精神分析として精神分析の新境地を開いたキイン大學心理學教授ジグムント・フロイド氏は、心臟病のため七月九日以來キインの自宅に於いて病床に臥してゐる。何しろ今年五月六日で八十一回の誕辰を迎へた老齢の事とて再起を危ぶまれてゐる。氏は一八五七年フライベルヒに生れ、後パリに留學、彼の新學說は最初嘲笑を買つたが、漸次學界の認むるところとなり、今やフロイド精神分析として人口に膾炙する迄に至つてゐる」と。

本研究所からは早速アンナ・フロイド孃宛に見舞狀を出しておいたが、果して事實とすれば、老齢の事故、相當心配せねばなるまい。

## 最近國內事實

▼性科學研究會では「精神分析と性科學」を主題として七月二十八日夜、日本橋區八重洲園に於いて集會を催し、大槻憲二、木村廉吉、式場隆三郎三氏の講演を乞うた。

▼精神衞生學會發行『腦』八月號。アレキザンダー原著、木村廉吉譯「精神分析の醫學的價値」

▼「少年若妻殺し」高橋鐵稿「金」八月號、

▼「變態性慾の精神分析」大槻憲二談「講演」第三百六十六號發禁となる。

▼「戀愛性慾の處置」大槻憲二稿「人生創造」八月號及び九月號。

▼「精神分析から見た秀吉と家康」大槻憲二稿「現代」八月號。

▼「酒をめぐる鬪爭の心理」大槻稿「雜記帳」八月號。

▼「主婦の友」八月號附錄「夫婦性愛讀本」に大槻氏の談話あり。

▼「精神分析とは何ぞや」大槻氏談「生きて行く道」九月號。

▼本誌前號內容に關しては本號卷頭の廣告を參照ありたし。

## 本研究所研究會例會

六月例會は二十一日夜、例により萬世橋驛前アメリカン・ベーカリにて催す。食前、大槻氏フロイド「精神分析入門」の新譯の始の方を朗讀解說せられ、また本誌前號の時評を朗讀して批評を乞はれた。

食後、新來會者の紹介があつた。新來者は式場隆三郎氏、「科學ペン」編輯部の富田幸氏、新會員田澤一三氏等であつた。

木村廉吉氏先づ立つて氏の近著「精神分離症の精神分析的考察」の內容につき紹介的の話があつた。續いて高橋鐵氏は「服飾に就いて」分析的觀察を下され、式場氏は下手物愛玩の心理について座談せられた。大槻氏それにつき、德川家康の女の下手物愛好の心理を談じて千姬の分析に及ばれた。本號所載の論文はその推敲せられたものである。

高橋氏はまた續いて「諸國お土產」に就いて例により才氣ある分析觀察を下され、大槻氏はまた最近取扱はれた「或る强迫神經症患者の場合」につき報告せられた。

出席者は右言及諸氏の他に、小山良修、內藤梅子、吳無限、北垣照雄、倉橋久雄、小林一、田中虎男、土屋秋實、加藤己酉三郎、大槻岐美の諸氏であつた。なほ、大久保眞太郎、岩倉具榮、富田義介、宮田齊諸氏から鄭重な缺席挨拶があつた。

×

七月例會は十九日夜、同所に催された。定刻、司會者は本誌前號「語彙」欄につき、術語解說を試みられた。食後、初出席者正木きみ子さんの紹介があり、續いて小山良修氏はオースタリーの小兒科醫ルドルフ・ノイラートの「早熟兒の研究」を紹介せられた。心理學的ではなく醫學的な研究ではあるが、我等にも非常に參考になるところ多かつた。

次に大槻氏立ち、女性感の發達に就いて述べられ、また學問の二目的とその相互矛盾に就いて平素の所懷を發表せられた。卽ち學問は一方認識を深めるものであると共に、一方對象處理の手段である。片方に力を入れると他方がお留守になり勝ちで、兩々均等を得ることはなか〳〵むつかしいと云ふ主旨であつた。

次に高橋鐵氏は「若妻殺し」に就いてその社會分析を試みられ、塚崎茂明氏は「殺人心理の分析」三件に就いて所感を語られた。本號所載の分はその推敲である。

出席者は右言及諸氏以外に、土屋秋實、吳無限、長谷誠也、倉橋久雄、富田義介、大槻岐美、木村廉吉、大久保眞太郎、北山隆の諸氏であつた。缺席挨拶のあつたのは田中虎男、岩倉具榮、松井定之、小杉長平の諸氏であつた。

## 本研究所講習會例會

七月例會は五日夜、研究所に於いて催された。『分析戀愛論』中に於けるヒステリーに關する二論文を精讀討議した。その內容に聯關して延島英一氏は自己色感的な習慣に就いて告白せられた。またロシア現下の政情、讀賣新聞所載「夢判斷」の評判などが話題に上つた。あの「夢判斷」の答辯者は本研究所には關係ない事をこゝに明言しておきます。時々尋ねる人があるので念のために……。併し時々はなか〳〵當つてゐる答辯もある。出席者は北山、倉橋、加藤、小林、北垣、延島、大槻、同岐美の諸氏であつた。

八月は研究會、講習會とも休みである。

## 研究所便り

▼八月八日、大阪在住の會員廣井重一氏來訪。商用の途次御立寄り下さつたとの事。會員諸氏に宜しくとの傳言がありました。

▼八月九日、臺灣高校生、山口房雄氏來訪。新しく特別誌友になられました。學校でも非常に興味を持つて讀んでゐる人があるからとて御高援を約されました、感謝いたしてをります。

▼北山隆氏は夏休中北海道旅行に出られました。八月下旬歸京の豫定ださうです。

▼高橋鐵氏の御父上は七月二十二日御死去なされました。謹んで哀悼の意を表します。

▼小林一氏出征せらる。八月十六日付にて宇都宮輜重第十四聯隊に應召する旨報告あり、これを以て別れの御挨拶に代へるが、皆樣に何卒よろしく、とのことであつた。あまり急なので御見送りも出來ず殘念に思つてゐます。次々と研究會員のうちにも出征される方もあることゝ覺悟してゐますが、何卒少しも早く當方にお知らせ下さい。私共としても心から感謝の意を表して御見送りに出度いと思ひます。小林さんも何卒御無事で目出度くお歸りなさいますやう切に希望いたします。

▼大阪の狩野儀三郎氏より、殘暑見舞を頂きました。皆さまによろしくとのことであります。

▼大槻氏は、長男貞一君獨乙學協會學校中學校から房州館山に水泳に行かれたに就き、兩親も樣子見がてら七月末頃に兩三日同地に行かれた。

# 編輯後記

本號を手にされる頃は、最早暑さも峠をこしてたゞ秋の氣の動くのを感ずるのみとなりませう。皆樣も御元氣で夏を過ごされた事と存じます。

扨て、御存知でせうが、この頃の紙價の暴騰と來ては唯事でないものがあります。それは、パルプの缺乏と云はれてをります。人絹原料にも用ひられることは勿論ですが、××の製造にも用ひられるさうですから、近時世界の動きを見ますと、心ひそかに頷かれるものがあります。人類の平和に多大の關心と、願望をもつ我々の仕事が、このやうに、かゝる消費傾向に、一番敏感な影響を受けるとは皮肉な感じがいたします。

就きましては、經營の方では、誌代も、頁數も紙質も据置きのまゝにいたし度いと苦慮しております。何卒皆樣も特別誌友として直接御購讀下さいますやうお願ひいたします。固定した直接購讀が增えますと、見込みばかりの澤山の雑誌を作らなくともすみ、安心で確實な經營をする事が出來ますから、從つて、皆さまの御手許にも充實した雑誌を差上げられるわけでございます。何卒斯學發展と存續のために御協力下さいますやう切に願上げます。

×

直接購讀、特別誌友と云へば、私は本誌創刊以來、つゞけて、大方は、發送の表書をして來ました。第五卷になりますから、それについても種々な思ひ出や感想があります。御上京の時に心してお立ち寄り下さる方などは名前を筆にしながらお顏を思ひ浮べたり、その時の御言葉などをふと思ひ起したりします。多分漫性の御病氣で、入院中の方など、暫くたつての移轉通知に依つて御全快なされたらしく想像して心が輕くなります。それから私が相當關心を持たされるのは、今まで何々方としてあつたのが、突然一戸の御主人となられたらしき轉居通知であります。御結婚なさつたに相違ないと想像したりします。然し、東京にゐられた方が病を得られて田舍の生家に歸り靜養するからそちらへ雑誌を送るやうになどの御便りを頂きますと、今更ながら都會の惡空氣を考へ、早く御病氣が快くなられるやう、もし心的コムプレクスがその病氣に影響してゐるのならば、一日も早く解消して頂き度く、その爲めに我が精神分析が役立つこと力强いものがあることを祈らずにはゐられません。

こんな風に、袋の表書きにも相當、當事者のリビドーが、費されるのであります。然しこれはリビドーの浪費とばかりは云へません、どうしてもこんな事が考へられて、そして、それが當事者のよろこびでもあるからです。リビドーを押擴げる事は時により、誠に快きものがあります。但し、これはリビドーの押賣りではありません。併し、やはりどうやら反響がある方が嬉しく、皆さまからの種々な御感想も伺つてみ度い氣がします。何卒、特別誌友諸氏もたくさんの御寄稿を御願ひ申上げます。(岐)

×

本號には新進の方々が大變活躍せられました。且つ長篇論文が多くて編輯者は喜

んだり面喰つたりしました。短篇の内にも奥本氏の「涅槃原則」塚崎氏の時評など瞠目すべきものでせう。

×

新執筆者は岩倉澄子さんだけですが、澄子さんは具榮さんの令妹で、東京女子高等師範學校の專攻科三年に在學せられます。

×

新在外會員（特別誌友）は左の五氏であります。

▼朝鮮新義州……大西篤吉氏
▼鹿兒島縣……毛利一郎氏
▼支那青島……田邊一雄氏
▼臺　北……山口房雄氏
▼新潟縣……谷内正夫氏

青島危険につき、同地日本人小學校訓導たる田邊一雄氏に早速見舞を出しておいたが、無事を祈ります。

別頁「特別誌友」規約御一覧の上、せいぜい御加盟の程願上げます。



次號は『幼兒心理研究』號として、從來の兒童心理研究よりはなるべく低年齢兒童の心理を扱ひたいと思ひます。

一、早熟兒の生理と心理……小山良修
一、幼兒に於ける現實　の發達段階（フェレンチ原著）……伊藤龍朗譯
一、「にんじん」を生んだもの倉橋久雄
一、幼兒心理の特質……大槻憲二
一、異常兒と正常兒……木村廉吉
一、女性生活の特質……高水力太郎譯

その他、延島氏の「ナポレオンの性格」岩倉氏の「故大佐の令嬢たち」の二篇は完結しますし、長谷川氏の「心理研究ノート」、不老泉院主氏の「アプフウプ」などは毎號の呼物として、必ず繼續させます。なほ左の譯文を附錄としてなるべく掲げたいと思つてゐます。

一、戰爭と死（フロイド）…伊東豐夫譯

時節柄必讀の一文でありませう。




昭和十二年八月二十五日印刷
昭和十二年九月一日發行
（隔月刊）定價五十錢

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯及發行　大槻憲二

東京市淺草區北三筋町五五
印刷所　三進堂印刷所

定價一部　五拾錢
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割増に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館
北隆館・（大阪）福音社

# 研究所事業案内

一、分　析　部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歴、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〲適當の人々にふり向ける。

三、敎　育　部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出　版　部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研　究　會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講　習　會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

# 特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得。

一、特別誌友は司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。

（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

# 特別誌友申込書

住所

姓名

年齡

職業

經歷

感想

# 合本 單册『精神分析』(特輯題目及び定價)一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

## 第一卷・上

創刊號(昭和八年 五月)「エディポス研究號」＊
第二號(同 六月)「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號(同 七月)「教育研究號」
第四號(同 八月)「夢の研究號」(第一)＊
(合本としては品切)

## 第一卷・下

第五號(同 九月)「兒童心理研究號 第一」＊
第六號(同 十月)「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號(同 十一月)「戰爭心理研究號」
第八號(同 十二月)「夢の研究號」(第二)
(合本としては品切)

## 第二卷・上

第一號(同九年 一月)「心理療法研究號」
第二號(同 二月)「女性心理研究號」
第三號(同 三月)「傳說研究號」
第四號(同 四月)「文學研究號」
金二圓五十錢 (送料共)

## 第二卷・下

第五號(同 五月)「ドストイフェスキー研究」
(六月休刊・以下隔月刊行)
第六號 同 七・八月)「戀愛心理研究號」
第七號(同 九・十月)「性慾心理研究號」
第八號(同 十一・十二月)「夫婦生活研究號」
金二圓五十錢 (送料共)

## 第三卷

第一號(同 十年一・二月)「兒童心理研號」(第二)
第二號(同 三・四月)「宗教心理研究號」
第三號(同 五・六月)「自殺・情死心理研究號」
第四號(同 七・八月)「同性愛と異性愛」
第五號(同 九・十月)「家庭問題と親子關係」
第六號(同 十一・十二月)「常態及び變態の性心理」
金三圓 (送料十五錢)

## 第四卷

第一號(同十一年一・二月)「性格改造研究號」
第二號(同 三・四月)「母性と妖婦研究號」
第三號(同 五・六月)「夢と幻覺研究號」
第四號(同 七・八月)「兒童分析と敎育研究號」
第五號(同 九・十月)「愛慾葛藤の諸問題」
第六號(同 十一・十二月)「道德の分析」
金三圓 (送料十五錢)

## 第五卷

第一號(同十二年一・二月)「思春期の研究」
第二號(同 三・四月)「不良少年少女の心理」
第三號(同 五・六月)「生理と心理」
第四號(同 七・八月)「男性と女性」

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

# ドストイェフスキーの精神分析

ノイフェルド原著・平塚義角譯

定價1圓・送料6錢　（四六版一六〇頁・紙裝函入美本 口繪・ドストイエフスキー肖像）

ドストイェフスキーは人間の無意識を實に鮮かにその生活と文學の中に現はしてゐる、世にも稀な作家であつた。彼は人類一般の運命を一身に荷つてゐるかの如き觀を呈してゐる。從つて、ドストイェフスキーの精神分析は、人類一般の無意識の分析的研究でもある。

原著はフロイドやアドラーのド氏論に深い暗示を與へた名著であり、譯文また流暢で、恐らく何人にも興味深く讀まれるであらう。本書は實に精神分析學の實證的入門書であり、同時に精神分析的文學研究法の好見本でもある。

## 本書の内容




東京精神分析學研究所　出版部
本郷區動坂町三二七
振替東京七八八一七番

昭和六年七月卅一日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行




今泉忠義・大西雅雄・金原省吾・名取堯
責任編輯

◇我國唯一の月刊言語學雜誌・・・
◇國語教育の科學的研究道場・・・
◇文學理論の徹底的研究舞臺・・・

# 直接購讀會員を募る！

本誌は、今後「コトバの會」の會員にだけ頒つ事になります。無駄を省いて定價を下げ、廻送をやめて直接お手に入れます。此際速かに御入會にならないと、バック・ナンバーも絶對にお手に入らなくなります。

送料込購讀料（特別割引）

| | |
|---|---|
| 一ケ年 | 金五圓二十錢 |
| 半ケ年 | 金二圓七十錢 |
| 三ケ月 | 金一圓四十錢 |

## コトバの會々則

一、本會は言語及び言語文化・文藝及び文藝科學の研究を目的とす
一、本會は左の事業を行ふ
イ、月刊雜誌「コトバ」發行
ロ、研究會・講演會・講習會開催
ハ、その他必要なる事項
一、本會は左の會員を以て組織す
イ、普通會員　「コトバ」半年以上直接購讀者
ロ、特別會員　別に規定する特別關係者
ハ、贊助員　特別會員一同の推薦者
一、普通會員は研究發表・質疑・その他本會の事業に關し種々の便宜を得
一、特別會員中より幹事を選び會務を處理す

東京市小石川區戸崎町十三　多木方
發行所　コトバの會
振替東京一三七九八四番

V. Jahrgang, Heft 5. Sept.—Okt., 1937. Erscheint zweimonatlich.

# ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Charakteranalyse)



**Preis des Einzelheftes, 50 sen**

**Tokio Psychoanalytischer Verlag**

327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon